

昭和四十七年三月

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第二十集

福岡市教育委員会

多々良遺跡調査報告書正誤表

																	真 行	
																	誤	
39	38	32	29	28	24	22	19	11	11	8	7	6	6	6	3	昭和十五年九月四日		
17	6	18	4	1	17	6	5	1	17	8	12	10	3	6	3	森貞二郎		
器種には碗形																浦口英夫		
																英夫		
既して前二者に比べて (第14図～第25図)																東方に駕與丁池廐寺		
																小範囲に遺物の散布地		
既して前二者に比べて (第14図～第25図)																東方に駕与丁池廐寺		
																小範囲に遺物の散布地		
底は細かい縦 (第14・15図)																遺物発見		
																一部切れ同一線		
																底は細かい縦		
																既して前二者に比べて (第15図)		
																概して前二者に比べて (第15図～第25図)		
																先端部が細くなる 22ので図		
																判読しにくいか 理解されはしなか。		
																村落遺構より		
																先端部が細くなるので図		
																判読しにくいか 理解されはしないか		
																最後に古墳時代～平安前期③と		
																最後に古墳時代～平安前期と		
																三、遺構について		
																三、建築遺構について		

NO. 16024

(9頁) 第22図多々良遺跡発掘区要図→第2図多々良遺跡発掘概要図
第3図多々良遺跡周辺遺跡分布図→多々良遺跡周辺遺跡分布図

(53頁) 注②小野忠^昌→小野忠^熙
(64頁) 注⑤三島格→注③三島格
(76頁) 小野忠^熙→小野忠^熙

多々良遺跡周辺遺跡分布図

多々良遺跡

昭和四十七年三月

福岡市教育委員会



序文

近年、土地開発の急激な進展により埋蔵文化財の保護について多大の問題を生じております。福岡市においては、この問題の解決のため、やむをえず破壊される遺跡については、事前の発掘調査を実施するよう努めております。

とくに、地理的に大陸に近く、遠古より彼我の関係の深かった福岡市においては、それだけに貴重な遺跡が数多く、後世の人々のためにも破壊される遺跡の記録を残しておくのは吾々の義務と考えます。

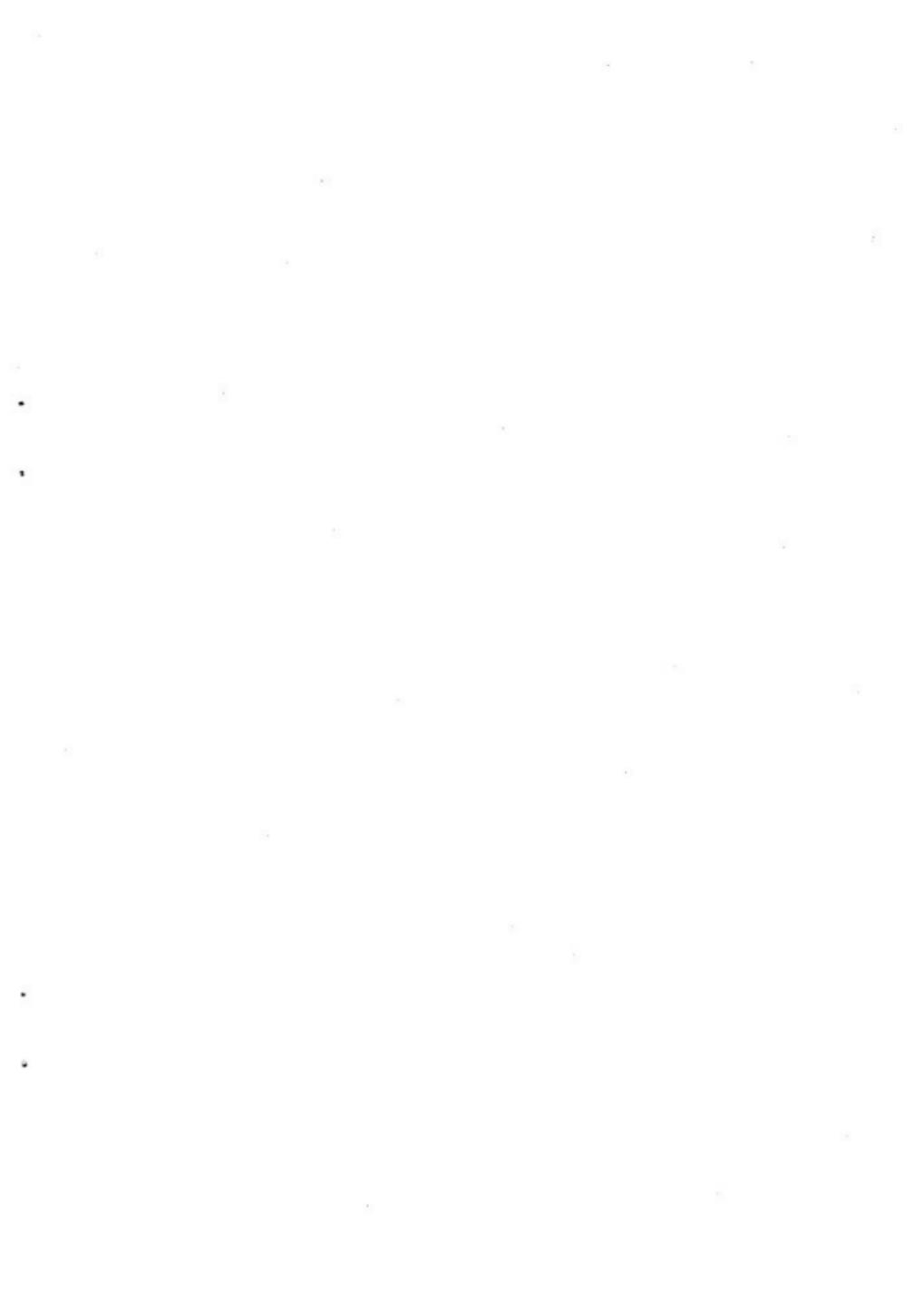
この度、福岡市都市開発局が、多々良地区に流通業務団地の設置を決定されました。ところが本地域には、条里制造構のあることが先年より解っていたので、造成に先立ち記録調査の措置を講ずることとなり、ここに福岡市教育委員会が調査を行いました。調査に際しては、調査指導員の先生方、多々良地区の方々、および関係諸方面の多大の御協力と文化財に対する深い御理解をいただきました。ここに深甚の敬意を表するものです。

本報告書が、新しき福岡市ため、市民の方々に御活用いただければ幸いです。併せて年々失われゆく埋蔵文化財に対する一層の御理解と御協力を願つてやみません。

昭和四十七年三月

福岡市教育委員会

教育長 豊島延治



例　　言

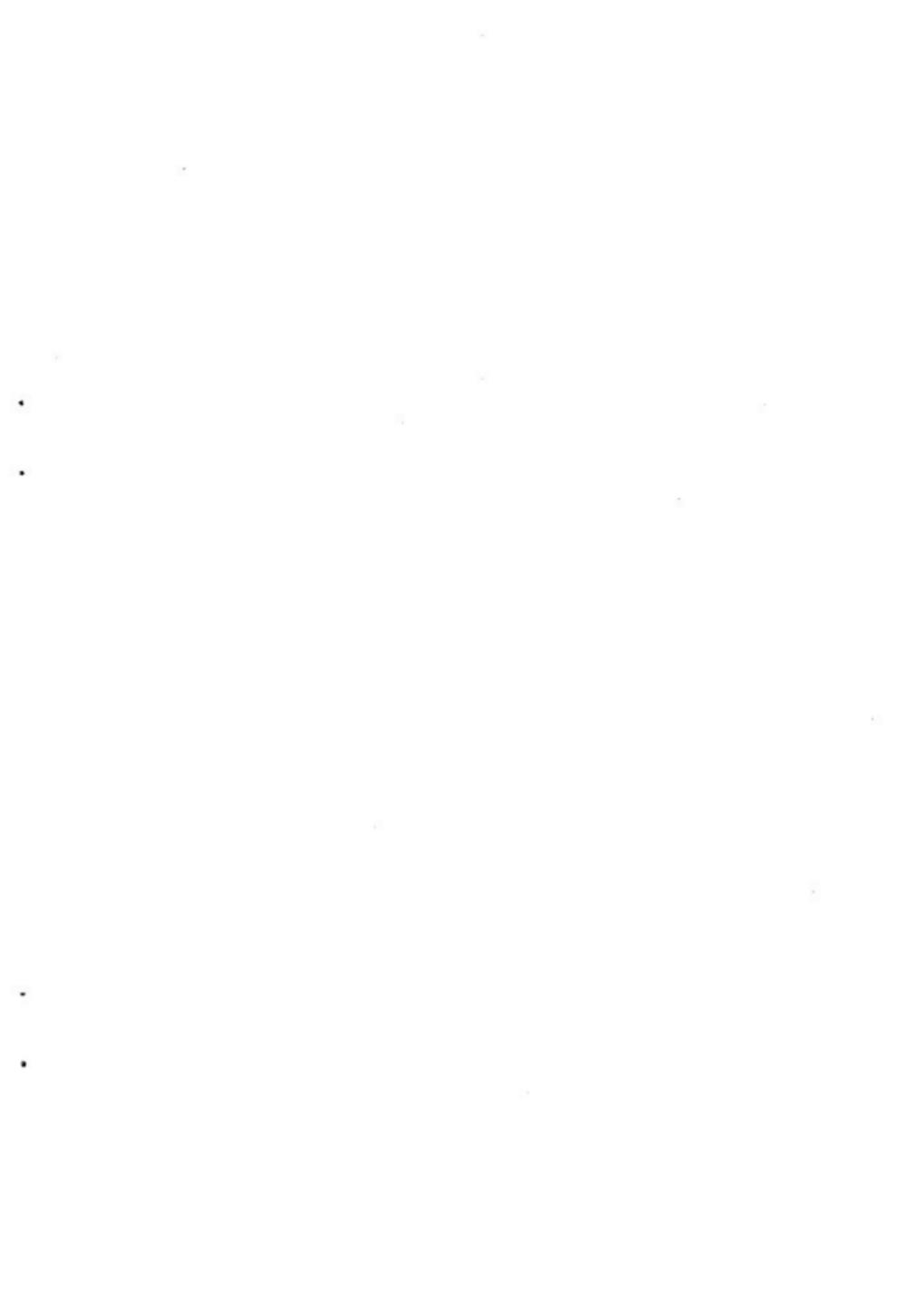
一、本書は、福岡市都市開発局の福岡市流通業務団地造成に先行し、福岡市教育委員会文化課の昭和四十一年度事業として実施した造成地区内の埋蔵文化財発掘調査の報告である。

二、発掘調査報告と併せて、調査指導員の諸先生方の原稿を収めてさらに内容の充実を図った。

三、執筆分担は各項目の終りに記すとおりであり、掲載の実測図、製図作成は島津義昭、山崎純男がおこなつたが、特に山崎の力に依るところが多い。但し第四章掲載分については各執筆者が行つた。さらに試掘坑実測、地形実測には九州産業大学建築史研究室（土田充義助教授）に援助を受けた。

四、遺跡の写真撮影には島津、山崎があたり遺物写真については、舩渡芳之、小平忠生、小林美保氏の協力を得た。

五、発掘調査の記録は島津・山崎が執筆し、島格が総括指導した。



目 次

序

説

調査の経過

遺跡の発見

調査の構成

調査報告

第一章 遺跡の概観

遺跡の位置.....

調査区の概要.....

周辺の遺跡.....

第二章 遺 墓

一、大溝（条里に伴う溝）.....	18
二、祠跡（礎石）.....	15
三、村落遺構.....	14

10 9 8

第三章 遺 物

一、土製品	22
二、木製品	45
三、石製品	46
四、金属製品・その他	52

第四章 総 括

一、古代の構屋	54
二、糧貿・鉄・馬について	60
三、建築造構について	65
四、地形と地質	68
五、花粉分析	77
六、中世馬	81

插

図

第1図	発掘区概要図
第2図	多々良遺跡周辺地形図
第3図	多々良遺跡周辺遺跡分布図
第4図	大溝断面図
第5図	祠跡地形実測図
第6図	礎石実測図
第7図	村落遺構平面実測図
第8図	村落遺構断面図
第9図	村落遺構出土土師皿実測図(1)
第10図	村落遺構出土土師皿実測図(2)
第11図	堀形土器実測図
第12図	村落遺構出土土師皿実測図(3)
第13図	村落遺構出土土師皿実測図(4)
第14図	村落遺構出土土師皿実測図
第15図	村落遺構出土磁器実測図(1)
第16図	村落遺構出土磁器実測図(2)
第17図	村落遺構出土磁器実測図(3)
第18図	村落遺構出土磁器実測図(4)
第19図	村落遺構出土磁器実測図(5)
第20図	村落遺構出土磁器実測図(6)
第21図	村落遺構出土磁器実測図(7)
第22図	村落遺構出土磁器実測図(8)
第23図	村落遺構出土磁器実測図(9)
第24図	村落遺構出土磁器実測図(10)
第25図	村落遺構出土磁器実測図(11)
第26図	村落遺構出土磁器実測図(12)
第27図	ふいご羽口実測図
第28図	土鍤・微脚実測図
第29図	木製品実測図
第30図	砥石実測図(1)
第31図	砥石実測図(2)
第32図	石鍋実測図
第33図	加工痕のある石鍋破片
第34図	鉄製品実測図

第35図 精屋評（京都妙心寺銘銘）

第36図

駄馬（一通墨絵）

第37図

村落遺構柱穴平面図

第38図

精屋町西部地質図

第39図

多々良遺跡出土馬

第40図

中世鎌倉時代馬の推定体高と
在来馬の体高の範囲

付表

第1表

村落遺構ピット計測表

第2表

村落遺構出土土石製品数量表

第3表

村落遺構出土土石製品数量表

第4表

桙痕計測表

第5表

花粉頻度数表

第6表

花粉分析灼熱損失量

第7表

白歯測定表

第8表

多々良馬下顎比較表

図版

第一二一	(→)遺跡の遠景(南より)	第十九	(→)耳付壺
(□)遺跡の遠景(北より)	(□)珠光青磁皿		
第一二二	(→)堅穴I	(→)墨書青磁	
(□)大溝	(□)馬蹄形土器		
第一三三	(→)大溝(北より)	第二十	附着の模様
(□)大溝北側断面	(□)柱穴(P.19)		
第一四四	(→)小豎穴I断面	(□)柱穴(P.15)	
(□)溝I断面	(□)溝III(石組施設)		
第一五五	(→)溝I断面	第十三	村落遺構(発掘区西側)
(□)溝II断面	(→)小祠遠景(南より)		
第一六六	(→)村落遺構遠景	(□)小祠下層(遺物出土状況)	
(□)溝II(南より)	(→)小祠礎石(南より)		
第一七七	(→)豎穴VI	(□)礎石部分	
(→)豎穴VII	(→)磁器各種口縁部(表)		
第一八八	(→)小豎穴XI	(□)磁器各種口縁部(裏)	
(→)土塙墓I	(→)磁器各種(身込み)		
(□)豎穴VI遺物出土状況(土塙・土築III)	(□)磁器各種(高台)		
(□)土塙墓II(副葬品)	(→)磁器各種(皿)		
(→)製鉄遺構(発掘前)	(→)磁器各種(焼形品)		
第九	(□)磁器各種(焼形品)		

序 説 調査の経過

遺跡の発見 この地が足利尊氏と菊地武敏との合戦の故地であることは、すでに『統筑前風土記』等にも注意され、またこの地から柏屋郡一帯に存する条里遺構について昭和十年鏡山猛氏によつて注意されているところであった。昭和十五年九月四日 福岡市流通業務団地設置の旨が文化課に連絡されるや、三島格、田坂美代子は現地に赴き踏査を行い、(→条里制地割の比較的保存良好なこと)(予定敷地内に花園森と称する、口伝では、前記多々良湯の合戦にやぶれた菊地方の戦死者の遺骸を葬つたといふ小塚があることを確認、基礎工事に先立ち発掘調査を実施することとなつた。

調査の構成 文化課では昭和四十六年度事業の一環として、この調査の担当者を決定し、更に調査全般に対するアドバイスを行ふ指導委員会を設置した。

考古学	鏡山 猛	(九州大学)	筑紫 豊	(福岡県文化財専門委員)
地質学	岡崎 敬	(九州大学)	森 貞二郎	(九州産業大学)
花粉分析	浦口 英夫	(九州大学)	三宅 安太郎	(右に同じ)
文献史学	畠中 健一	(北九州大学)		
土川 充義	井上辰雄	(熊本大学)		
建築史学	川添 昭二	(九州大学)		
		(九州産業大学)		

文化課からは、三島格、岩下拓二、山崎純男、島津義昭、大山美智枝が調査を担当し、調査整理期間中の事務所を福岡市都市開発局多々良事務所に移し、昭和四十六年七月一日～昭和四十七年三月三十日迄事務を行なつた。発掘調査にあたつては関係各方面の協力を得た。調査実施中には前記諸先生方の数度の来観を受け助言をいただいた。また九州産業大学の土田充義助教授、宮原種生氏には発掘作業員の編成について多大の協力を得た。さらに、調査中次の諸氏は調査の補助にあたられた。

呉 明勲（九州大学）、西田道世（明治大学）、石橋新次（明治大学）、板浦和子（熊本大学）
記して感謝の意を表する。

報告書については、浦口英夫・畠中健・井上辰雄の諸先生より玉稿をいただき、さらに東京農工大林田重幸教授からは、多々良遺跡出土の馬銜についての玉稿をいただいた。九産大、宮原種生氏には、多々良遺跡で検出された、村落遺構の復元についての執筆をお願いした。

（三島・島津）

第一章 遺跡の概観

遺跡の位置 福岡平野は東に山郡山地、南・西方を背振山地に限り、北方を博多湾に開く平野である。各山地からは幾多の河川が博多湾にそそぐが、西から、室見川、樋井川、那珂川、御笠川、多々良川等の主要な河川を数える。それぞれの流域には扇状地が発達し、あるいは幾層もの河岸段丘が形造られる。このような自然の有様が、海からの文化の受容、活用という、この地での人間史の一つの型をつくって来た。(第3図)

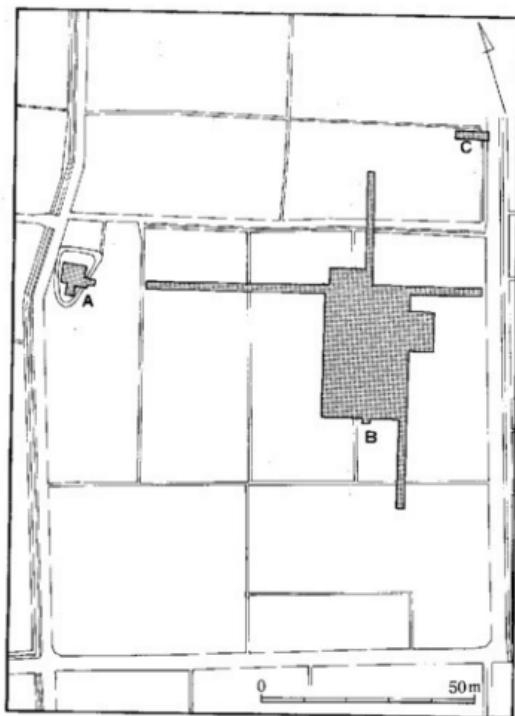
さてここ多々良川は、その流域、支流ごとに、宇美川、須恵川、篠栗川、猪野川と呼ばれ、海にそそぐ寸前、福岡市名島の東南方において最終的に合流するが、多々良遺跡は、この合流点から東に約1kmの地で、上記の川が形成した扇状地の最先端部にある。遺跡附近の標高は、平均二・五mを計る。遺跡に立つて東方には、山勢雄渾な若杉山(六八〇m)を望み、多々良川、宇美川に挟まれる如く延びきた低い丘陵が、南から北に続く。この丘陵が、先土器時代より今日まで当地の主要な生活の舞台となってきた。

この丘陵の先端部には内橋坪見廬寺、さらに東方に鶴見丁池廬寺が存する。また



第1図 多々良遺跡周辺地形図 (福岡県編纂会)

ずかに低くなっていく。水田は地下水位が高く湿田の様をなす。(一)の地点については、調査前に予測していた遺構ではなかつたが、旧土地所有者の見聞を再確認する事となつた。



第22図 多々良遺跡発掘区既要図

扇状地一帯にみられる条里制地割は、今回調査の平安末～中世村落の遺構と併せて、扇状地の開発が農業生産と関係ある事が知られる。

調査区の概要

既に

記したように、今回の発掘調査は(一)平安末～中世の村落の姿を把握する(二)条里制地割に判う遺構の発見(三)多々良洞の合戦の史蹟と伝えられる地点の内容解明を目指して三ヶ所に試掘坑を設置した。(一)の地点以外は現在水田である。水田面はほとんど高低がなく、大まかに傾向としては東方向に向

周辺の遺跡（第3回）

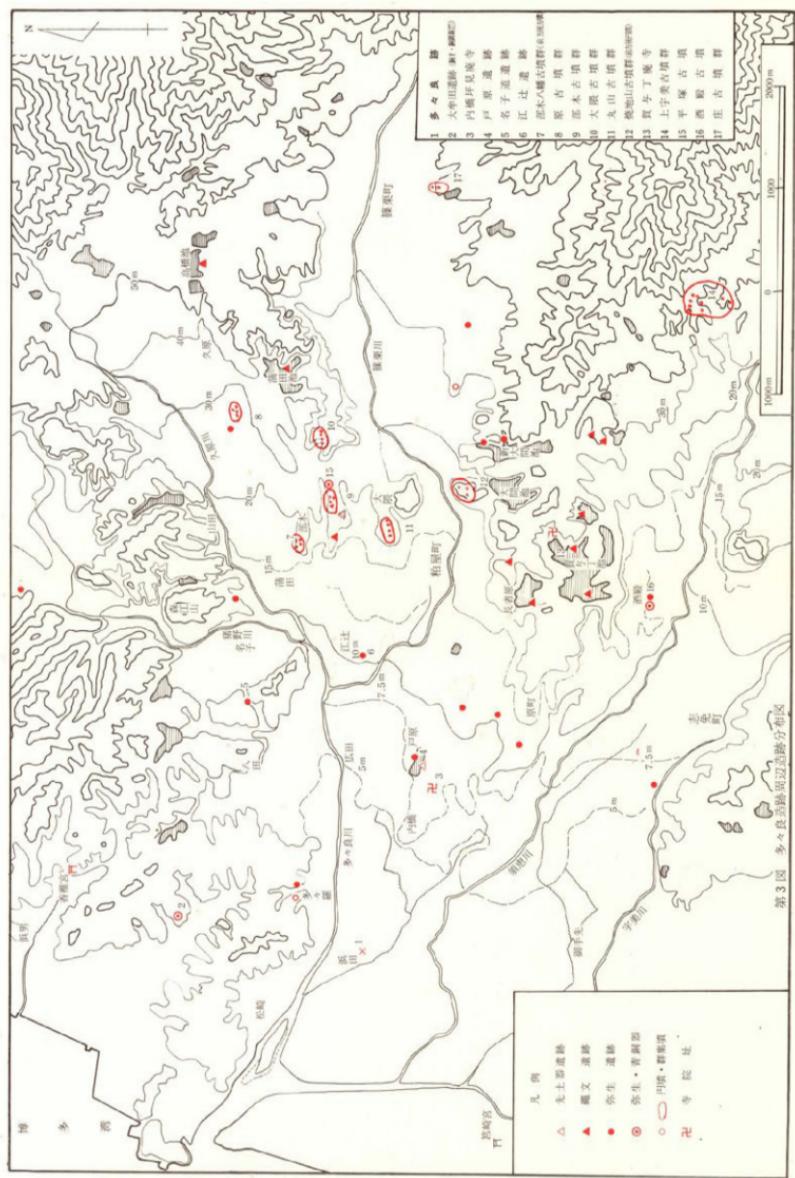
益々良遺跡から多々良川を遡る柏屋・久山・篠栗・志免・宇美地区の埋蔵文化財の調査は、他の福岡周辺の地区に比べてかならずしも解つてはいない。この地区的遺跡分布を記したものとして「^①」の出版物があるのみで、今後の踏査、調査が大いに期待されることをまず述べておきたい。

既述のように、多々良川は、その流域に、細長い狭隘な西・南に開いた盆地状の景観をなす。

以上のように、地形的には四つの小地域として独立しており行政域としては、北より久山町、柏屋町・志免町・須恵町・宇美町に分れる。久山町は大鳴谷西方より発する猪野川、久原川が形成する扇状地、およびそれを東北に分割する森江山（一一一^②m）を最高地とする西北に延びる山地を含む。篠栗町は若杉山東麓に発する篠栗川が扇状地を形成し、西方を柏屋町、北方を八〇m³三〇m³の洪積台地で隔てる。志免町・須恵町は若杉山から北西に派生する丘陵、およびそれとほぼ平行に走る四王寺山塊によって区切られ、須恵川がそれぞれ山麓に添う如く流れている。柏屋町は上記の町の、ちょうど西出口にある所に位置する。したがって町全体が一〇³二〇³mの低丘陵にのる。昭和四〇年の町勢概要によると、町の面積としては篠栗町・久山町・柏屋町・須恵町・志免町の順であるが、人口は逆に志免町・須恵町・篠栗町・柏屋町・久山町の順序である。これは当時、この地で行なわれていた、石炭産業とその就業者を勘案に入れなければならないが、さらに町面積に対する田畠の百分比をみると、柏屋町・志免町・須恵町・篠栗町・久山町の順で高く、各町毎の面積の不均等を差し引いても、農業依存度において柏屋町の卓越することの一端を知ることが出来る。同様に産業別就業人口のうち農業経営者は久山町・柏屋町・篠栗町・須恵町の順で多く、ここでも柏屋町の農業生産への依存の高いことが知られる。このような現象は、同時に農業生産を軸として発達して来た、弥生時代以降のこの地区的歴史を把握する際にいささかの参考となろう。

一、先土器、绳文時代 先土器時代の遺跡としては現在三ヶ所が知られているのみで正式な調査を受けた遺跡はない。いずれも洪積台地先端部に位置している。遺物の量を別にすれば唐津湾周辺の遺跡群と立地は共通する。^③ 戸原

第3図 多々良流域沿岸部地質分布図



A 地点は標高二〇 m 余の低位段丘上の畠地の小範囲に遺物の散在地点があり、マイクロ・コア、スマールブレイド等が出土しており有望な包含層の存する可能性がある。また部木遺跡⁽⁴⁾でも同様な石器、その他が表採されている。ともに黒曜石を素材とする石器で、縄石器文化期に属するものであろう。

縄文時代の遺跡は、現在迄一〇ヶ所余が知られ、発見場所が溜池周辺にかたよっているが、これは池造築の際に包含層が露出したものであろう。遺物は単独に出土したものが多く、福岡市油山麓（五ヶ村池・クマソイ池等）の遺物発見⁽⁵⁾の状態と同様である。石器のみの表採が多く伴出土器をみたのは数ヶ所にすぎない。福岡平野全般に縄文期遺跡の少ないことと相俟つて、遺跡の貧弱さは縄文期にこの地が有力な生活舞台として選択されなかつたという一般的事象のうちに解決されるだろう。

二、弥生時代 低位、中位段丘の先端部に遺跡が分布する傾向がみられる。各河川の氾濫により消滅した遺跡も少くないと思われるが、現在迄二十ヶ所余を数える。前期の遺跡は、江辻遺跡⁽⁶⁾、蒲田遺跡⁽⁷⁾などが知られるにすぎない。前者は古い自然堤防上、後者は久原川を前にした森江山の山麓、低台地斜面に位置する。中期になると、七ヶ所余の遺跡が知られ、前期に比して遺跡の平面的な拡大がうかがえる。部木遺跡⁽⁸⁾。花ヶ浦遺跡などでは櫛棺の出土が知られており、本格的な定着生活の開始を暗示させる。後期になると遺跡数は多くなり、扇状地中央城への進出（戸原 B 地点、九大農業遺跡等）が知られるが扇状においては地下水位は深く、水田耕作にとつては、諸灌漑技術の一一定の推進を前提にしなければ困難であるので、あるいは畠地としての開発も当然考えられる。さらに終末期になると地域開発の一定の前進、その集約した姿として原始墳墓の出現が知られる。

三、原始墳墓の出現（平塚・名子道・酒殿）

弥生後期～終末期、この地域のはば地形的単位に対応する如き三ヶ所の箱式石棺墓が知られている。それぞれの内容、および位置付けについては詳細な研究が他にあるので再論しない。小地域ごとの首長（あるいは有力家族）の出現を知ることができるが、三遺跡それぞれの時間的な小異を無視す

れば、これ等の墳墓は自然地形の即自的な開発、それ故地域別に完結の傾向を示す小社会から地域を核にした政治社会の形成を物語るものであろう。この場合、名子道二号墳・平塚・酒殿・各遺跡の位置関係が、ほぼ三km毎の同一距離を示すことの中に、同時にこの地域政治圏の範囲を読み取ることもあながら虚妄ではなかろう。これらの三遺跡は、早良平野における同様の宮の前古墳で「この程度の墳墓であれば各地域ごとに成立しうる」と指摘された事柄の空間的関係を具体的に表示する格好の墳墓群であろう。

四、古墳時代、前方後円墳は焼地山二号墳、光正寺古墳が知られていたが、近年、部木八幡古墳群（一号墳は前方後方墳）が発見され、ほぼ同一線上に前期～中期の首長墓がならぶようになった。このうち部木八幡一号墳は、先述の名子道二号墳・平塚古墳の中間に位置し、さらにその特異な墳形より注目すべき古墳だと思われる。これ等の墳墓が、先期の三箱式石棺墓の後続として如何なる関係にあるのか、あるいはないのか不明であるが、この地の前方後円墳が地域毎に均一性をもち存在するという点から考えれば、前代の地域を空間的に同一に分離する形であらわされた箱式石棺にうかがえる政治圏が何らかの母体になっていることは想定できよう。さらに、西方海岸寄りにある三角縁袖獸鏡を出土して著名の香椎ヶ丘古墳^④を併せて考えると、福岡市周船寺、今宿地区の前方後円墳群とともに、早くから大和朝廷との強い結び付きが考えられる。さらに宇美八幡宮創建にまつわる神功皇后伝承は、宇美を起点にして〔沿海コース、〔宇美－行橋〕の二つのコースが考えられているが、この伝承の発生時代が古墳期以前に遡って考えられるにしろ、伝承の背後には古代の交通路の知識があつたと想定すれば、まさに二つのコースは、大和朝廷と密接な関係を有すると考えられる、前期古墳の分布図とも相応して興味深い。

次に群集墳はハケ所余が知られている。前方後円墳、前方後方墳を含む（焼地山古墳群、部木八幡群）を除いて、他は横穴式石室を主体とする後期群集墳であろう。（山崎・島津）

- ① 児井明徳「福岡市および周辺の古墳文化」『福岡市とその周辺の文化財』一九六九 福岡
- ② 福岡市役所「福岡市・周辺の町勢調査」一九六五 福岡
- ③ 富林憲治・戸沢充則「唐津周辺の攝石器Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」考古学手帳14・15・18 一九六二—一九六三 東京
- ④ 国平健三「部木遺跡採集の石器」福岡市遺跡地名表(総集編)一九七一 福岡
- ⑤ 中原志外顕「福岡市と周辺の攝文化」『郷土の歴史を語ろう資料』第5集
- ⑥ 高川鉄馬「福岡県下に於ける貝塚に於て」『筑紫史談』第一集一九一四 福岡
- ⑦ 森貞二郎先生・松本廣氏御教示。但し遺跡名は島津の仮称である。
- 森貞二郎「福岡県柏屋町上大隈平塚古墳」九州考古学11・12 一九六一
- 下条信行「第Ⅳまとめ—特に墳墓について—」『宮の前遺跡(A-D地点)』一九七一 福岡
- 名子道謙跡—福岡市教育委員会 昭和四十五年調査 未報告
- 下条信行「第Ⅳまとめ—特に墳墓について—」『宮の前遺跡(A-D地点)』一九七一 福岡
- 浜田信也「今宿—坂氏地区の遺跡」『今宿バスバス関係埋蔵文化財調査報告』第2集 一九七一 福岡
- 喜多路「神功皇后伝承定着の周辺—北九州を中心として」『民族学研究』第三六卷一号 一九七一 東京
- 小田富士雄「畿内型古墳の伝播」『古代の日本3』一九七〇 東京

第二章 溝（条里に伴う溝）構

一、大溝

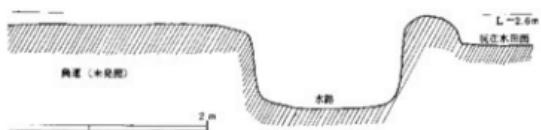
層序 大字多々良小字宗原の東端にある。西に農道を境にして小字南須川と接する。農道には直角に二×八・五mの試掘坑を設定した。表土（第一層）は十五cm～二十cmの水田の耕作土である。その下は酸化鉄の集積層が五cm前後ある（第二層）。更に青灰色粘土層（第三層）酸化鉄集積層（第四層）青灰色粘土層（第六層）に分れる。六層は青灰色粘土中に幾分砂粒が入り五層と区別できるが、西方へいくにしたがい上層との境は不明瞭になる。第九層は黄色の粘土質土で砂を含む。第十層は砂層であり、ここからは湧水が著しい。

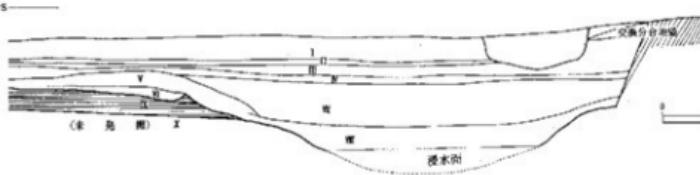
溝の中には二つの層（第七層・第八層）がみられ、基本的には青灰色粘土層である。他のそれよりも粘土の粒子が小さく、また下にゆく程にそれが著しい。

この二層の境は不明瞭であるが、この状態はある期間、この溝が帶水していた事を思わせる。

遺構 溝の切り込み面は第五層、あるいは第四層で第九層、第十層を大きく剥つてある。掘り込んでからやや平坦をなし、二段堀りの如き形状をなす。

底面はゆるやかな皿状をなすようと思われるが湧水の為判然としない。溝の西端は使用中の農道と水路があるため調査できなかつた。現地表より溝の最下面まで推定一・七m前後を計る。切り込み面からは一・一mを計る。溝巾は推定四m前後で、現農道にそつて北北東に続していくものと思われる。この溝の東寄りの上面には最近埋つたらしの小さな溝がみられる。





第4図 大溝断面図（北側）

小結

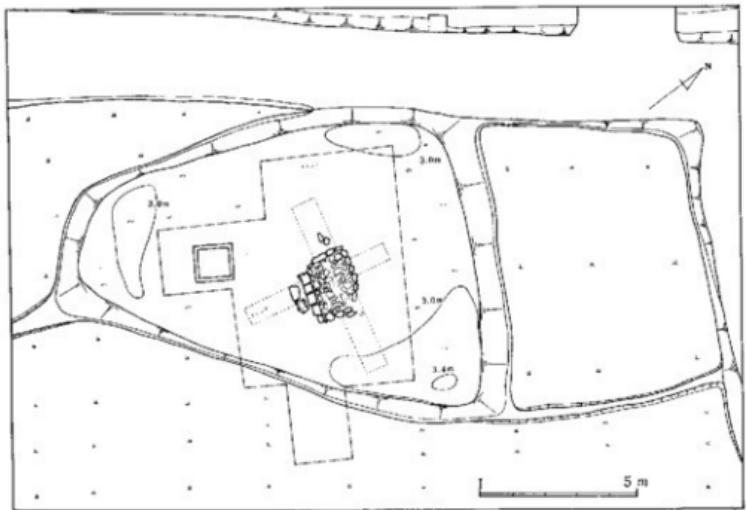
この溝の性格については「切り込み面（第五層・第六層）」が、後述する村落遺構の遺物包含層とは対応する〔溝の続いてゆく方向が現在の農道、あるいは水路とは一致する、等の消極的理由からではあるが、条里制地割に伴う溝であろうと考える。勿論、(一)の理由がただちにこの溝の築造時期を決定する理由にはならない。時期を示す遺物の出土が皆無であったので、層序よりみると、少くともこの溝が埋り終えた時と村落遺構の時間は近いと言えよう。更に部分的な遺構の検出があるので多言は慎しむべきであろうが、溝の断面東側第四層、第五層・第六層が幾分東方向へ上り気味な傾向にある事は、この溝を条里制地割に伴うものと考える先の点よりすると、その部分から先が道であった事を示すものではなかろうか。〕

この地の条理地割の施行された年代は不明であつたが、現地形に相応して驚くべき一致を示す、条里制遺構の一端を把握できたのは収獲であった。

二、祠跡（礎石）

位置と外形

大字多々良小字示原の西端である。道を境に小字六の坪と接する。調査地区は水田面より約1m程の微高地標をなす。平面形は隅丸の三角形をなし、二〇坪ほどの広さである。土地の人はこの地を「花園森」と称し、昔は高い部分は現在よりもほど広く、多くの木が茂り、遠方からでも壯觀をなしていたと云う。現在では、わずかに複数の若木が一本、南端にあるのみで昔日の姿を認ぶ因もない。樺の横には四方レンガ積みの礎石が残っていて、昭和二〇年頃まで



第5図 神跡地形実測図

は小祠の上屋があつたという。

遺構

この地の中央で交差する十字の試掘坑を設定し掘り下げた。20cm前後の水田耕作時に投げ捨てられたと思われる小石の多い表土を除くと、褐色土のやや固い面があり石組みが露出した。小高いこの地のほぼ中央部にあたる。石組各辺は概略、東西南北と一致する。

南列には、石組みの外側に他に二石を並べている。石の配列は全体的に雑であるが、南列のみ花崗岩の切石四個を置いている。他は全て自然の礫である。概して外列をなす石が大きい。外列の石は固定させる為に、やや地面に握り据えたようであるが、内側のものはそのような配慮がなく、雜に置いてある。石組みは部分的に擾乱を受け、石が動いていたり、あるいは無い箇所がある。東列、二九、南列一、七二m、北列、四六mを計り、ほぼ五尺に相当する。

層位と出土遺物（第6図）

石組みの下の遺構の存否と、層序を調べる為、石組みを中心にして十字に試掘坑を入れた（第5図 破線部分）。表土からは、青磁器片、

近世陶器片、寛永通宝（二枚）、瓦破片が出土した。第二層は厚さ十五cm前後の褐色の乾いた土。この最上面に石組は存する。石組みの間から、土師質の皿、塊が出土した。土師質皿は小破片で石組みの全面に散乱していた。

第一層の上部以下は遺物はなかった。第三層（厚さ四十cm前後）は青灰色粘土層であり、後述の村落遺構において遺物を包含する層と同じである。上層との境は明瞭である。第三層中からは土師器皿が五個体分出土した。第四層は黄色の砂の混じった粘土質土で遺物はみられなかつた。

小結

石組み遺構は同所に露出しているレンガ積み礎石の前身であると云えよう。出土遺物には特に礎石の時代を

決するようなものはない。この小祠について日々良地区の人の記憶によると、昭和初年頃迄上屋があつたと云う。

（日々良在住 徳水喜平治氏教示）礎石の位置から考えて南列の前の二石を拌所の踏石とすれば奥面が北となり、

祠の形として必ずしも新しいものではないらしい。一方礎石の存する褐色土が、下層の青灰色粘土層（村落遺構の遺物包含層）より上方の別層である事は、検出した礎石が少くとも村落遺構の時代よりは後であるとの極めて大きな年代の上限を知り得るが、他の試掘坑断面にみられるような酸化した鉄、マンガン等の集積した斑紋がみられないから、この地が水田として使用された事はないと考えれば、何らかの意味ある場所として人々に意識されていていた事がしれ、日々良潟の合戦の伝承と相俟つて興味深い。



第6図 錐石実測図（水平レベルは3.7m）

三、村落遺構

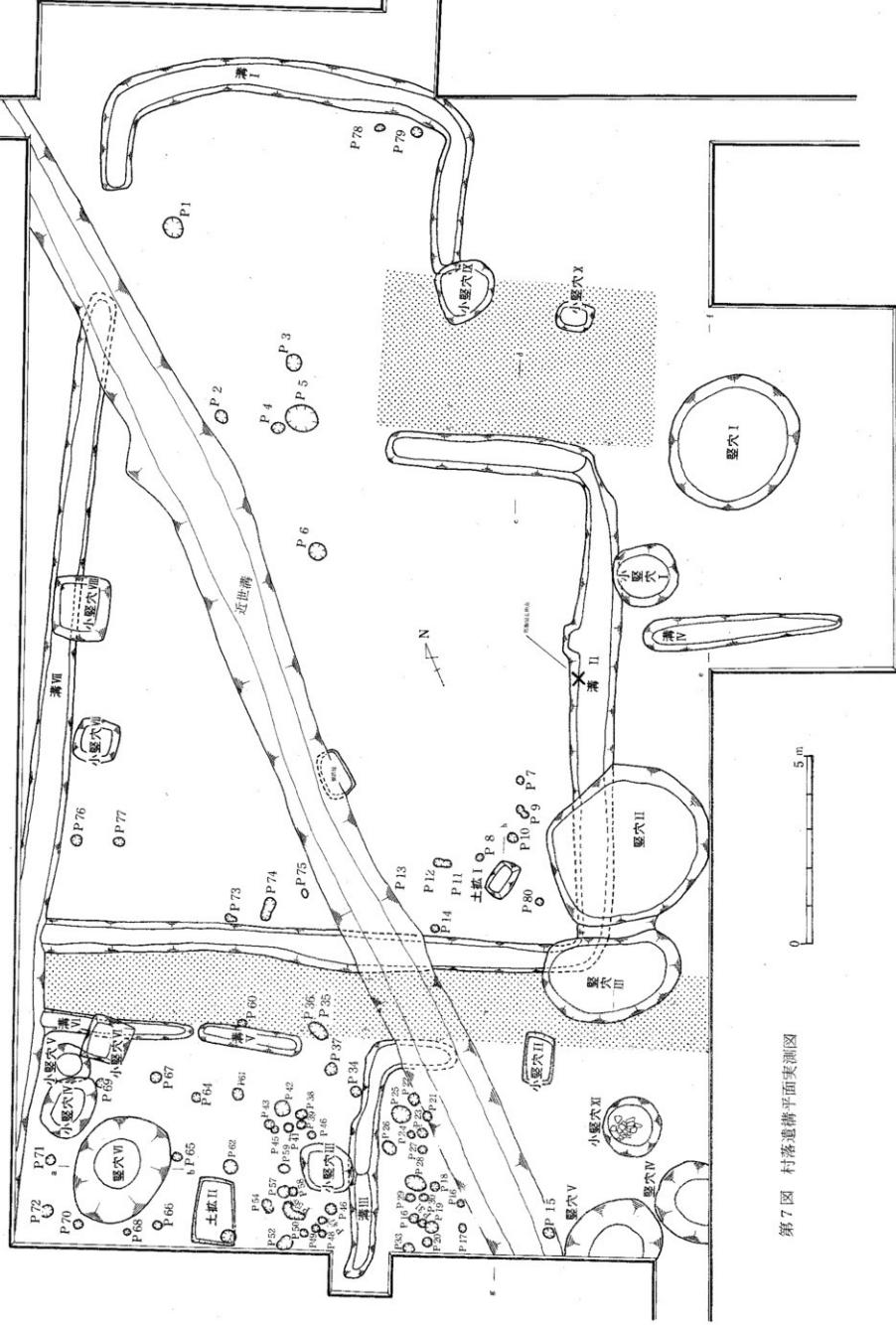
(第7図)

大字多々良字宗原の水田中に位置する。標高は約二・七mで、この部分は周辺の水田よりや低く、微低状をなす(第四章参照)。遺構面までの層序は、水田面から約一四cmが耕作土(第一層)で、その下に酸化した鉄分等が集積した黄褐色土(第二層)が約二〇cm厚さで広がる。その下は約一六cmの厚さの青灰色粘土層(第三層)で、ここに遺物が含まれている。同層最下面、および第四層の黄色の砂を含む粘土質土層上面において各種の遺構を確認した。

村落遺構は、溝状遺構、円形堅穴、小堅穴、集石ピット、土塙墓(?)、柱穴群より構成される。各遺構すべてが同一時期の所産でないことは、各遺構の切り合い関係において単純に知りうる。村落遺構の広がり東西二十五m、南北三十二mの範囲にわたるが、発掘区を拡大すればさらに遺構はひろがると考えられる。けれども期日の制約上発掘できなかつた。もし、この想定が正しいとすれば、われわれは村落の東南部にあたる村落の中心部をはずれた地区を発掘したことになる。各遺構が相互に切り合うことは前述したが、最初に作られたと思われる溝(溝I・II・III)は互いに切り合うことがなく整然とした区画を示し、住居間をめぐる溝と考えられ、溝と溝との間に存在する細長い部分は、村落内における通路(アミの部分)と考えることができよう。このような姿を示す溝状遺構は恐らく同一時期の所産であろう。この溝状遺構を切った堅穴(堅穴II・III・小堅穴I・III・VI・VII・VIII)と、切らない堅穴(堅穴I・IV・V・VI・VII・VIII)がある。前者は明らかに時間的前後関係を知ることができるが、後者は空地に新設された堅穴ともみなし得るのではなかろうか。

以下、各遺構について説明する。

溝状遺構 発掘区に計七本の溝を確認した。溝Iは「」字状をなし一部小堅穴に切られる。長さ約十六m、幅約八〇cm、深さ四〇cm、断面U字形をなす。溝中には青灰色粘土、および灰(真黒)で埋まっている。溝内から鉄器、青磁器



第7図 村落遺構平面実測図

番号	長径×短径(cm)	高さ(cm)	備考	番号	長径×短径(cm)	高さ(cm)	備考	番号	長径×短径(cm)	高さ(cm)	備考
P 1	63 × 53	29		P 33	30 × 21	15		P 65	25 × 20	38	根固め石1個 鉛引ひつめる
P 2	30 × 30	14		P 34	23 × 21	16		P 66	24 × 21	23	
P 3	46 × 41	23		P 35	29 × 24			P 67	30 × 28	54	
P 4	30 × 29	10		P 36	29 × 26			P 68	14 × 12	13	二段築り
P 5	87 × 72	45		P 37	30 × 26	19		P 69	24 × 24	38	
P 6	42 × 42	25		P 38	28 × 19	26		P 70	22 × 22	44	
P 7	14 × 13	18		P 39	9 × 6	26		P 71	28 × 25	34	
P 8	21 × 20	18		P 40	20 × 6	12		P 72	32 × 28	40	
P 9	9 × 7	9		P 41	21 × 11	6		P 73	9 × 4		
P 10	29 × 21	42		P 42	42 × 39	24		P 74	17 × 7		
P 11	10 × 8	18		P 43	26 × 21	34		P 75	12 × 7		
P 12	28 × 20	6		P 44	21 × 19	21		P 76	15 × 13		
P 13	29 × 21	4		P 45	18 × 14	23		P 77	15 × 11		
P 14	20 × 19	22		P 46	26 × 24	32		P 78	13 × 9		
P 15	22 × 21		柱底材・根固め石	P 47	12 × 12	9		P 79	15 × 13		
P 16	19 × 13	18		P 48	18 × 14	23		P 80	11 × 11		
P 17	21 × 19	37		P 49	20 × 18	37					
P 18	21 × 18	39		P 50	22 × 18	17					
P 19	39 × 30	24		P 51	26 × 20	20					
P 20	30 × 23	18		P 52	49 × 40		二段築り				
P 21	20 × 19	27		P 53	22 × 18	34					
P 22	30 × 28	32		P 54	19 × 10	36					
P 23	30 × 21	5		P 55	20 × 13	27					
P 24	19 × 19	9		P 56	16 × 11	14					
P 25	50 × 48	62		P 57	30 × 26	16					
P 26	32 × 24			P 58	22 × 20	16					
P 27	21 × 19	19		P 59	20 × 20	32					
P 28	49 × 42	61		P 60	21 × 20						
P 29	11 × 9	22		P 61	28 × 26	41					
P 30	8 × 8	36		P 62	44 × 42	32					
P 31	21 × 19	18		P 63	44 × 42	28					
P 32	19 × 19	48		P 64	23 × 20	25	根固め石2個				

第1表 村落遺構調査表

器、土師器、瓦器が出土した。

溝IIはU字形をなし、長さ約三三m、幅九〇cm、深さ二〇~五〇cm、断面形はU字形をなす。一部竪穴II・IIIと、発掘区に対角線上に走る近世溝によって切斷され、発掘区西側で溝VIIとつながる。溝内には青灰色粘土層、および灰がみられる。この溝の東方溝中央部青灰色粘土層中から馬齒（第四章参照）、西方溝からはスラッグ、ふいご羽口破片、その他に青磁器、土師器、瓦器等の出土が多くみられた。溝I、II・VIIとによって方形の一区画を形成する。

溝IIIはL字状をなし、長さ約六m、溝IVは直溝で長さ約六m、溝Vは直溝で長さ二m、溝VIは溝Vと一部切山同一線状に続くもので西方で溝VIIとながる。小竪穴VIによつて一部切断される。

溝VIIは直溝で、長さ二・八mを確認したが未発掘部へ続く、溝II・溝VIIとつながる。

溝IV・VIIは形状、溝内の層序は溝IIと異なるところはない。溝IV・V・VI・VIIで方形の区画を形成する。溝IIと溝III・V・VIとの間は細長部位をつくりだし、通路状をなしていることは前述のとおりである。

竪穴遺構

円形の竪穴で断面形は深皿状をなす。計六ヶ所確認した。竪穴Iは発掘区東部端に確認したもので、直径三・三m、深さ約五〇cm、黄色の砂混り粘土質土に切り込まれたもので、下から、砂混り青灰色粘土層、青灰色粘土層、青灰色土層によつて埋まる。石製品、土師器、須恵器、瓦器質土器、青磁器の出土をみた。竪穴II・IIIは互に接して存在する。竪穴IIは直径約四m、深一m、竪穴IIは長径約二・七m、短径二・九mの橢円形をなし、深さ約五〇cm、竪穴IIの上面より楕形木製品が出土した（第四図）竪穴IV・Vは竪穴IIIの南に位置する。竪穴IVは直径約一・三m深さ約五〇cm、竪穴IV・Vは一部試掘坑の壁にかかり完掘できなかつた。竪穴VIは、溝III・V・VI・VIIによつて区画された部分の西側、溝VIIに近く存在する。長径約三m、短径約一・四m、深さ七〇cm、灰によつて埋められて、いわゆる灰穴である。埋土は数層に分離できる。また、まわりに柱穴が規則をもつて並び、建物の存在が推定できる（第四章参照）。

遺構内からは土壙、土師器、青磁器、瓦器質土器、スラッグ等の出土をみた。

小豎穴

十ヶ所確認した。直径約1mの円形をなすものと方形のものが存在する。小豎穴Iは一部溝IIを切つて作られる。直径約1・6m、深さ約40cmで断面は皿状をなす。小豎穴IIは、長軸一・四m、短軸八〇cmの長方形をなす。深さ約五〇cm、底面にうすい板状の木質が敷きつめたようになっていたが取りあげは不可能であった。小豎穴IIIは約1mの隅丸方形で深さ約四五cm、一部溝IIIを切つてつくられる。底面に接して楕形木製品が出土した(第29図)。

小豎穴IVは長径約一・七m、短径一・二mの橢円形をなし、小豎穴Vを一部切つて作られる。小豎穴VIはIVによつて切られる。小豎穴VIは一辺一・二mの方形をなし、深さ六・五cm、小豎穴Vを切つて作られる。小豎穴VIIは一辺一・二mの方形プランで小豎穴VIと同形である。小豎穴VIIは溝VIIを切つて作られる。長軸一・八m、短軸一・五mの不整四形をなす。深さ約四〇cm。小豎穴IXは長軸一m、短軸九〇cmの長方形プランで深さ約二五cm、小豎穴Xは長軸一・二m、短軸九〇cmの長方形プランで深さ約二五cm、小豎穴XIは径一・六m、深さ三〇cmの中に礫を集積する。礫は大部分が赤変し、火を受けたものと考えられる。

二ヶ所確認した。いずれも長方形をなす。土塙Iは長軸一・一m、短軸六〇cmで、深さ約三〇cm、東側角に龍泉窯の青磁器破片(第15図6)とスラッフ一個が出土した。

土塙IIは、長軸一・七m、短軸一・二mの長方形をなし、深さ約一五cmを計る。上半は削平されたもので、もとは更深いものであつたろう。柱穴の上に作られ、切り合い関係でみれば柱穴よりは後のものである。南角に土師器(第11図3・4)一個が重り出土した。上記二基の土塙は、土塙墓である可能性が強い。

製鐵造構(図版九)

溝II・Xによつて区画された部分のはば中央部、近世溝によつて切斷されている。約三分の一が失われているため平面形をはつきりつかめないが、長橢円形をなす炉であると考える。深さ約五cm、側縁、および床面は赤変し、中にスラッグがつまる。またこの遺構の周辺、および近世溝にはスラッグ、フィゴ羽口が比較的多い。

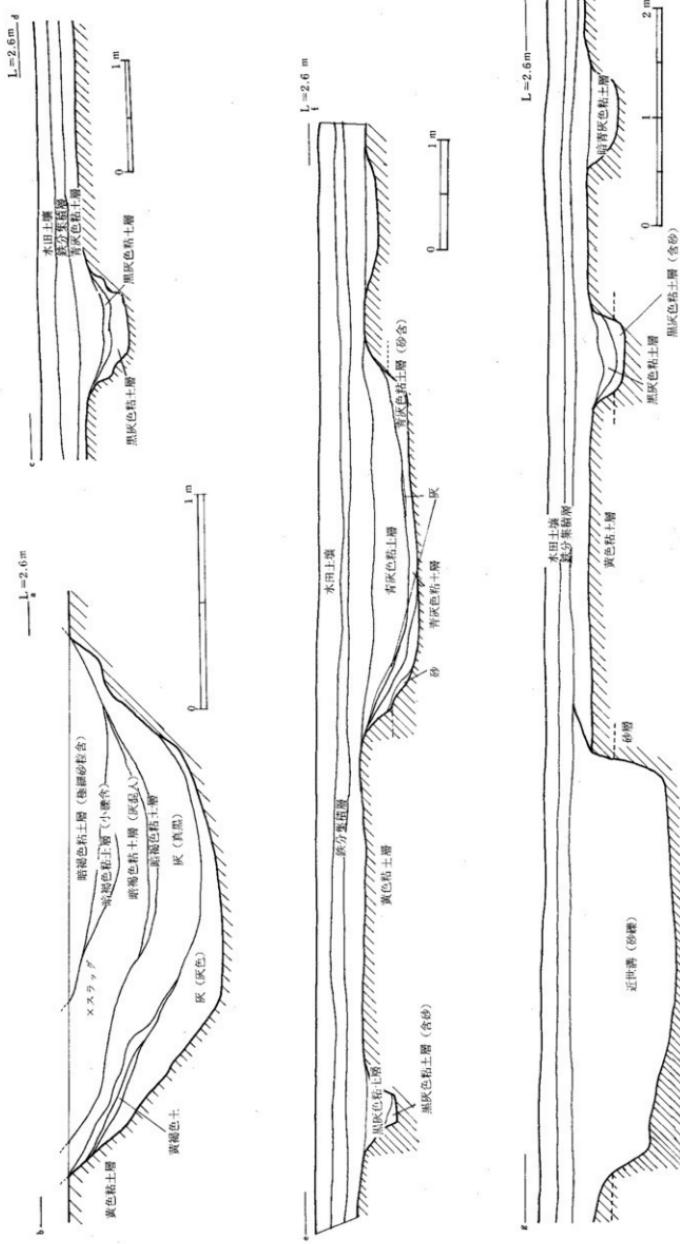


图 8 四 村落土壤剖面图

柱穴群

柱穴は合計八〇ヶ所を確認した。発掘区の南に多く確認した。柱穴底には石を数個詰め根固めをしたものや、一段掘りを行なったものもある(図版十)検出したほとんどの穴は柱穴とみてよかろう。豎穴Vに接し、近世溝の一部に一部残る柱穴には柱根(図版十)が残る。柱は四面とも鉄器で面をとり、かつ下端を斜めに切断し尖端は平らに切る。

柱穴底には根固め石が存在した。柱は柱穴とほとんど同じ大きさであった。

柱穴は相互の組み合わせがはつきりするものは少く、豎穴VIのまわりに存在する柱穴群を除いて判然としない。又溝にそつて並ぶ柱穴は樹列の存在等が考えられる。柱穴個々については一覧表を参照のこと(表1)

その他の遺構

発掘区を対角線状にはしる略南北の溝は、幅約一・六m、深さ約一mで、他の遺構を切断する。切り込み面は二層上面で、時期を示す置物の出土はなかつたが、近世のものであろう。構内は、砂および小砾で埋まつており、意識的に埋められたと思われる。この遺構の在する事は旧土地所有者も知らなかつたが、湿田排水のための暗渠であろう。

(島津・山崎)

付記

古戰場と伝える「花園森は、その伝承の重要さにかんがみその近所に、その所在を示す記念碑を立て永く顧みするようとの指導員会議の意向がなされ、福岡市はその措置をこうすることとなつた。

第三章 遺物

一、土製品

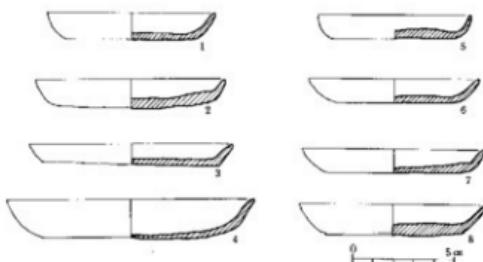
上製品には、土師器、磁器、瓦器、須恵器、上鍤、獸脚などがある。このうち、多いものは土師器、磁器で土製品の大半を占める。土師器は全部が皿であり、個体数にするとかなりの量であると思われる。磁器は青磁が主で、わずかに青白磁がまじる。以下各遺物ことに説明する。

村落遺構出土土師器（第9図、第3図2・5） 遺構内からは多くの土師皿破片が出
土したが、全体の形を保っているものは少くない。

竪穴II出土（1・4）1は小型の皿で、焼成不良。全面赤褐色をなす。底は細かい櫻、横のなでがみられ切り離しの手法は不明。4は内面の底部はやや凸凹で丁寧な作りではない。口縁部は内外とも赤褐色をなすが、底部は黒色を呈す。底は糸切り離しの上に板目様の圧痕が残る。

竪穴VI出土（7・8第13図2）7は黄褐色を呈し、体部と底部の境にやや段がつく。焼成良く全面赤褐色をなす。底部外端はやや盛り上がる7と同様の整形がみられる。第13図2は前者と同じ、外面黒灰色、内面淡黄褐色をなす。焼成良好。口縁部にむかってやや外反し段をもつ。以上三点は、いずれも糸切り離しの上に板目様の圧痕がみられる。

竪穴V出土（第13図3）赤褐色を呈し焼成不良。底部は糸切り離しの上をなしている。溝II出土（2・3）共に浅い皿であるが焼成は良好。2は表面のみ白灰色粘土を用いて、化粧している。3は黄褐色をなし部分的に黒斑部がある。底はいずれも糸切り離しの



第9図 村落遺構出土土師皿(図3)

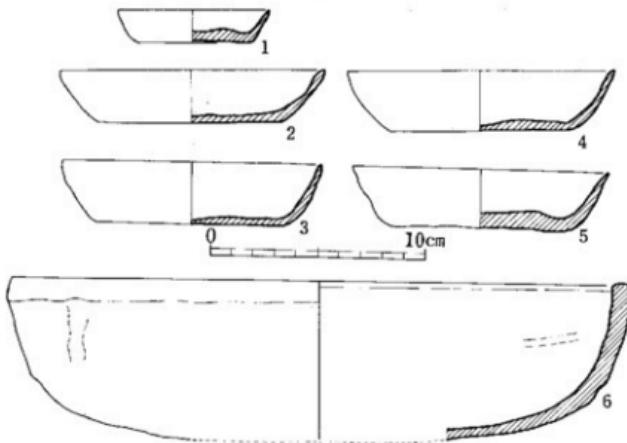
上に板目様の圧痕が明瞭に残る。

土塗出土（5・6）5は非常に小形品で、赤色をなす。底部以外全面横なで整調がおこなわれている。内面底部はやや凸状をなす。6は白灰色なし、部分的に黒斑が残り焼成はさほど良好でない。胎土には石英粒が幾分みられる。

5は糸切り離し、6はその上に板目様圧痕がみられる。5を下にして二個重なった状態で出土した。

祠出土の土師器（第10図）前述したように礎石の間には多くの土師皿がみられたが、全部が親指大の細片で図示できない。礎石面に出土した塊（6）のみを図示する。他は第二層青灰色粘土層から出土したものであり、直接には礎石とは関係ない。皿はいずれも赤褐色をなし、焼成は不良である。2の底部に糸切り離しがみられるので、他は底部になでが施されていて切り離しの様は不明。1はとくに小さく口徑約6cmを計る。礎石より下の道構を調査する為、設定した十字の試掘坑の第三層東の部分より、五個体接して出土したが、その部分が遺構であるかどうかは確認できなかつた。

10は全体の四分の一を失するが元來の形はうかがいう。口唇部は平で、外面はその下が笠で面とりしてありやや凸状をなす。内側上半には横なでがみられる。外面は黒色をなし、火を受け小さいひび破れが生じてゐる。内面は褐色で部分的に笠による横位の整



第10図 祠出土土師器実測図

形がみられる。復原口經二八・八cm、器高七・五cmを計る。

土師質壇形土器（第11図） いわゆる土壇である。二個体分出土した。

口縁部、約四分の一現存している。口縁部が急に外反する。口端は平で、外面にはスヌの付着が著しく原器面はみえない。内面は褐色を呈す。口縁部内面には、櫛状具による横の調整時に生じたとみられる擦痕が部分的にみられ、その上をなでている。復原口径二三cmを計る。

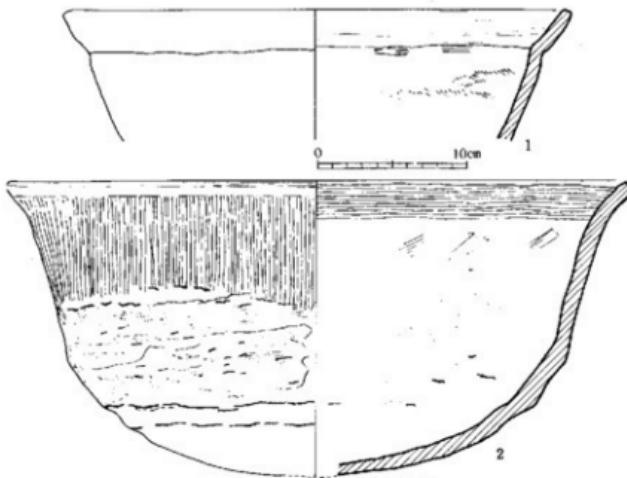
口辺部三分の一、胴部半分、底の一部を欠失する。口縁部からゆるやかに底へ続き、底はやや平底氣味である。口部を除いて内外面共に口縁部に縦横の櫛状具による荒い擦痕がみられる。外面胴部下半は器面が凸凹をなし、出土の際はここより上下に分離していたので、この部位が上下を接合した所だと思われる。ここは竈による荒い焼き取りを行なっている。一方内側は口縁部以下は丁寧に整形してあり、部分的に刷毛目もみられる。外面にはスヌが全面付着している。この土器には内外面とも模様が数多く付着している（第四章参照）外面黒褐色をなす。竈穴IV出土。一、二とも胴土中の砂粒は少なく胎土の精選を思わせる。

土師器皿（第12図・第13図） 遷構内から出土したもの外に、第二層下半、および第四層上面にかけて、多くの土

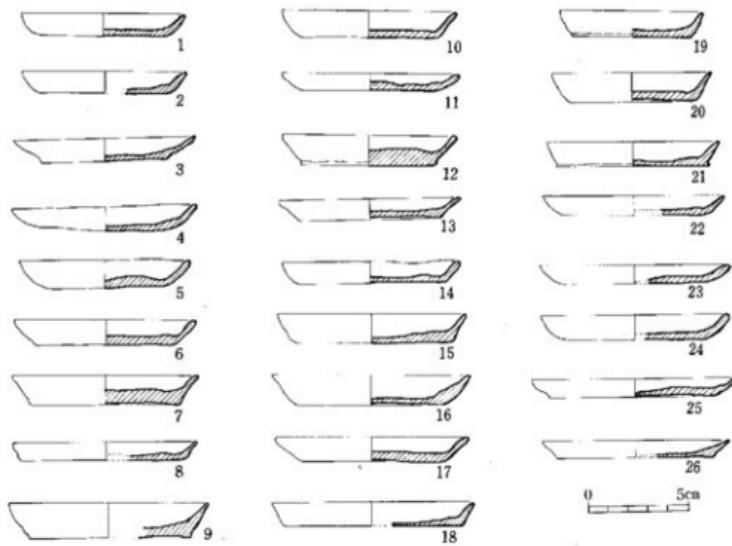
師器皿が出土した。そのうちから、ほぼ完形を保つものを使ひ図示した。土師器皿は、器形の大きさから二種に分類出来る。I類は、口径が十cm以下、器高が二cm以下のもの、II類はそれ以上のもの。

I類（第12図） 焼成、胎土の違いはあるが、器形は浅い皿形をなす。底部にみられる切り離しの相違から三分できる。1～9は、底になでが見られ、切り離しの手法が不明である。10～18は糸切り離しの上に板目様の圧痕がみられる。19～26は糸切り離しだけがみられるもの。既して前二者に比べて糸切り離しの品は焼成、形成が雑な傾向にある。

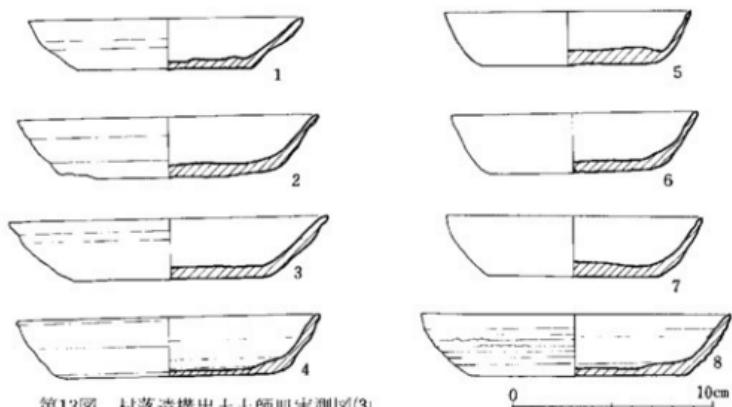
II類（第13図） ここでも糸切り離し（5・6・7）と、その上に板目圧痕を有するもの（1・2・3・4・8）があ



第11図 塚形土器実測図



第12図 村落遺構出土土師皿実測図(2)



第13図 村落遺構出土土師皿実測図(3)

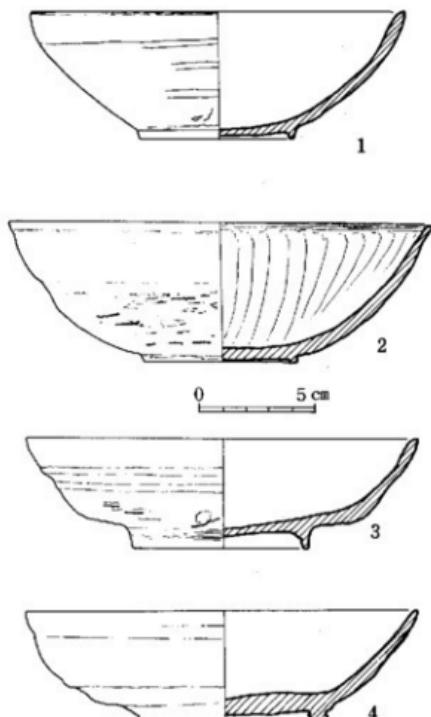
り、この場合明らかに後者が焼成、成形、整形において優っている。さらに板目压痕を持つものは、口縁部がやや外反するという共通点をもつ。

高台付壺 (第14図)

この器種は必ずしも多くなく、完形の姿がうかがえるものは、わずかに四個である。1は、底部半分と口縁部の一部が現在する。外面は灰色、内面は黒灰色をなし、部口縁部に黒斑をもつ。高台を取り付けた部分には窓による粘土の凸凹が残っている。器面は横なでのち窓による研磨が著しい。外面には三本の窓の暗文様の線がある。高台の内側は横なでが丁寧になされている。復原口径一六・二cm、器高四・三を計る。2も1と相似した器形である。外面下半部には窓による凸凹が残っている。口唇部内外とも横なでが著しい。内面は縦位の窓による研磨が丁寧になされている。内外面は黒灰色をなし、断面は灰色(一部黒灰色)をなす。胎土、焼成とも良好である。口径一八・四cm、器高六cmを計る。3・4は、前者に比して、壺部がやや押しつぶされたような形をなす。高台の形が前者と相違する。3は外面下半に粘土の凸みがみられて荒い感じであるが、内面はよく調整されてなめらかである。壺部外面に二条の凸凹をもつ。内外面、および断面とも全て黒灰色をなす。口径十七・二cm、器高四・八cmを計る。

4も3と同様な形をなす。壺部と高台の接合部分に凹みが生じている。内側上半になでが部分的にみられる。胎土は細質の粘土を用いているが焼

成悪く、黒灰色をなす。口径一六・八cm、器高四・八cmを計る。3・4ともに器形は左右対称をなさないが、4はとくに高台の輪形がゆがんでいる。



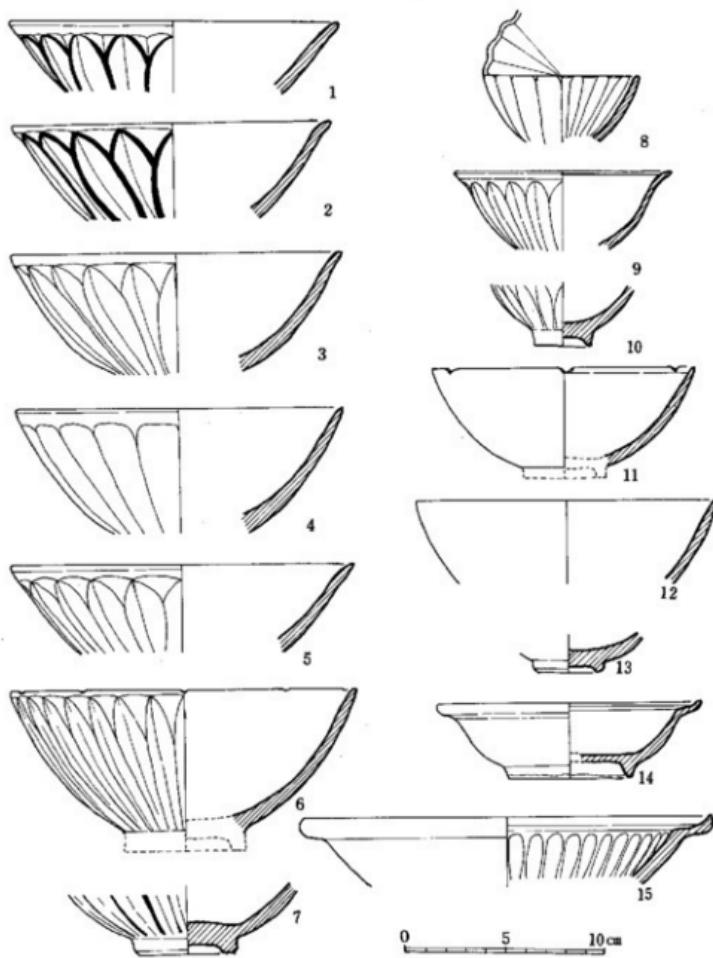
第14図 村落遺構出土上師壺実測図(4)

磁 器（第14図・第25図）

村落遺構およびその周辺から出土したもので、青磁器、青白磁器がみられる。器種は塊、皿が主で、合子等がわずかにみられる。器形、胎土、釉色、製作技術、等の点から七種に分類できる。以下、各種磁器について説明を加える。

一、龍泉窯産、青磁器（第十四図）いわゆる砧青磁とよばれる青色の美しい青磁器である。器種は塊形品が大部分を占める。出土磁器の中では最も多い。それぞれ文様の大小、釉薬の焼成に種々の変化をみせる。1・7・9・10は蓮弁文を有する。1・2は釉薬が一度にわたってかけられ〇・八mmの厚さを有する。蓮弁は沈線と削り出しによるもので複弁をなす。1は復原口径一六・六cm、釉色は黒ずんだ深青色を呈する。2は復原口径一六・二cm、釉色は淡青色、沈線部の青色と弁のふくらんだ部分が白くすけて美しい。3・5、7は1、2と同様の複弁文を有するがいずれも削り出しによるものである。4は釉薬が厚くかかり削りの部分を埋め、見蓮弁文とは異なる文様に見える。復原口径はそれぞれ・六・六cm、一六・五cm、一七・四cmを計る。釉色は3が黄味をおびた青色で一部口縁部が深青色を呈する。4は黄味が強く、ひび割れが美しい。5は灰色味の強い青色を呈する。釉薬は二度にわたってかけられ〇・六・〇・八mmを計る。

7は底部で、高台径5・2cm、高さ一・一cm、削り出しによる蓮弁文を有する。釉色は枇杷色を呈する。6は蓮弁が細く数が多いシノギ手と称するものである。復原口径一七・四cm、口唇部に浅い刻みを付し八花形をなすと考えられる。釉薬は三度にわたってかけられ一・三mmの厚さを有する。釉色は内面および口縁部が美しい青色、蓮弁文の部分が黒ずんだ深青色となる。8・15は青色の美しい釉色を呈する。9・10は小形の塊である。9は復原口径一一・一cm、口縁部がわずかに外反する。蓮弁は先端が丸く、削り出しによるものである。10は高台径三・九cm、高台先端部は釉がかかる。釉にそつて赤いしぶが吹く。11は口唇部に刻みを付し六花形をなす。14・15は平縁の塊形を示すが、15には内側に菊花文の陰刻をもつ。14の底部も10と同様である。8は小塊である。器壁は波をうち、内外面が菊花文状をなす。復原口径は8が七・八cm、11が一三・二cm、12が一五・一cm、14が一二・九cm、15が二〇・二cmを計る。釉薬は一度

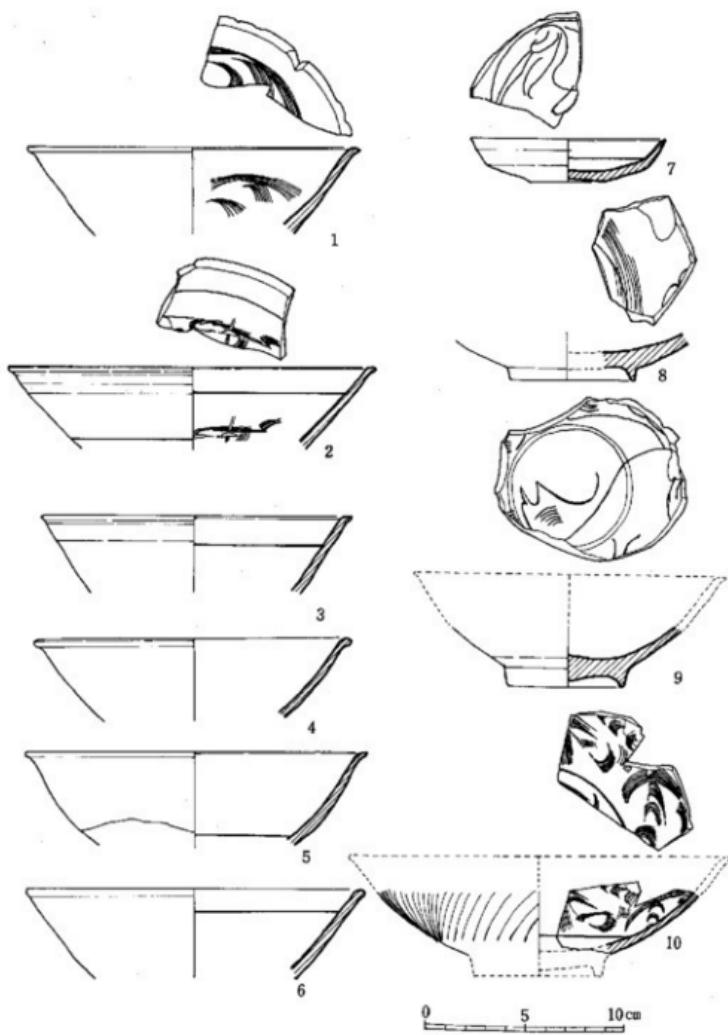


第15図 村溝遺構出土磁器実測図(1)

にわたってかけられ厚い。いずれも胎土は灰白色（半透明）を呈する。

二、櫛描文を有する青磁器（第16図）櫛描文あるいは細線文を有する。削り出しの高台から広がりながらたちあがる壇形になり、口縁部がわずかに外反する一群である。ただし、一部櫛描文のないものも、釉薬、器形からこれに含めた。

器種には壇形、皿形の一種がある。1は口縁部破片である。胴部内面に櫛描による弧線状の陰刻がある。完形でないため文様モチーフは判明しない。口唇部がわずかに外にかえる。胎土は白色（半透明）釉薬はうすくかけられ、淡い青灰色を呈する。復原口径一六・七cm、2も口縁部破片である。口唇部がわずかに外にかえる壇形品で、口縁部内面に一条の沈線をめぐらす。胴部内面には五本単位の流水文状の櫛描文がみられる。胎土は灰白色（半透明）を呈する。釉薬はうすくかかり淡い青灰色を呈する。復原口径一八・六cm、3・6は口縁部が外にかえり前例同様の器形をなす。3・6は口縁部内面に、5は身込みに沈線を一条めぐらす。胎土は3・6が白灰色（不透明）、4が灰白色（半透明）、5が白黄色（不透明）を呈する。釉薬は共にうすくかけられ、3・4・6は淡い青白色、5は黄灰色を呈する。また5には口縁部内面に釉薬のながれを認める。復原口径はそれぞれ、一五・八cm、一六・一cm、一七・四cm、一七・三cmを計る。7は皿形品で底部は平底を示し、胴部は広がり後線をもつて折れ、口縁部は直口とする。身込みには沈線を施し、身込みに細い曲沈線で草花文を刻む。胎土は白色（半透明）釉薬はうすくかけられ、青白色を呈せる。復原口径九・九cm、器高二・一cm、8は壇形品の底部破片で身込みの部分に沈線を施し、10本単位の櫛目文を施す。削り出しの高台をもち、胎土は灰白色（不透明）釉薬はうすくかかり青灰色を呈する。9も底部破片である。身込みに沈線を施し、内面には細沈線による草花文らしき文様を施し、その間に、櫛目のひっかき文を配する。高台は削り出して、胎土は白色（半透明）で釉薬は底部を除いて全面にうすくかけられ青白色を呈する。10は9同様の器形をなすと考えられる壇形品の胴部破片である。底部近くの内面に一条の沈線を施し、内面全体に円弧状の櫛目文を組み合せ文様構成をなす。外面は細沈線を口縁部から底部にかけて等間隔に配する。胎土は白色（半透明）で青白色の釉をうすくかける。



第16図 村落遺構出土磁器実測図(2)

三、珠光青磁（第17図）

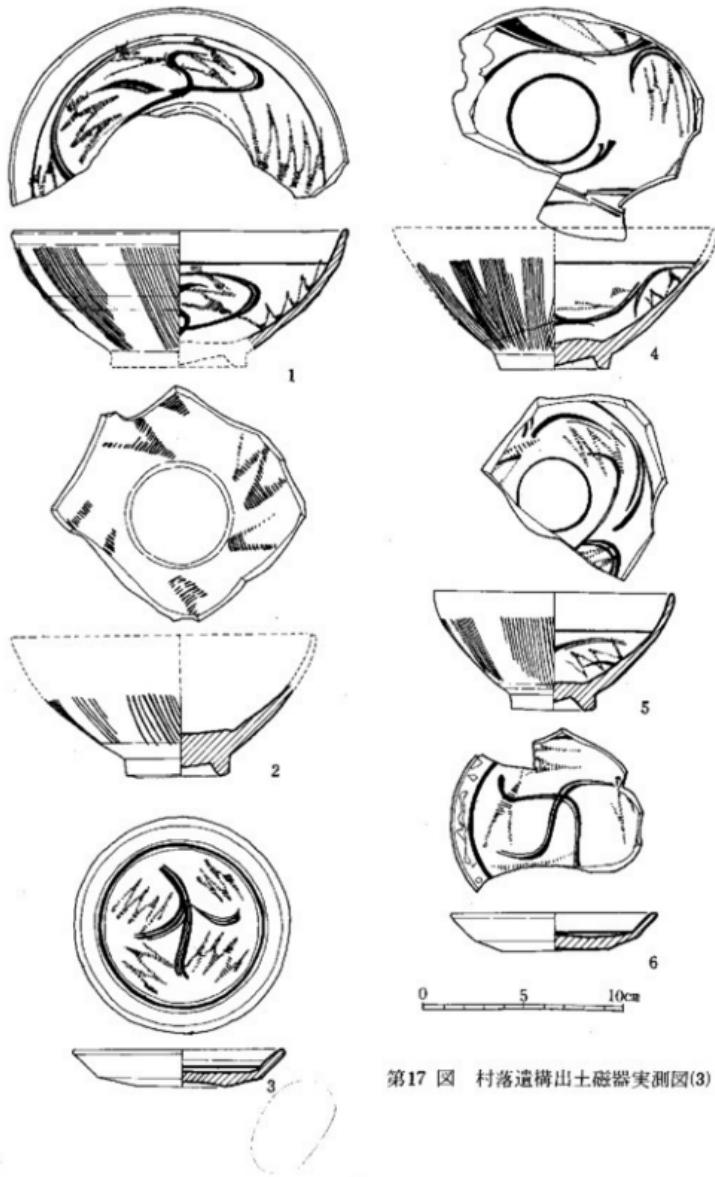
村田珠光などの茶人が愛好したもので、俗に「珠光青磁」「猫がき青磁」とよばれる。

描き文を施した一群である。器種は塊形、皿形の二種が認められる。1は塊形品であるが底部および胴部の約半分を失う。外面には口縁部から底部にかけて十九~二十本からなる、いわゆる猫搔の手による柄文様が施される。内面は口縁部直下に一条の沈線をめぐらし、さらに範により花文様を刻んだ上から、柄により雷光形の文様を施す。復原口径一六・九cm、胎土は灰色（不透明）釉薬は深青色を呈する。2も1同様の器形を示す。口縁部を欠き外面に柄搔文様を施す。内面は1と異なり、範による花文様を施さず、柄だけによつて電光形の柄搔文を施す。底部は削り出し、釉薬は胴部下半にはおよばず、青灰色を呈する。胎土は白黄色（不透明）である。3は皿形の完形品である。底部は平底で、胴部は外に広がり明瞭な稜線をもつて「く」の字形に折れ口縁部は直口する。見込みを範描き文で四区に分けその間に雷光形の柄搔文を配する。胎土は灰色（不透明）で、釉薬は底部を除いて全面にうすくかけられ、青色の美しい色を呈する。

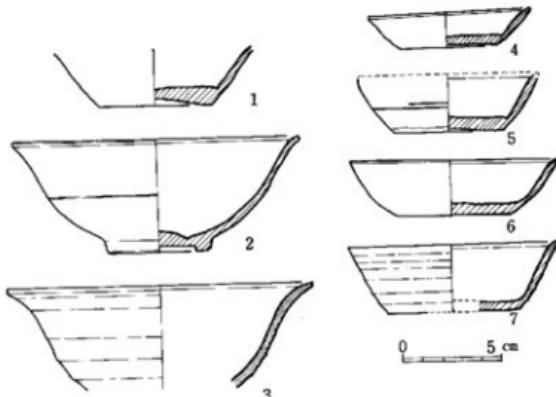
口径一〇・八cm、器高一・九cm、4は1と同様の器形、文様構成をなすものである。口縁部を失する。身込みには沈線を施す。外面は、いわゆる猫搔の手による柄目が施されるが1のようにな一定の間隔に施されるものでなく全面に施される。内面は、範描きの花文の上に、雷光形の柄搔文がみられる。胎土は灰色（不透明）で、釉薬はうすくかけられ青色を呈する。5も塊形品であるが、1・2・4と比較して小形である。復原口径十二・一cm、器高五・九cmを計る。文様構成は1と同様である。胎土は白灰色（不透明）を呈する。底部は範による削り出しである。釉薬はうすくかけられ底部にはおよばない。アメ色を呈する。6は3と同様の皿形品である。ほぼ同形同大である。底部は平底で、胴部は範削りにより整形され、身込みも3と同様に範描による四区分の中に雷光形の柄搔文を配する。胎土は白灰色（不透明）釉薬はアメ色を呈し、口縁部の釉は一部流れた状態を示し、コブ状にふくれる。

四、口秀を有する青白磁（第18図）

口縁部に釉かけがなく、胎土が出ている青白磁である。器種には塊形および皿形の二種がある。2・3は口縁部がや、外反し底部は高台を有する塊形品である。2は口縁部の釉薬にそつて赤いしぶが



第17 図 村落遺構出土磁器実測図(3)



第18図 村落遺構出土磁器実測図(4)

6は他より青味が強い。4は口径八・一cm、器高一・八cm、5は復原口径九・一cm、器高一・九cm、6は復原口径一〇・二cm、7は復原口径一〇・六cm、器高二・四cmである。

五、その他の青磁器(1) (第19図)

身込みの部分に段がついて下がり、口縁部が直口し、口縁部直下の内面に一条

吹きだす。身込みに深い沈線を施す。高台は覓削りで低い。釉薬は二度にわたってかけられるが、口唇部と底部にはかけられない。器壁はうすく、胎土は白色(半透明)で焼きは硬い。釉色は青白色を呈する。復原口径一四・六cm、器高五・七cm、2は1と同様の器形を呈するが底部を欠失する。胎土は白色(半透明)で、その上にうすく白色の釉薬をかける。釉薬には多くの気泡がみられる。器壁の外面にはヘラ削りの稜線がみられる。復原口径一五・四cmを計る。1・4・7は皿形品で底部は平底ないしや、あげ底となる。口縁部は直ぐのびて、口縁部先端を覽によって削り平坦とするは境形品にみられる整形法と同じである。1は底部がや、あげ底となり、うず巻状の細い沈線がみられる。見込みに沈線を刻む。4はほぼ完形を保つ。1と同様の整形であるが、口唇部がわずかに肥厚する。5には胴部に二条の沈線がみられる。底部は釉がけがなく、褐色のしぶが吹く。6・7は底部が完全な平底となるが、整形は他と同様である。一般に皿形品は釉がけが底部にいたって粗末になる。1・4・6・7には釉がけの際の刷毛目痕がみられる。釉薬は青白色を呈するが、

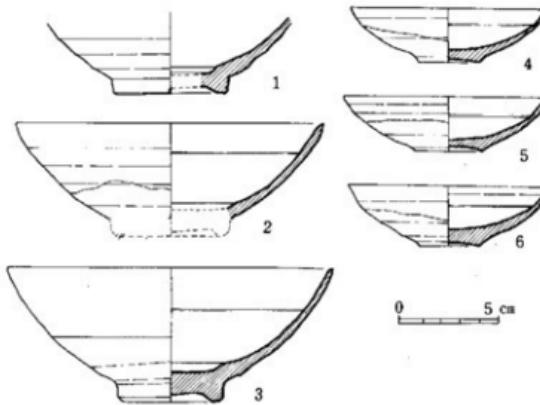
の沈線をめぐらす塊形品と、それと釉薬、整形上からセトをなすと考えられる皿形品の一群である。釉薬はバラエティーに富むが、整形には一貫した共通点がみられる。1は底部から胴部にかけての塊形品の破片である。身込みの部分が段をなして低くなる。底部は簞削り出しの高台となる。底部近くの胴部も簞削りによつて生じた棱線が明瞭に残る。釉薬は外側の胴部下半にはおよばない。アメ色を呈する。2は口縁部から底部付近までの破片である。身込みの部分が

段おちし低くなる。口縁部内面に沈線を施す。胎土は灰白色(不透明)で釉薬は二度にわたつてかけられるがうすい。

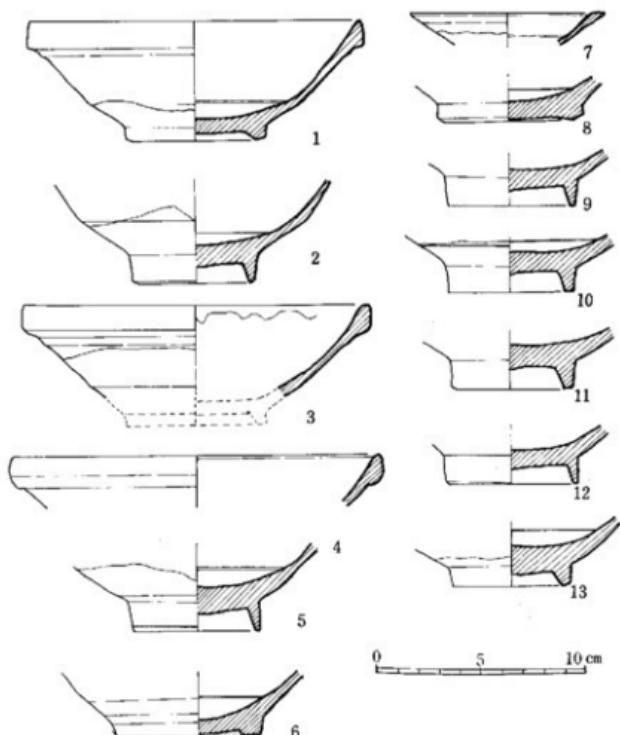
外側下半には釉はみられない。灰青色を呈す。3は口縁部、胴部の一部を欠失するがほぼ全形を知ることができる。簞による削り出し高台は1・2と同様の整形をなす。直口する口縁部直下に一条の沈線が施される。身込みは一段低くなる。胎土は灰白色(半透明)器壁はうすく、釉薬はうすくアメ色を呈する。復原口径一六・五cm、器

高六・七cm、4は平底をなし、ゆるやかに広がる胴部から口縁部にいたる。口縁部直下の内面には一条の沈線がめぐる。釉薬はうすく、外側胴部下半におよばない。復原口径一〇cm、器高一・七cm、5・6も4と全く同様の器形、整形を呈する。それぞれ口径一〇・四cm器高二・一cm、復原口径一〇・五cm、器高一・七cmを計る。

六、その他の青磁器(2)(第20図)
口縁部が折りかえされて厚くなり突帯状を示し、身込みに沈線が施される塊形品と、それとセット関係にあると思われる皿形品をこの一群として扱う。1は底部



第19図 村落遺構出土上磁器実測図(5)

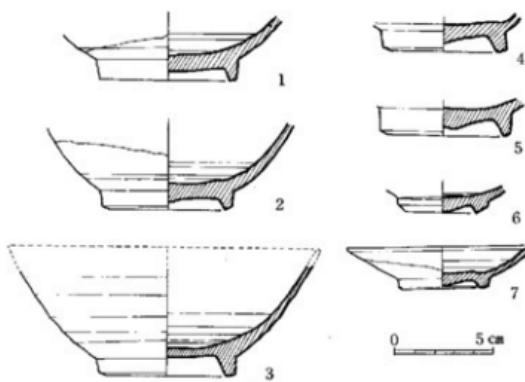


第20図 村落遺構出土磁器実測図(6)

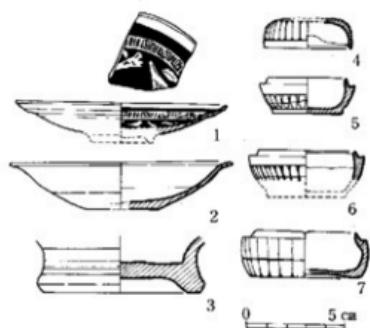
から口縁部までの破片ではほそ
全形を知ることができる。

青灰色を呈する。3は口縁部の破片である。1と同様、口縁部は折りまげられて厚い。胎土は黄白色を呈し、焼成はよくない。釉薬はうすくかけられ外面下半にはみられない。口縁部内面には釉薬の流れがみられる。青灰色を呈する。復原口径一六・九cm。4も同様の器形をなす。口縁部は折り返され厚くなる。

三角形をなす。底部は笠による削り出しで高台は高くなる。底部近くは笠による削りのため稜線が明瞭にみとめられる。身込みには沈線を施す。釉薬はうすくかけられ底部近くにはかけられない。釉薬には気泡が多い。胎土は白灰色(不透明)釉薬は灰白色を呈する。復原口径一六・一cm、器高五・八cm。2は口縁部を欠く。身込みに沈線を施す。底部は削り出しの高台で1に比較して高い。胎土は灰白色を呈する。釉薬はうすく、淡い



第21図 村落遺構出土磁器実測図(7)

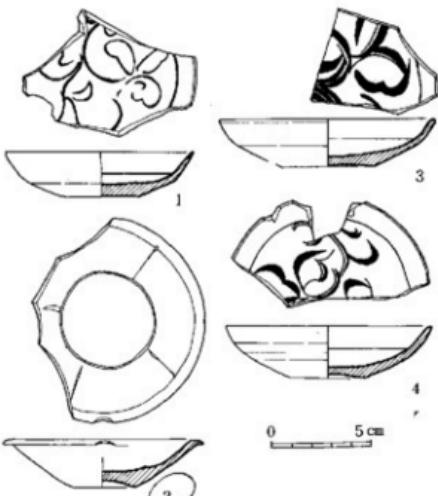


第22図 村落遺構出土磁器実測図(8)

胎土は白色（半透明）釉薬はうすくかけられて淡い飴色を呈する。復原口径一七・九cm。7は皿形品で身込みに沈線を施す。底部は明らかでない。口縁部は厚くなりながら外反する。外面下半には釉薬はかからない。胎土は灰白色（半透明）釉薬はうすく灰青色を呈する。復原口径九・四cm。5・6・8・13は底部である。5・6・8・10・13は身込みに沈線がみとめられる。底部には6・8のようにほとんど平底に近い削り出し高台を有するものと、5・9・12のように高い削り出し高台を有するものとがある。胎土は灰白色（半透明）を呈し、比較的うすくかけられたものである。

七、その他の青白磁(3)（第21図）
い部分が環状にみられる青白磁の一群で、器種には壺形と皿形の二種がある。

1は底部で口線部を欠く、底部は削り出しの高台で、高台は比較的高い。身込みに沈線を施す。また幅一・二cmの釉がかからぬい部分を有する壺形品である。胎土は灰白色（不透明）釉はうすく淡い青灰色を呈する。2も1と同様に底部破片である。



第23図 村落遺構出土磁器実測図(9)

高台は削り出しで高い。器壁も第による削りがみられる。身込みの部分には沈線が施され、一部壇状に釉がかからない。胎土は白色（半透明）釉はうすくかけられ、底部近くにはかからない。釉色は淡い青灰色を呈す。3は口縁部を欠く底部である。削り出しの高台から、たちあがつて直口する口線をもつ壇形を呈すると考えられる。

身込みの整形は1・2と同様である。器壁はへらにより削りがみられる。胎土は白色（半透明）釉は青灰色釉がうすくかけられる。

高台および底部には釉はかからない。釉には気ほうが多い。4・5も、前例と同様の身込みの部分に釉がかからない部分をもつ。共に胎土は白色（半透明）青灰色の釉がうすくかけられる。6・7は皿形のもので、壇形品同様に身込みの部分に沈線を施し、釉のかからない部分を有する。7は口縁部がわざなりながら外反する。底部は削り出しの高台で、壇形の底部と類似する。器壁はへら削りである、6は皿形の底部である。6・7共に胎土は白色（半透明）で、釉はうすくかけられ淡い青灰色を呈する。

八、景德鎮窯産青白磁および合子（第22図）

純白に近い胎土と水色をおびた透明性の青白釉がうすくかかる薄手の青白磁および合子類を合せて一群とする。

1は平縁の浅い皿形をなすものである。器壁は非常によく純白に近い白色を呈する。釉は透明性の青白釉がうすくかかる。皿の内面には、雷文がうきぱりにめぐらされ身込みの部分には草木文がうきぱりにされる。文様部は釉をとうし

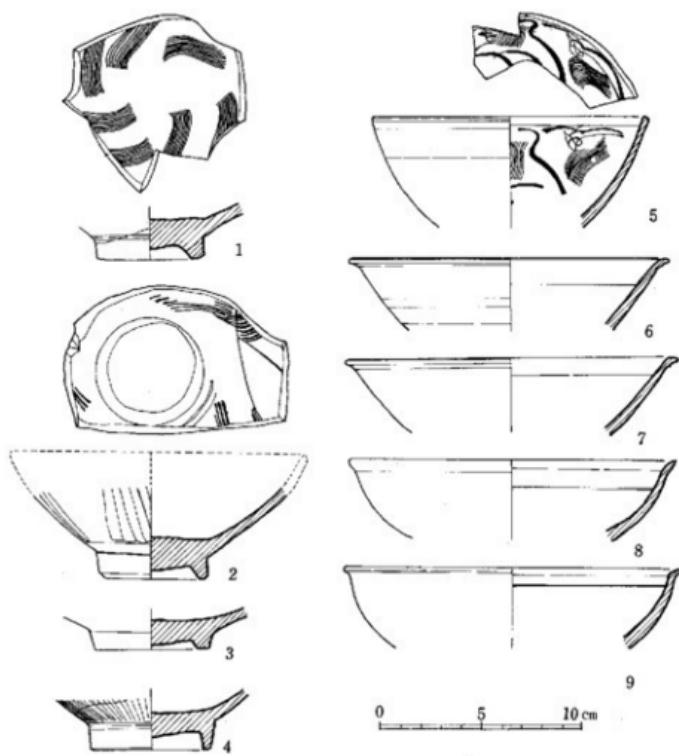
て白くすけてみえ美しい。復原口径一〇・八cm、2も1と同様皿形の青白磁である。口縁部は外反し底部は平底となる。身込みの部分および外面の底部近くに沈線を施す。胎土は白く（半透明）うすい。釉は透明性の青白釉がうすくかかるが、底部にはかからない。復原口径一〇・二cm、器高一・四cmである。3は壺の底部と思われるものである。あげ底となり外面に二条の沈線をめぐらす。胴部の器壁はうすい。外面と内面には透明性の青白釉がうすくかけらる。胎土は灰白色（半透明）を呈する。4は平形合子の蓋である。四分の一を現存する。復原口径四・五cm、器高一・五cm、側面には菊座形に型抜き文様がある。胎土は灰白色を呈しその上に、灰青色の釉がうすくかかる。5は平形合子の身の部分で口縁部の大部を欠く。口縁部は蓋うけのたちあがりがあり、底部は平底である。側面には菊座形の型抜き文様がある。胎土は白灰色（半透明）で、釉は内面と口縁の一部にかかり、淡い青白色を呈する。復原口径四cm、器高一・八cm、6も5と同様の形状を示す平形合子の身の部分の破片である。復原口径四・九cm、口縁部には蓋受けの立ちあがりがある。側面は菊座形の型抜きの文様がある。胎土は白色（半透明）で、釉はうすくかけられ内面下半と口縁上部にみられる。

7も平形合子の破片であるが全形の四分の一を有するものである。身の部分で、口縁部には蓋受けのためのたちあがりがある。たちあがりには刻みを付し花形をなす。側面は菊座形の型抜き文様が付される。底部は平底で、底面にへらによるとと思われ、削り痕が四条みられる。胎土は白色（半透明）である。釉は内面および側面にうすく透明性の青白釉がかけられる。色は淡い水色を呈し美しい。復原口径五・六cm、器高一・三cm、1-3・7は、景德鎮窯産の青白磁と考えられる。

九、その他の青磁(4)（第23・24図）

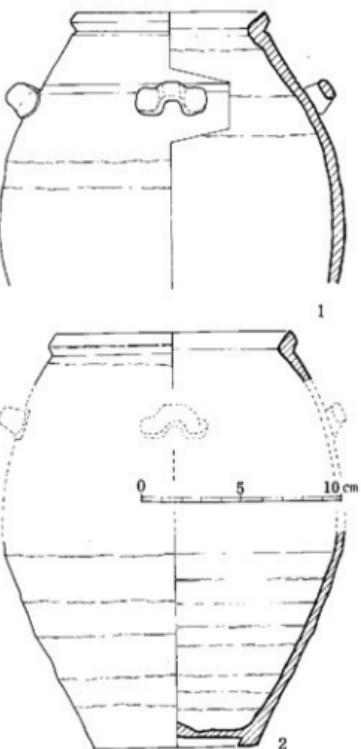
前述、八種の青磁、青白磁の中に含まれないものを一括してその他の青磁器(4)として扱う。この中の磁器はまだ分類が可能であるが、セット関係や數が少いために一括する。器種には碗形、皿形の二種がある。第23図1は皿形を呈する青磁で、底部から口縁にいたる破片である。身込みに沈線を施し、身込みに沈線によつて草花文を描き出す。胎土は灰白色（半透明）で、青灰色の釉が底部を除いた全面にうすくかけられる。復原口径九

・五cm、器高一・三cm、2も皿形のものである。口縁部の一部を欠く、底部はやゝあげ底で、口縁部は外反する。口唇部に1・2個の刻みが施される。身込みには沈線が施される。胎土は白色（半透明）で、釉薬は底部を除く全面にうすくかけられる。色調は青白色を呈する。口径七・二cm、器高二・四も、前出1・2と同様の器形を有する皿形の青磁である。共に身込みの部分に範描きによつて草花文を配する。胎土は白色（半透明）で、釉薬は底部を除く全面にうすくかけられる。3は青白色を呈し文様部のうきあがつた部分が白く透けて美しい。4は淡いアメ色を呈する。復原口径、器高はそれぞれ、一〇・九cm、一一・三cm、一〇・四cm、二・六cmを計る。第24図の1は塊形品の底部破片である。削り出しの高台がつく、身込みの部分に櫛がき文を円形に配し文様効果をなす。胎土は白色（半透明）で、青白色的釉薬が底部を除いた全面にうすくかけられる。2も塊形品であるが口縁部を欠き、身込みの部分は範で削られる胴部内面には沈線による文様を配した後に櫛がき文を配する。外面は範による幅広い沈線を組み合せて文様効果とする。文様モチーフは珠光青磁と通じる点がある。胎土は赤黄色を呈し、焼成は良くない。内面と胴部上半に青灰色の釉薬がうすくかけられる。削り出しの高台がつく。3・4は底部破片であるが、4は比較的高い削り出しの高台を有する。3は身込みに沈線が施される。胎土は3は灰色（不透明）、4は黄白色（不透明）である。釉薬はうすくかけられるが、3は黄白色、4は黒ずんだ青色を呈する。5・9は塊形品の口縁部破片である。5は口縁が直口し、内面に範描きの沈線および櫛がき文を配して文様をなす。胎土は灰白色（不透明）で青色の釉薬をうすく全面にかける。復原口径一三・九cm。6・7は口唇が外にかえり外面直下に細い削り出しの突帯一条をめぐらす。6は口縁部内側に細い沈線を一条めぐらす。胎土は6が黄白色（不透明）、7が白色（半透明）である。釉色は6が黄色、7が青白色である。8・9は口縁部が外反し、口縁部下の内側に沈線一条をめぐらす。9は外面に沈線を配し文様とする。胎土は9が黄白色（不透明）、8が灰白色（不透明）をなす。釉薬はうすくかけられ、8が黄色、9が青色を呈する。6・9の復原口径はそれぞれ、一六・八cm、一六・二cm、一六・四cm、一七cmを計る。

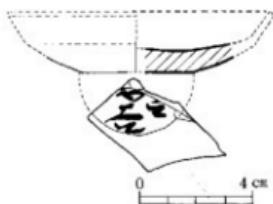


第24図 村落遺構出土磁器実測図 000

十、耳付壺(第25図) 耳付壺は二個体あるが、いずれも破片である。復原すると図のようになる。1は口径九・四cm、口縁部はく字形に外反し、口縁直下と頸部に沈線を一束と二束施す。頸部では沈線のため段がつき、それからややふくらみ胴部となる。耳は粘土紐を貼りつけたもので、頸部から胴部への移行するところにつけられる。現存は一個であるが本来は二〜四個付けられたものであろう。器壁は〇・七cmで粘土の巻きあげがよくわかる。釉は外面のみみられ青味がかつた褐色を呈する。胎土は灰色(不透明)で砂粒を含む。2も1と同様の器形を呈する。口縁部および胴部下半から底部にかけての破片である。復原口径一一・八cm、復原器高一一cm。口縁部はく字形に外反する。胴部から底部にはそのままのカーブで移行するが、底部はあげ底となる。断面による観察では、ある程度器壁を作った後に底部をうめたものようである。耳の付く頸部付近を欠失するために耳の形態は不明であるが本来は耳を持つものであろう。器壁には粘土のまき上げ痕が凹凸状に残る。胎土は黄褐色(不透明)で、焼成はよくない。釉はうすく、全面



第25図 村落遺構出土磁器実測図



第26図 墨書き有する磁器

(計測結果を示したもののは実形でないことをしめす)。

番号	長大径(cm)	細人径(cm)	孔(cm)	重量(g)	参考	番号	長大径(cm)	細人径(cm)	孔(cm)	重量(g)	参考	番号	長大径(cm)	細人径(cm)	孔(cm)	重量(g)	参考	
1	4.32 (2.19)	1.21	0.35	6.0 (3.3)		33	4.50	1.25	0.34	6.0 (4.40)		65	(4.00)	1.15	0.30	(5.0)		
2	4.35	1.25	0.30	6.0 (3.3)	ヘア芯	34	4.40	1.24	0.40	7.0 (2.72)		66	(2.72)	1.28	0.30	(4.5)		
3	4.35	1.18	0.27	6.0 (3.3)		35	4.56	1.20	0.41	7.5 (6.67)		67	4.02	1.44	0.32	7.0 (6.0)		
4	4.54	1.15	0.30	6.0 (3.3)		36	4.60	1.33	0.32	7.5 (3.88)		68	(3.88)	1.45	0.33	(6.0)		
5	4.53	1.30	0.42	7.5 (3.3)		37	4.25	1.43	0.36	6.5 (2.40)		69	4.74	1.40	0.33	8.5 (4.0)		
6	3.95	1.27	0.34	6.0 (3.3)		38	4.52	1.18	0.30	6.0 (3.70)		70	3.21	1.20	0.35	4.5 (1.57)		
7	4.43	1.22	0.25	6.0 (3.3)		39	4.26	1.54	0.28	5.5 (6.0)		71	2.42	1.13	0.33	(2.5) (3.5)		
8	4.85	1.20	0.30	5.0 (3.3)		40	4.30	1.48	0.37	8.0 (3.82)		72	3.70	1.35	0.25	8.0 (3.82)		
9	5.10	1.45	0.27	11.0 (6.0)		41	4.35	1.27	0.34	6.5 (3.30)		73	1.60	0.54	0.30	7.0 (3.30)		
10	4.37	1.19	0.30	6.0 (3.3)		42	4.40	1.26	0.37	6.5 (3.70)		74	3.21	1.20	0.35	4.5 (1.57)		
11	(4.0)	1.32	0.34	9.0 (3.3)		43	5.05	1.35	0.32	9.5 (3.70)		75	2.42	1.13	0.33	(2.5) (3.5)		
12	4.36	1.46	0.38	9.0 (3.3)		44	(3.60)	1.22	0.28	6.0 (6.0)		76	4.70	1.20	0.30	7.5 (3.5)		
13	4.30	1.07	0.27	4.5 (3.3)		45	4.20	1.15	0.22	5.0 (3.63)		77	2.42	1.13	0.33	6.8 (3.5)		
14	5.05 (2.38)	1.27	0.30	7.0 (3.6)		46	5.40	1.14	0.33	5.5 (3.82)		78	4.43	1.29	0.33	6.8 (3.82)		
15	4.43	1.35	0.30	8.0 (3.3)		47	5.20	1.28	0.35	6.0 (2.42)		79	3.21	1.20	0.35	4.5 (3.0)		
16	4.26	1.42	0.32	8.5 (3.3)		48	4.20	1.23	0.20	9.0 (3.63)		80	2.42	1.13	0.33	6.8 (3.5)		
17	4.26	1.42	0.32	8.5 (3.3)		49	4.30	1.02	0.30	5.0 (4.50)		81	2.42	1.13	0.33	6.8 (4.5)		
18	4.34	1.37	0.30	7.5 (5.5)		50	4.50	1.45	0.51	8.5 (3.65)		82	1	6.30	1.68	0.35	15.0 (株形II)	
19	4.08	1.22	0.33	5.5 (5.5)		51	3.98	1.30	0.30	6.0 (3.70)		83	2	3.77	1.50	0.30	(9.0) n	
20	4.22	1.27	0.29	7.0 (5.5)		52	3.70	1.30	0.34	5.0 (3.65)		84	3	(4.38)	1.60	0.37	(11.0) n	
21	4.08	1.20	0.30	5.5 (5.5)		53	4.20	1.50	0.38	9.0 (3.65)		85	2.42	1.13	0.33	6.8 (3.5)		
22	4.65	1.47	0.31	7.0 (5.5)		54	5.08	1.27	0.47	9.5 (3.65)		86	2.42	1.13	0.33	6.8 (3.5)		
23	4.54	1.31	0.30	6.5 (5.5)		55	4.01	1.20	0.32	5.0 (3.65)		87	2.42	1.13	0.33	6.8 (3.5)		
24	(3.86)	1.20	0.37	5.5 (5.5)		56	(2.45)	1.31	0.35	(3.5)		88	2.42	1.13	0.33	6.8 (3.5)		
25	4.16	1.23	0.30	6.0 (5.5)		57	4.63	1.37	0.32	7.5 (3.65)		89	2.42	1.13	0.33	6.8 (3.5)		
26	4.42	1.36	0.36	7.0 (5.5)		58	4.01	1.20	0.32	5.0 (3.65)		90	2.42	1.13	0.33	6.8 (3.5)		
27	4.64	1.35	0.31	7.0 (5.5)		59	4.70	1.48	0.25	9.5 (3.65)		91	1	4.87	1.94	0.35	17.0 (熱透形)	
28	(4.95)	1.28	0.38	7.5 (4.0)		60	(3.37)	(1.10)	0.31	5.0 (2.40)		92	2	(4.41)	1.56	0.35	(13.5)	
29	(4.06)	1.44	0.33	7.5 (4.0)		61	(4.00)	1.30	0.30	6.5 (3.78)		93	3	(3.78)	2.18	0.78	(15.5)	
30	(3.72)	1.15	0.38	5.5 (4.0)		62	4.68	1.17	0.27	7.0 (3.70)		94	2.42	1.13	0.33	6.8 (3.5)		
31	4.39	1.18	0.32	5.5 (4.0)		63	4.27	1.22	0.32	7.0 (3.70)		95	4.43	1.59	0.34	15.0± (3.5)		
32	5.15	1.13	0.29	5.0 (4.0)		64	4.27	1.22	0.32	7.0 (3.70)		96	4.43	1.59	0.34	15.0± (3.5)		

第2表 管状土種計測表(棒試形I)

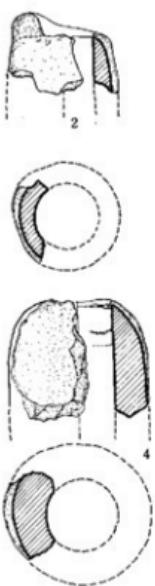
にかけられる。釉色はアメ色を呈す。

十一、墨書銘のある青磁（第26図）

全体の形は不明で皿形の底部に墨書銘がみとめられるが判読することができない。胎土は黄白色（不透明）で灰白色の釉がうすくかけられる。村落遺構堅穴Iの出土である。

ふいご羽口（第27図）

六数個体部が出土している。出土場所は村落遺構の溝IIの黒土中および近世溝中に擾乱された状態で出土した。図示できるのは第27図に示した四点で他は小破片となっている。形態はすべてが円筒状を呈するものである。1は先端部で外径六・八cm、内径一・二cmであり完結する部分は高熱をうけて、ガラス質のものが付着する。2は胸部破片で、復原外径八・四cm、復原内径一・一cm、内側は数個の低い段をなしている。3・4は共に先端部で1同様、高熱をうけてガラスの付着物がみとめられる。1・4は胎土に砂を多く含み良質とはいがたい。



第27図 ふいご羽口実測図

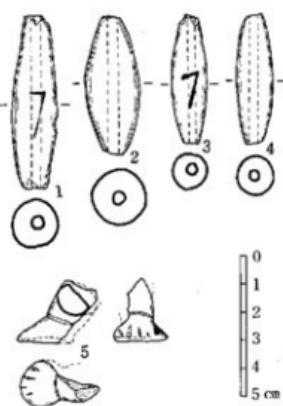
土錘（第二十八図）

村落遺構におけるスラッグ、製鉄遺構、灰穴および黒色の灰屑と思われる観察は鉄生産を実証する遺物である。

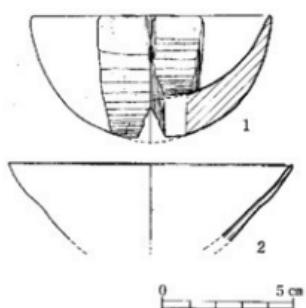
漁網に使用されたと考えらる土錘が主に遺跡の東北部に散在した状態で出土した。総数八一点で、すべてが管状土錘である。現代使用土錘と

大差はない。土錘は大きさは二類に分けることができる。I類は棒状を呈するもので、質量により一種に細分できる。一類は最大長四・四三cm、最大径一・二九cm、孔径〇・三三cm、重量六・八〇gの平均値を示し、量的には七二点（全土錘の九二%）を占める。二類は一種より一まわり大きいもので、最大長六・三〇cm、最大径一・五九cm、孔径〇・二四cm、重さ一・五・〇(±)gの平均値を示す。量的には少なく三点（全土錘の四%）を占めるにすぎない。

II類は紡錘形を呈するもので、量的に少く三点（全土錘の四%）を占めるにすぎない。最大長四・八七(±)cm、最大径一・〇二cm、孔径〇・四九cm、重量一七・〇gの平均値を示す。I・II類共にその製作方法は、棒に粘土をまきつけ整形を行い焼いたものである。焼成は良い。表面の調整は指でなでる程度で丁寧ではない。中にはまきつけたままのものもみられる。一般に磨滅が著しく判別しがたい。また、I類中にはヘラ記号を有するものが一五点（I類の一九%）が認められる。一四点は「フ」他の一点は「八◇」の記号をもつ。中世における漁網錘の出土は最近資料の増加をみているが不明な点が多く、上記に分類したものが、年代差、漁網の種類、あるいは漁場の違いによって生じるものかは不明であり今後に残された問題点であろう。又ヘラ記号についても注意すべきである。以下、各漁網錘の計測表を示しておきたい（第二表）



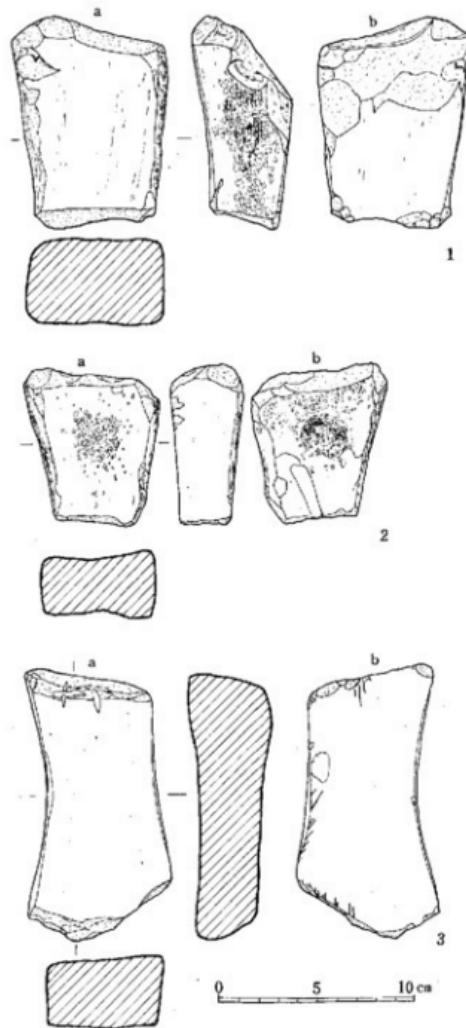
第28図 土錘・獸脚実測図



第29図 木製品実測図

獸脚一点が村落遺構第2層から出土している。土師質のもので、胎土に砂粒を若

干含むが、良質である。焼成は良くない。現存部は足部先端を含む一部で、大部分を欠失している。足の部分は沈線を入れ五つに分け指をあらわす。獸脚の出土例は少く貴重な例といえよう。



第30図 砥石実測図(1)

二、木製品(第29図)

木製品は二点で、共に橢形を呈する。一は口縁部から底部近くまで残すものであるが、きわめて小破片である。復原口径九・二cm、推定高四・八cmの丸底になる橢形木製品である。器壁は口縁部から底部にかけて順次厚くなり、〇・二～一・四cmである。かなり厚手のつくりであるが、内外面とも整形は良好で、ロクロによって製作されたことを知る。口縁部外面にわずかに「黒うるし」の付着を認める。元来は全面に「黒うるし」

が塗られていたものであろう。竪穴IIの遺構にういた状態で出土した。

二は口縁部から胴部にかけての破片である。内外面とも「黒うるし」塗りであるが、かなりのうるしの剥脱がみられる。又、黒うるしの上に「赤うるし」が一部認められる。黒うるしを地として赤うるしによる模様があつたものと考えられるが、どのようなものかは知ることができない。器壁はかなりの凸凹があり、整形は良好とはいえない。復原口径一〇・八cmで椀形を呈するが、底部はどのようになるかは不明である。器壁は一に比較して薄手で〇・二一〇・四cmである。小竪穴IIIの底面に接した状態で出土した。

三、石製品

石製品は總点数四六点を数える。大部分が村落遺構の第二層より出土、一部溝等の遺構からの出土をはじめる。種類は石壠、滑石、容器、砥石、および石端再加工品である。(第3表)以下個々の遺物の説明を加える。

砾石(第30・31図) 計五個の出土をみた。肌面の粒子の違いにより、荒砥、中砥、細砥に分類できる。

一は硬質砂岩製で四面が使用される。中央部は細く擦へる。その部分より他は欠失する。側面は共に敲打が加えられている。肌面の粒子はやや大きく荒砥であろう。

二も硬質砂岩製であるが一と比較して肌面のきめは小さく中砥であろう。半分を欠失する。四面を砥石として利用しているが、半欠後、一時火を受けたらしく、表面にススが付着し、一部が酸化赤色を呈す。さらにその後中心部(=a・b面)に敲打が加えられ、b面ではそれが著しく、丸く凹む。

三は頁岩製で一部を欠失する。細砥であろう。四面が砥石として使用され、中央部は凹み細くなる。上端(=a面)には擦り切った跡が二条みられ、他面(=b面)には金属器によると思われる条痕がある。

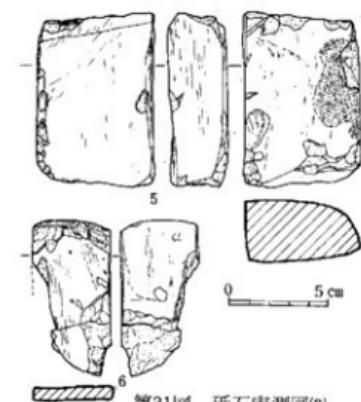
四是頁岩製で細砥である。三面が砥石として使用されている。ほぼ完形品である。小口の一端には砥石として使用前

のみ状工具による調整痕がみられる。

五は粘板岩製の細砾である。長方形に整形され、一部は欠失する。扁平で一面が砥石として使用されている。他の四点に比して小形である。

石 塙（第32図） 石塙は全てが滑石製品で、形態的にII類に分けることができる。I類は方形のこぶ状把手を有し、丸底になると思われるもの、II類は口縁部のや、下につばを有し、底部が平底になるもので、I類は量的には一点で他はII類に属する。

IはI類に属するもので、口径一五・五cm、（内径一一・八cm）推定高八・九cm、口縁部が直口し底部は丸底を有し、碗形を呈する。口縁部には、方形のこぶ状の把手数個をもつ。外面は製作時ののみ状工具の痕が顕著に残る。工具の方向は口縁部から胴部にかけては右横からで、底部近くは右傾めからのものである。内面は工具痕の上を研磨しながらかである。器壁は一・六cmの厚さである。胴部下半にススの付着が認められる。



第31図 砥石実測図(2)

2はII類に属する。復原口径一・〇cm（内径一七・四cm）口縁部の下に鍔をめぐらす。鍔の上下に沈線がみられるが、これは製作時に生じたものであろう。胴部外面は荒削りの上を調整するもので、細い条痕が横方向に残る。鍔下半から底部にかけてススが付着する。底部は平底をなすと考えられる。内面はなめらかに調整している。鍔の直下に三孔がうがたれる。一個接するが他は五cmはなれていて、そのうち二孔には鉄の細棒が残っており、つまり手であったことを示す。3は2と同じ形状を呈する。復原口径一・一cm、（内径一七・六cm）、や、口縁部が内傾する。鍔の下に一

孔が内側よりうがたれる。外面はのみ状工具の丁寧な調整により整然としている。内面は研磨されなめらかである。外側全面と内側口縁部にススが付着する。それぞれ別に出土したが、整理の段階で接合できた。

5は復原口径二六・八cm（内径二四・四cm）を計る。口縁部下に一・八cm巾の鋸をめぐらす。外面は荒削後、のみ状工具により左横方向より調整する。内面は研磨によりのみ痕を消しなめらかである。鋸以下にススが付着する。口縁部内側と胴部われ口に再加工を認める。器壁厚一・五cmである。4も同様の整形、形状をなす。内面は研磨によりなめらかであるが、一部に凹凸が残る。鋸以下にススを認める。又、口縁部の内側には炭化物の付着がある。外面調整は左横方向である。復原口径二三・cm、（内径一九cm）器壁厚一・五cm、

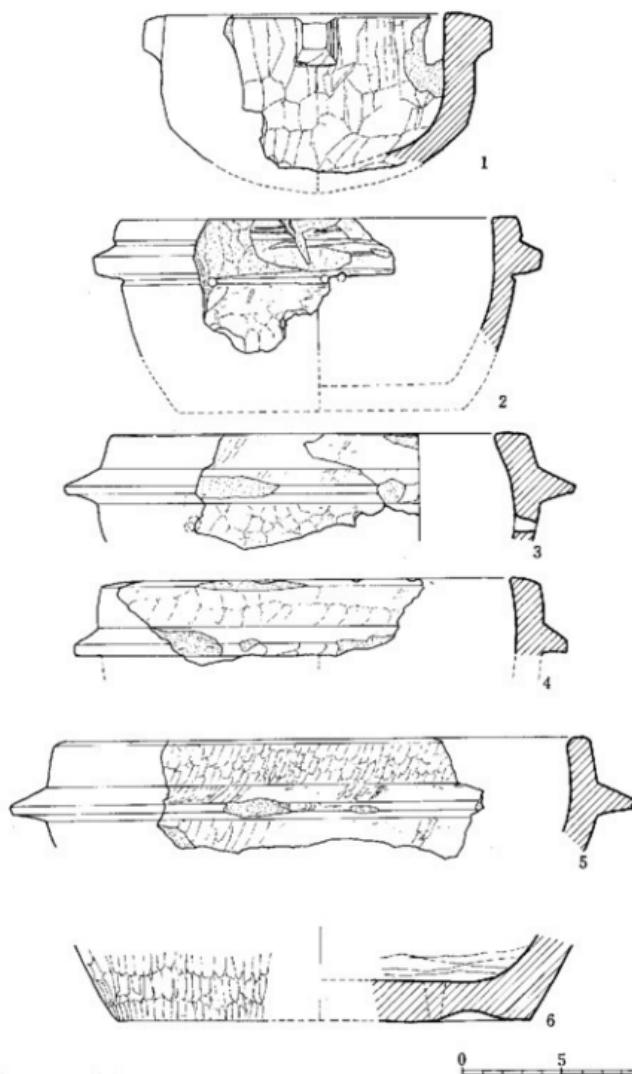
6は石堀底部である。復原底径二・cm、器壁厚二cm平底である。側面は左側からの横方向のみ状工具による調整痕が明瞭に残る。底面には、径三・五cmの技打による凹部がある。又それをや、離れ内側よりあけられた一孔がある。外面にはススの付着が認められる。

他に石堀底部がある。復原底径三五cmを計りかなりの大形品であると思われる。平底の底部は荒削りのまま放置されるが、側面は調整が施されなめらかである。内面は幅広のみにより、整形される。外面にはススの付着が著しい。

滑石製容器（第33図） 小形品、中形品の各一個がみられる。4は小形の容器で原形の約四分の一の有し、原形は知りうる。復原口径五・一cm（内径四・一cm）高さ二・八cmである

	石 鍋			石鍋再利用品		滑石製容器		石			
	口縁部	胴部	底部	製品	未製品	中形	小形	底延	中延	仕上げ品	計
点数	15	10	5	2	7	1	1	1	1	3	46
計				30		9		2		5	46

第3表 石製品個体数



第32図 石堀火窯図

る。外・内面は荒削りのままである。器壁厚〇・五cm。

6は中形品の底部である。底径八・七cmであるがや、横円形を呈す。底外面はよく研磨されなめらかである。外側へ横方向、上下方向の整形) 内面共のみ状工具により整形されるが、内面にはのみ痕が著しく残る。

石塙再利用品(第33図)は六・四cm×九・五cm、厚さ一・五cmの長方形の板状をなす。上部中央部に一孔を有する。中央部より半切し二片になる。表裏両面共にのみ状工具によつてなめらかに調整される。b面は中央部がや、凹む。部分的にススが付着し①、石塙の転用品と考えられる。

2は一と同様の形状をなす。中央部よりたてに破れ半壊し半分を欠損する。石塙の再利用品と考えられ、かなりの変曲をもつ。一面は再加工調成が加えられているが、一部に原状部分があり、そこにはススの付着が認められる。他面にもかなりのスス付着が認められる。

加工痕ある石塙片(第33図)石塙に再加工を加えたもの七点があるが代表的なものについてみていただきたい。

4は口縁部から胴部までの破片である。鋸直下に内側からあけられた一孔を有し、金属がつまる。孔の上の鋸はのみによつてV字状に削りとられる。表面にはススが付着する。再加工は周辺部にみられ石塙から長方形状の板を取つてゐる。加工はすべてのみによる。

6は、石塙底部近くに破片、一端をすりきりによつて切断するもので、外面にはススが付着する。

7は右塙胴部破片で再加工痕が著しい。a面の下半分には再加工のみ痕がみられ、一部原状を保つ部分にはススが付着する。鋸除去のための加工痕らしい。b面には金属器による切断痕二条がみられる。側部にも一部のみによる加工がみられる。

小 結

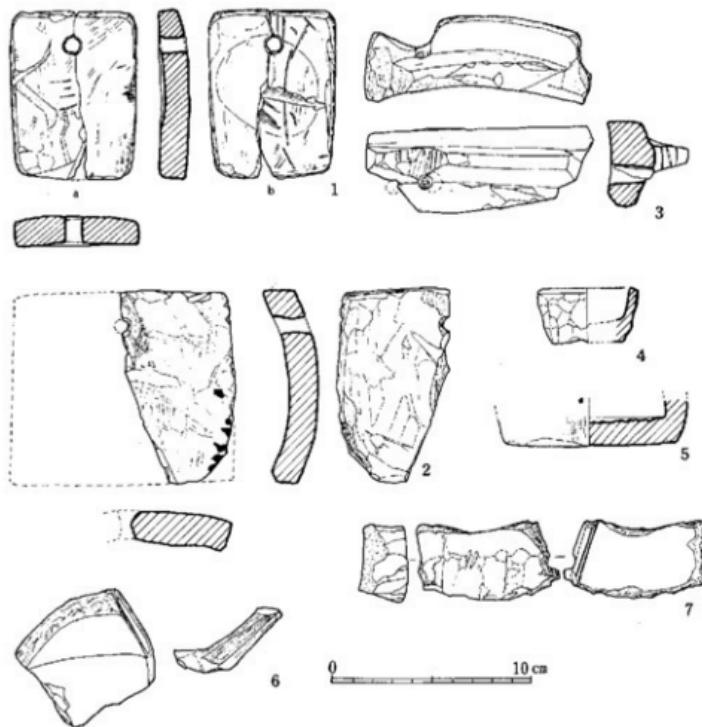
出土の紙石はすべて固定して使用されるもので石材は硬質砂岩、夏岩、粘板岩などで、それぞれ荒砥、中砥、細砥に区別されるが、今日使用されているものと同じである。

石堀は前述のように形態的に二類に分つことができよう。タイボロジーでは I 類が II 類に先行する可能性もあるが、使用目的の差異による形態差も、考慮されるべきであろう。遺跡出土のものは山口県篠石遺跡で七世紀～八世紀の須恵器、十師器と共に石堀一点が出土して石堀としては最も古い時期に属しよう。これは、I 類に相当する器形である。一般的には平安～鎌倉時代に盛行するものと考えられている。分布は西日本に広くみられ、一部南島まで達している。⁽³⁾ 本遺跡出土の品は、土器の年代より平安末～鎌倉時代のものであろう。

この時代の石製品の大部が滑石製であることは日々良遺跡でも同様である。現在まで石堀の製作地として長崎県西彼杵郡雪ノ浦、嘉穂郡八木山村などが知られているが、雪ノ浦では岩壁に石堀の外形をつくり出し、その後切斷する工程が知られている。産地を実見していないが、本遺跡出土の大部の石堀が器壁と原材たる滑石の節理が直交する状態を示す点から類推すれば、雪ノ浦のように形取りして石堀を母岩から離すという場合には、節理にそつて行うと作業は容易であるので、このような手法が石堀作成に際してかなり一般的ではなかつたかと考える。日々良遺跡出土の石堀の中には錫直下に孔を有するものがあり、そのうちに二点には金属がきびついている。また第33図3のよう孔直下の錫を V 字状に除去しているものなどがあり、石堀の中には釣手を持つものがあつた事が推定できる。出土の石堀は錫の下、および底部にかけてススの付着が著しく、実用に供したものである事は云うまでもない。

石堀を再加工しているものもあるが、加工に際しては、擦切り、金属器による切断、のみによる加工、調整などが行われている。とくに擦切りは他遺跡の例もあり、一般的な手法の一つであつた事を思わせる。これが用いられた理由を考えると、前述のように製作の途中で行う加工は石の節理を最大限利用しているので、節理に対しては打削より、擦り切るという事が有利だと既に知られていたものと思われる。また滑石自体の柔らかさも一つの条件であつたろう。

さて、このような石堀再加工品、一点はいずれも方形の板状をなし一孔をもつものであるが、さらに製品化された後にススが付着している。この事は同製品の使用目的の手がかりになることではあるが、精確な用途は類例の増加を俟た

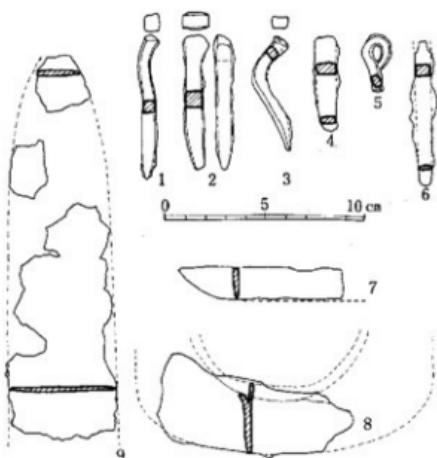


第33図 加工痕のある石鍋破片

金属器には角釘、刀、鋸先、不明鉄器および貨幣がある。
角釘 22 村落遺構より一三
点の出土をみた。形状より二種に区別できる。Iは断面方形のまま先端部が細くなる22ので図の1・3にあたる。IIは先端部が偏平になりくさび状をなすもので、図の2・4・6がそれである。4は角釘というよりもくさびそのものかも知れない。1は現存長七・二cm、2は六・七cm、3は五・七cm、4は四・八cm、6は七・二cm、1には丹が付着する。

四、金属製品（第34図）

ねばならない。



第34図 鉄製品実測図

刀（7）村落遺構より数点出土をみる。いずれも小破片で形態については明らかにしがたない。第34図7に示したもののは小刀の先端部で現存長八・四cm、幅一・六cmのもので、柱穴より出土。

刀先（8）第34図8に示すもので、刃部を残す破片である。刃先のみの製品で、挿入部は袋状をなす。

不明鉄器 村落遺構より数点の出土をみる。第34図5に示したものは、断面方形の棒を折りまげて頭部に輪をつく。現存長二・八cm、9は偏平な鉄板を剣先状にしたものである。断面は中央部がや、厚くなりレンズ状をなす両刃の鎌であろうか。

貨幣 村落遺構より一枚、古社遺構より三枚の出土がある。

村落遺構より出土したものは、腐蝕がひどく判読したくが淳化元宝（北宋、九九〇年）であろう。古社遺構より出土したものは、いずれも寛永通宝である。

注 ① 福島邦弘「年の神遺跡」九州縦貫自動車関係埋文化財調査報告書 一九七一福岡

② 小野忠氏「後石遺跡」山口県文化財調査第4集 一九五一年口

③ 佐藤伸二「南島の須恵器」沖縄の社会と考古 一九六九年

④ 八重津櫻勝「肥前国西ノ浦遺跡調査報告」考古学雑誌 四一四 一九二四

製作地は確認されていないが著名的な滑石の原産地である。このような例は福岡平野東にそびえる立花山でも同様であり、石堀製作地が存すると思われる。

第四章 総括

一、古代の糟屋

律令時代の糟屋郡は、香椎・志珂・厨戸・大村・池田・阿曇・柞原・勢門・敷梨の九郷を管する中郡である。香椎郷は福岡市香椎町、志珂郷は志賀島、阿曇郷は糟屋郡和白、新宮、柞原郷が同郡久原、勢門郷が同郡勢門、池田郷は同郡塔ノ原・下原・原上・立花口・二代附近に比定されるが、(第4回良寛「日本地理志料」下巻七四〇頁) 残る厨戸・大村・敷梨の二郷は未詳である。ただ糟屋郡宇美町・須恵町・大川・仲原及び多々羅川下流域などがこの三郷のいずれかが擬定されることは明らかであろう。大宰管内志は大村郷を青柳地方に当るが、一説には宗像郡席内郷(福岡県糟屋郡延内を中心とする)に含ませる考え方もある。(吉田東伍「大日本地名辞書」一四七〇頁) 敷梨郷は「筑前統風土記」に富良川に音が相通する理由として、これを遺名とする説が見える。厨戸郷は或は応神天皇生誕にまつわる地名をもつ宇美の地域も一考に価するのではないかろうか。古事記には、息長帝貢命、新羅より帰還し、筑紫國に渡り、「其の御子は阿礼坐しつ。故に其の御子の生地を号けて、宇美と謂ふなり」と記し、応神紀にも「於筑紫之畠田に生れますとか、また神功攝政前紀に「故時人其の產廻を号けて宇瀬と曰ふなり」とあり、帆日本紀所引の筑紫風土記には、神功皇后が、「凱旋の日、芋瀬野に至る。太子誕生す。此の因縁有りて芋瀬野と曰ふ。産を謂ひて芋瀬となすは風俗の言調なり」としている。ここに宇美八幡宮を祭られているが、このような地名伝承を残すのはここが神功皇后、応神天皇を祭る神社の厨戸が置れていたことに由来するものではあるまい。そうすると大村郷はむしろ糟屋郡糟屋町あたりに比定した方がよいことになる。これらは単なる試論に過ぎないが、この糟屋こそ、繼体紀に見える糟屋屯倉である。筑紫君磐井の叛乱平定の後、磐井の子萬子が讃罪のため、朝廷に献じたのが、この屯倉である。(繼体紀二十二年十一月条) 糟屋郡の都衛もこの屯倉の系譜を引くものと考えられるとすると、糟屋郡の大村はその中心地にふさわしく、人口の緻密さを示す名称ではないだろうか。兵部

省式に見える筑前國の夷守駅は、一説には糟屋郡糟屋町阿恵の「日守八幡社」あたりとする。(『筑前旧志略』筑紫編「九州万葉散歩」)しかし、延喜式に席打駅(席内村)と久爾駅(席田駅)の間にあるので道程より推して多々羅浜に置れた駅とする吉田東伍博士の説の方もすてがたい魅力がある。(『大日本地名辞書』一四七六頁)萬葉集にも(大監大伴宿祢百代少典山口忌寸若麻呂及び卿の男家持ら駕使を相送りて共に夷守の駅家に到る)(卷四の五六七)とありその時、大伴百代の歌は

草枕 旅行く君を愛しみ

副ひてぞ來し 志可の浜辺を(卷四の五六六)

とあり、浜辺づたの道を駕使と歩んでいたようである。阿恵の「日守」は名鳴川を過ること約一里の處に位置し、國鉄箱崎駅の二十余町東に当るので、その点よりもこれを比定することは難しいともいわれている。(森本治吉「萬葉集に於ける九州地方」萬葉集大成21、二六七頁)夷守駅が多々羅浜であるとすれば、多々羅川(糟屋川)の河口である。つまり糟屋屯倉に西接する處である。ここが夷守と称されるのは、「蓋し防人屯戍之處」(都岡良弼「日本地理志科」下巻七四〇頁)であつたとも考えられている。因みに魏志倭人伝に「東南奴國に至る百里、官を兜馬頭と曰い、副を卑奴母離と曰う。一万余戸有り。東行不彌國に至る百里。官を多模と曰い。副を卑奴母離と曰う。千余家あり」として、奴國と不彌國に「卑奴母離」という官人が置かれていた。これを夷守と同意義に解す立場がある。だが「夷守り」(郷守り)の「毛」は上代假名遣いでは甲類モmoであり、卑奴母離の「母」は乙類のモmであるから、卑奴母離を「夷守」と解することはできないとする説がある。(大森志郎「魏志倭人伝の研究」一九〇〇頁)卑奴母離はPnomoliと訓まれたから、卑奴は「日野」なら意味が通する。(馬淵和夫「上代のことば」四四頁)それ故「卑奴母離」と「夷守」は直ちに結びつけるのは穩當ではないかも知れない。それ故、「夷守」は一応「卑奴母離」と切離して考えた方が良いだろう。律令時代に「夷守」の地名が散見する。それらは「坂本太郎「魏志倭人伝雅考」「邪馬台國」所収一三二頁)日向國夷守駅(宮崎県小林市附近)や越後国頸城郡夷守郷などの例からすれば隼人や蝦夷などの化外の民に対する防衛上の拠点に置かれているから、筑前の夷守は當

然、朝鮮などを意識して置かれた軍略上の拠点であったと見做してよいかも知れない。夷守が糟屋町阿忠としても、ここはかつて糟屋屯倉に含まれる地域か、それに隣接する地となるので夷守をいづれの地に置くとしてもかつての糟屋屯倉附近であつたことは変らない。その点から推測しても奴の地つまり、那ノ大津に那屯倉が置かれ、朝廷の直轄領にされながら、筑紫君に多々羅川の河口あたりの支配を許していたのは、朝廷側に九州最大の豪族筑紫君の軍事力を朝鮮経略に大いに利用しようとする意図が強く働いていたと考えるべきであろう。筑紫君にとつても、大陸交渉の拠点を確保することは極めて重要な意義をもつていたから、朝鮮出兵の有力な水軍として活躍することを辞さなかつたのであろう。筑紫君が朝廷とならんで大陸交渉の要港をもつていたことは、筑後に石人、石馬や装飾古墳などに象徴される独自の文化圏を形成する大きな役割を果したことは否めない事実であつたと思う。また朝鮮とも深い関係を結ぶ機会に恵まれていたことは磐井の叛乱が直ちに新羅よりの貨賄により勧められたことからも想像することができよう。（難体紀二十一年六月条）それ故、磐井が誅せられるや、葛子に糟屋の地を献ぜしめ、これを屯倉として朝廷の直轄地に編入したのは、この禍根を断つねらいがあつた為である。だが、筑紫君の如き有力な豪族を倒したけれど、朝鮮経略は更に難しくなりつつある時期であつたから、筑紫君に代るべき豪族を朝廷では起用しなければならなくなつた。それが火君（肥君）である。火君はかつて宇土半島の基部あたりに本拠を置き、後に八代市の北部地域氷川流域に拠を移した火の国隨一の豪族で、有明、不知火の内海の水軍を率いて、筑紫君とは血統關係も想定される程同盟關係にあり、（上田止昭「日本古代國家の成立史の研究」一五二頁、拙稿「大化前代の肥後」「正税帳の研究」所収四六頁）文化的にも石人・石馬・裝飾古墳の一大中心地であった。だが、磐井の叛乱に際しては、朝廷側につき筑紫君に代る地位を与えられることになつたのである。（拙稿「火の国」）その具体的な現れが、火君に糟屋郡の対岸に当る博多湾の西岸、志麻郡の地を与えたことである。有名な大宝二年の戸籍に見える志麻郡大領肥君猪手や（北山茂夫「奈良朝の政治と民衆」）承和八年（八四一）の「筑前國牒案」（平安遺文・ノ六七号文書）に見える志麻郡大領肥公五百疋はその後裔である。（拙稿「古代製鹽の

以上のように見てくる限り、精屋は对外交渉と深い関わりを有する地域であったことが判ると思う。これは単に精屋屯倉だけではない。志珂郷、阿曇郷などは海部集團の一大根據地で、萬葉集などにも

志賀の海人の「火氣焼き立て 燃く塩の 辛き恋をも われはするかも（卷十一の一七四一）
ちはやぶる 金の岬を過ぎぬとも 吾は 忘れし 志珂の皇神（卷七の一三三〇）

と志賀の海人が歌われ、ここには阿曇氏が祭る志賀海神社（延喜式、名神大祀・旧事紀・陰陽本紀）が鎮座していたし、その隣郷の阿曇郷は海人を率領する阿曇連の本拠であったようである。応神紀に「廻々の海人、詔曉きて命に従はず。則ち阿曇連の祖大浜宿禰を遣して、其の詔曉を平ぐ。因りて海人の卒とす」（応神紀三年十一月条）とあり、私日本紀所引の筑前風土記には、「糟屋郡、資珂島、昔者、氣長足姫尊、新羅に幸しし時、御船、夜來て此の島に泊てき。陪從、名は大浜、小浜と云う者あり。便ち大浜に勅して、此の島に遣りて火を賣めしやたまふに、得て早く来つ。大浜聞ひらく、「近く家ありや」といふに、小浜答へへらく、「此の島と打昇の浜と、近く相連接けり。殆同じき地と謂ふべし」といひき。因りて近島と曰ひき。今說りて資珂島と謂ふ」という説話を採録している。この大浜は応神紀の大浜宿禰と同一人物であろうし、また打昇浜と接続する地が阿曇郷ということになるのである。履中紀に、「阿曇連浜子を召して、詔して曰はく、「汝、仲皇子と共に逆ふることを謀りて、國家を傾けむとす。罪、死に当れり。然るに大きなる恩を垂れたまひて、死を免して墨に科す」とのたまひて、即日に黥む。此に因りて、時人阿曇目と曰ふ。亦浜子に從へる野嶋の海人らが罪を免して倭の蔵代の屯倉に役ふ（履中紀元年四月条）として、阿曇連が仲皇子に加担して履中天皇に叛いたという伝承を伝えている。勿論この伝承の骨子は、海人が顔面に入れ墨をしていた伝統的な風習を服属説話にかこつけて物語った点にあるので直ちに史実とは見なし難い。魏志倭人伝にも、「今、倭の水人、好んで沈没して魚鰐を捕へ、文身して大魚、小魚を厭ふ。」とあり、魏志に依つたと思われる冊府元龜卷九の五九には、「点面文身」としている。つまり

海人が点面文身するのは少なくとも二世紀以来の風俗で、阿曇氏が服属説話にそれが採用されたに過ぎないのである。

ただ、履中紀の叛乱はともかくとして、阿曇氏の率いる水軍の力が大和朝廷の草創期にあってあなどり難いものがあつたからこそ、かかる説話が生れたことは否定出来ないと思う。事実、後漢書には「建武中元二年（A.D.五七年）倭の奴國、

奉貢朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭國の極南界なり。光武賜うに印授を以つてす」とあり、この印授こそ志賀島の出

土の「漢委奴國王」の金印とされ、かつては奴國が大陸交渉の窓口をなしていたのである。この奴國を「古代航海王國」と規定する論はともかくとしても、（水野裕「日本古代國家、四七頁）「この島は博多湾口を扼して、倭國の对外貿易の支

配、監視のために最も主要な位置を占めているから、対漢貿易の支配権を握っていた倭奴國は、早くからこの島の支配下に收め、ここに航海の守護神を齋祭祭り、この島地を最も神聖な航海民族の聖地としてあがめていたものであろう。」

（同書六六頁）と推定することは許されるだろう。この奴國の旧地には海部集団が多かつたことは筑前国那珂郡海部郷、同怡士郡海部郷などがあることから窺えよう。これらの奴國から对外交渉権を取り上げていく過程が、阿曇氏の海部の管掌であり、更には朝廷に阿曇氏の服属の伝承として物語られていると考えられる。史実的には、那ノ屯倉の設置であり、筑紫君の管轄であると思う。また、香椎は仲哀天皇の「筑紫詞志比宮」とされ、また崩御の地とされる處であるとされ、これを香椎廟と称している。この香椎も新羅遠征にまつわる伝承地として物語られるから、ここも軍略上の要地であつたに違いない。

このように博多湾に面する構屋郡の諸地域は海部集団が割据していたと見做してよい。勿論その後各地には平野部が形成されてきたから、ここに農業生産が営まれていたことも見忘れてはなるまい。特に磐井の叛乱後、志麻郡に火君が進出して来たり、朝鮮からの全面徹兵を余儀なくされるなど遠征軍の中核的地位を次第に失なつていったし、また大化以後、律令制の整備とともに、律令制の軍制が確立していくと、海部も軍事的色彩よりも、漁撈民的な生産に従事することが多くなつていつたし、また諸河水の下流域に形成せられつつあつた冲積平野も農耕地に改良せられ、条里制

の施行と共に、ここに水田が営まれることになつていったのである。これは糟屋の臨海地域は、志列舞など玄海灘に接する地域を除くと次第に對外交渉の要地の意義を相対的に失なつていく姿を示すものと考えてよいであろう。

だが糟屋の交通上の要地である点は變らなかつたことを強調しておいてよいだらう。人化前代においても、那ノ屯倉や糟屋屯倉から穂波屯倉（福岡県嘉穂郡穂波町）や鎌屯倉（福岡県嘉穂郡稻築町？）我鹿屯倉（福岡県田川郡赤村）などを結ぶ路は糟屋郡の蘇栗町や須恵を経て東に向うコースであつたし、また那ノ屯倉から糟屋屯倉（夷守駅）を経て香椎より宗像郡に至るコースを開けていて、これが律令制の道路としてひきつがれていたのである。

つまり、古代の糟屋郡は陸、海共に交通の要衝地として栄えた處であつたと考へてよいが、律令制では那ノ大津、糸島半島、唐津湾及び宗像地方などに比して海上交通の重要性はや、おとると考へてよいであろう。それにしても糟屋には、夷守の地名から窺えるようにその余榮を保ちつづけていたし、また漁撈のみならず塩生産などにも従事するなど農業生産となんで海に依存する生活が可成りの比重を占めていた点を忘れてはなるまい。それと共にその後背地の平野部では、一段と農耕地が開発せられ、水田耕作も發展していくことともいうまでもない事である。

（井上辰雄）

二、糊痕・鉄・馬について

糊痕 出土の堀形土器のあるものに、内・外面および胎土の中に、無数といつてよいほど多くの、稻の圧痕が認められる。同一器形の土器は、ほかに一個あり、計二個であるが、それには認められない。

稻の圧痕の計測（第10表）は二島らが行なった。若干補足すると、圧痕は器内面に五ヶ所、外面（底部を含む）に三九ヶ所の圧痕を認める。圧痕の種類は糊痕が圧倒的に多いが、葉痕（稻の葉に近いが、確認できない）が一例ある。それらの圧痕は、当然のことながら、無秩序に胎土に押捺あるいは含まれたものが多く、計測にえたものは、九二例中五例にすぎない。（第10表・図版二十・[1]）

比較資料として、時代的には対応する資料としては、福岡県八幡市花尾城址（中世後期、室町時代）^①があり、専門学者による測定がなされているが、これは出土の炭化米そのものであり、圧痕の計測値とは、比較上の直接資料とはならない。参考までに、花尾城址出土の、四十粒中無数十二粒の平均値を引用しておく。長四・六mm、巾一・九五mm、長巾比一・五五mm。このほか計測者が、四十粒を大粒、小粒に分類している点も、われわれは看過してはならない。多々良遺跡と対比ができるような、圧痕例について、残念ながらほとんど知らないが、九州南部以南の、ほぼ対応する少數例を報告したことがあるが、少數例の対比は、あまり有益でないので、省略する。

この遺跡からは、当代の米そのものの出土をみなかつたが、この器形の土器は、糸（「はとぎ」とは異なり、炊煮用の堀であることは確実で、米・麦・豆などをたき、葉を煮あるいは芋をふかした仕器であろう。粗雑な作りに、まつ黒な煤がべつとりつき、いか

No.	類別	土器部分	土器様式	計測者			備考
				長mm	巾mm	長巾比	
1	糊痕	口唇部内面	上端器一雄食（土鍋）	5.60	2.80	2.00	二島山 島津崎
2	糊痕	口唇部内面		5.20	2.35	2.21	同上
3	糊痕	胴部内面		5.70	2.65	2.15	同上
4	糊痕	胴部内面		6.80	—	—	同上
6	糊痕	胴部内面		5.80	2.60	2.23	同上
1	糊痕	底面		5.65	2.20	2.56	外 西

第4表 糊痕計測表

にも庶民の台所用という感じをあたえる。こうした什器の生産地について、「後金剛盤若経料雜物収納帳」(七五八年)を例に出さないでも、破損しやすい什器である点を考慮すると、比較的近い地域、あるいは自村(家)生産ではあるまいかと考える。

鉄 われわれは、既に福岡周辺の製鐵遺跡の分布図、地名表などを作成して、若干の考察を加えたことがあるが、その時代は、概ね弥生終末期から古代(平安)までであった。今次発掘によつて、それらに接続する時代の、製鐵遺構を明かにし得たのは幸いであった。各遺構については、すでに述べられているので再論はしないことにして、その他いくつかの問題についてふれてみよう。

タタラという地名について。和名抄の糟屋郡に属する、この地域をタタラと呼ぶようになつたのは、いつ頃からであろうか。「多々良渴乱杭六本を打たしむ」という弘安十年(一二八七年)などの、記載は、比較的古い方ではあるまいか。「タタラ」という用語がこの時代にはじまつたなどとは毛頭考えられないが。古代はむろん中世史の研究にくらい筆者であり、臆測の範囲をむろん出ないが、タタラという地名は、今次発掘の成果にみられるよう、平安時代末期—中世に年代が比定される年代が考えられる、タタラ場に関連するものであるまい。仮説を提示して批判をこいたい。慎重な態度でひかえ目な発言はもとより結構であるが、時には素人の、軽々しい発言も許されてよいものと考える。上

記の仮説に若干を補足すると、タタラ場を発掘地點のみに狭く限定

するつもりはなく、多々良河口に推積した浜砂鉄(注③において、多々良浜が良好な砂鉄の產出地であり、かつそれを採取する写真などを、原田種成氏の資料によって、補つておいた)を原料となしやすいこの地域に、タタラ場があつて、それが地名として定着遺存したのではあるまい。けれども糟屋郡の鉄生産は当代にいたつて、忽然と生まれたの

第35図 標題評
(京都妙心寺鐘銘)

ではなく、すでに伝統をもつていたと筆者はみる。やや巨視的にみれば、大字香椎字不動ヶ浦に一つの製鉄址（注③）名表四〇・四一但し未発掘、時代不明が井上直樹氏によつて発見されており、大字和白の地に奈良時代の製鉄址が確認されている。両者とも和名抄の橋屋郡に属し、前者を香椎郷（現地名香椎）に、後者を安曇郷（現地名和白）に比定した（③の第八表）。このように橋屋郡の沿海部に奈良時代以降の製鉄址が認められるるとすると、中世タタラの活動には、前述のような背景を考えるべきであろうし、さらにまた太宰府觀世音寺鐘と、母型^⑤を同じくすると考えられる、京都山城妙心寺所蔵の鐘銘「戊戌年四月十三日壬寅収、橋屋評造春米連広岡鑄鐘」（六九八年）の中の、「橋屋評（第36回。松岡史氏採拓）」の理解も、單なる文字上ののみでなく、多少の歴史的背景をもつて理解されはしなか。

次に立地について、少し考えてみたいことがある。現地表が海拔二・五m前後の低湿地という環境は、どう考えてみても、適地とはいえない。これは調査者のみでなく、遺跡を訪れる人の共感であろう。けれども製鉄遺構の存在したことは、歴然たる事実である。別項浦田教授の御所見は、はなはだ慎重であるけれども、かつては高所であったことを、全く否定はされていない。低湿地と遺跡の関係は、今後究明されるべき、多くの問題をもつており、解決は将来にゆずらなければならないが、かりに、現在よりも高所であったという立場に立つと、本遺跡が、多々良川の河口に立地するという、立地条件は、別の面から首肯されるものを、もつてている。

かつて読んだ『鉄山秘書』（一枝博音博士校訂本）に、タカラ場の立地条件をのべた条があつた。同書を手許に持たないので、『香谷編^⑥』に引用する記事を転用すると、(1)「粉鉄」（よい砂鉄）(2)木山（薪炭材が便利）(3)元釜土（鍛鉢に適した粘土）(4)米穀下直（安い食糧品）(5)船付へ近（水陸の輸送に便利）(6)鉄山師の切者（よい技術者）(7)鉄山諸役人の善惡（鉢支配人以下善人を得ること）の七条件をあげている。同書（別名『鉄山必要記事』下原重伸著）の成立は一八世紀後半であり、中世のそれに直ちに援用できないのはむろんであるが、秘書が往古の所伝を多く含んでいる最古の記録である点と、中世の商品流通機構の発達拡大を併せ考へると、(5)の「船付へ近」は、多々良川の河口

付いう立地はかなり重要な意義をもつと考える。伴出の豊富な船載青白磁の存在も、多々良の津とでもいべき立地をもつて理解されはしまいか。本遺跡の対岸松崎地区が、かつての船付場であつたという所伝を今も伝える。七条件のうち、(4)(7)の証左を得ることはできないにしても、(1)は至近の多々良浜が浜砂鉄の良好な産地であることは、すでに指摘しておいた。(2)の薪炭材は、上流の対岸の山地が利用されたであろう。(3)の築炉の粘土は現地に豊富にある。(6)については、弥生時代の多々良遺跡出土の鋼戈、銅劍溶范⁽⁷⁾を引き出すのはやや強辯のきらいがあるにしても、前述上和白や京都妙心寺鐘銘の精屋評造脊米連廣圓鑄鍊にみられる、伝統がこの地域に、多少なりとも潜在していたのではないかとまいか。最後に古墳時代～平安前期⁽³⁾と、莊園経済に移行した時期の、タカラ場の立地条件は、異なるのではないかという見とおしを提示しておく。

馬齒について

別項林田重幸教授の報文のことく、馬齒が検出されている。後世の混入とは全くみられないので、当該遺跡に併なうと考える。この馬について、遺跡に生活を営んだ人の、食料であったとも考えられないこともないがたとえそうであつたとしても、その馬の生存時の利用がここでは、重要であると考える。

遺跡の生業を農耕・河口漁業及び鉄生産に要約し、かつ定住生活をなしていだと考えるが、その中の鉄を重視すると、いくつかの興味ある推定を、馬齒をめぐらすことができる。それは、遺跡の重要な性格とは、村落とはいえ鉄生産の、いわゆるタカラ場であるという点である。鉄の生産には、龐大な量の燃料を必要とする事は、いうまでもない事である。推測ではあるが、結論を先にのべると、燃料や浜砂鉄などの、駄載用のつまり駄馬のそれではなかろうかということである。(第36図)この私見を多少とも強固にするためには、当代の運搬法を知る必要がある。それには、当代の絵巻物や屏風絵などが、具体的な好資料となる。先年刊行された「日本民生活絵引」や「洛外圖」(ともに角川書店)などがそれである。前者は平安時代末期から応永二七年(一四二〇年)ころまでを、後者は永正一七年(一五〇年)ころから、元禄時代までを収める。地域的には、前者は東北地方から九州地方まで、後者はいうまでもなく京都を中心である。こうしたいくつかの制約はあるしても、平安時代末期から江戸時代前期ごろまでの、運搬法の大きな傾向はつかめそうである。これまで、右の二史料によつて、一・二の人力運搬法について研究を試みた人はあるが、最近、萬納寺

傳子氏は、この二史料により、頭上運搬以下十種類の運搬法と荷物を、整理表示する作業によって、いくつかの重要な指摘をなされた。同氏の研究により牛馬利用に限定してみれば、(1)室町期までは牛馬運搬は十種類の運搬方法の中で一〇%、以後になると、二%。(2)牛馬利用では、全体を通じて駄馬が多い。牛車は江戸時代前半に急増し、重量物の運搬に利用。(3)荷物との関係は、畜力は、素材(木材・薪・桶等)包装(俵・平包・袋)などに集中している。

むろん、この遺跡の馬が、駄載専用だと、筆者は考へてゐるのではない。農耕用の畜力としても使用されたらうことは当然である。以上の推測のはかに、もしやという疑念が、筆者にはある。それは、遺跡を含む広域の地が、多々良浜合戦(延元元年・一二三六年)が行なわれた。古戦場であるという点で、年代的にも、遺跡の下限は、それと近い年代である。事実、発掘開始前に、兵士らの人骨や武器などの出土を、予告してくれた人もあり、そうした言い伝えも戦前までは強くあつたらしい。筆者は、その可能性を全く否定する側に立つものではないが、この度の、馬齒の検出をみた発掘からは、合戦を示唆する遺物は全く出土しなかつたことも、事実である。

だからといって、軍馬の今後の出土を否定することも早計であろう。戦場の広さがどれだけであったかは、知る由もないが、広大な面積の中の、限られた小地域のみの発掘であるからである。

(三島 格)

註
①九州大学農学部育種教室・同文学部考古学研究室編『九州出土古代木一覧』九州考古学 一五 一九六二年 福岡。

②二島格『南西諸島における古代祭祀資料』南島考古 一二 一九七一年 那覇。

③三島格『福岡周辺の製鉄遺跡』『和白遺跡群』福岡市教育委員会 一九七一年 福岡。

④川添昭一『注解元寇防禁編年史稿』『異國蕃臣書役史稿の研究』福岡市教育委員会 一九七一年 福岡。

⑤完全な同範ではなく、母型を同じくする兄弟鍾である。

⑥松岡史『福岡の梵鐘』『福岡市とその周辺の文化財』福岡市教育委員会 一九六九年 福岡。

⑦『福岡市埋蔵文化財道跡地名表 総集編』埋蔵文化財報告書第十二集 一九七一年 福岡。

⑧方納寺徳子『運搬法の変遷—絵巻物より見た』民具マンスリー 四一一 一九七一年 東京。



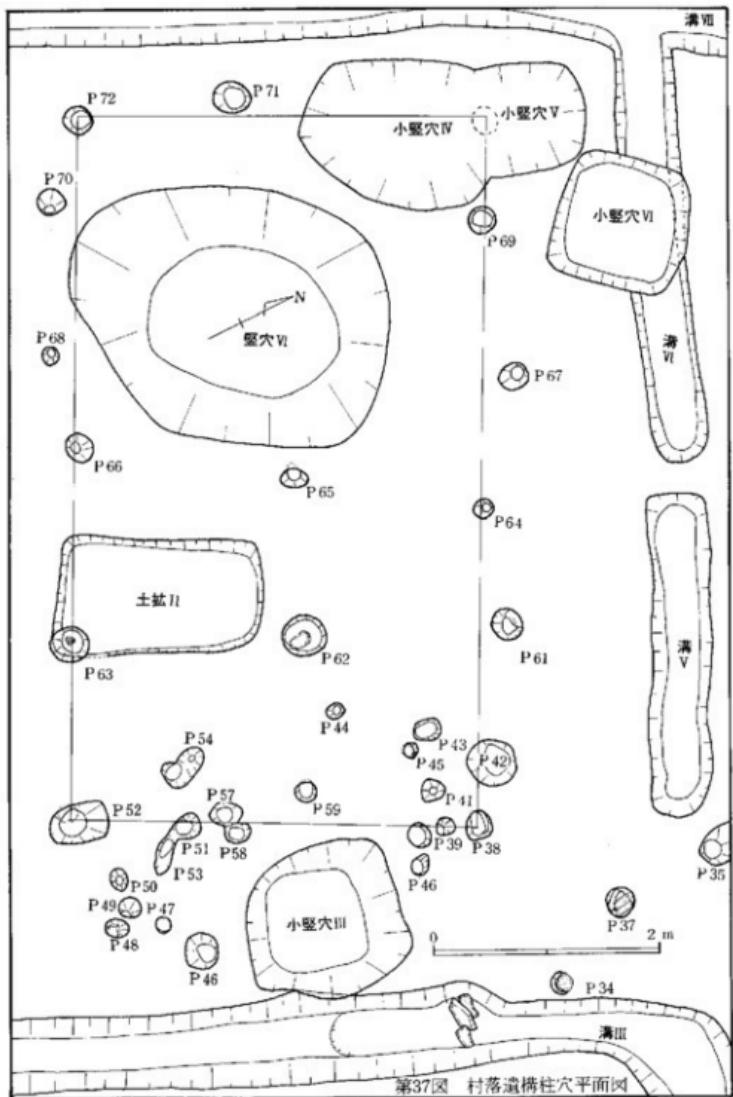
第36図 駄馬(一過聖松・万納寺徳子による)

三、遺築遺構について

I 区においては明らかに建築遺構と思われるものではなく、中世の溝が走っているのみであるが、多田良と同じ時代の遺構である筑後瀬高庄における灰穴といわれるものと類似した直径一m²~四m内外のビットが幾つかあり、それらが土器、磁器などの遺物を含んで発掘されていることである。この灰穴状ビットの開口には柱穴らしきものは何ら確認出来ず、柱を建てずに何らかの方法で屋根を持たせたものと思われるが、この場合垂木を放射状に配するか、又は又首を組むことによって雨避けの屋根を持たせたのであろう。それら垂木の穴は下層の黄褐色粘土層までは掘り下げられていないために表土削除の時に確認出来なかつたものと思われる。

これらの灰穴状ビットの深さは平均して七〇cm程度で壁はなだらかな放射状の傾斜を持つている。この灰穴状ビットの中から土器や磁器の破片が出ることから、当時何らかの生活の場であったと思われるが、ビットの内部に集中しておりビットの外にもそのビットと直接・同一的な空間の広がりがあつたかどうかは明らかではないが、これらを住居として考える場合、その空間の広さの点において疑問がのこるものがある。この点については今後類似遺構の発掘例を増すごとに再検討されることが望ましい。

II 区については東南の隅に建築物の址と思われる柱穴の分布をした遺構がある。その大きさは各辺の柱列間の距離において約七m²×四m²の二八m²程で内部に四m²程の大きなビットを持ち、この遺構全体とビットの内部から鉄滓を出土することから製鉄に何らかの関係のある建築遺構と思われる。今回の調査で確認された建築遺構は灰穴状ビットとこの工房址の二種類のみである。工房址は一軒分のみが明らかであるが、今回の調査区外の同地域に同じような工房址が幾つか並んでいたとも思われる。この工房址の特徴は内部の中央より少しすれて大きなビットを持ち柱穴の外に幅五〇cm程度の溝を持っていることであるが、この遺構では北側の溝は確認されているが、南側は未調査で東西向方向の溝は不明



第37図 村落遺構柱穴平面図

であるため、この工房址の開りに溝が掘られていたかどうかは明らかではない。しかし北側の確認された溝の内部からの出土遺物と柱列遺構内の出土遺物が同時代の平安時代末期より鎌倉時代の始めにかけてのものであり、また、址端の柱穴列から溝（溝V）までの距離と各柱穴列間の距離との関係において、この北側の溝はこの工房址に直接関連した排水施設としての溝と考えられる。

工房址について——この柱穴列を工房址と考えたのは前述の理由によるもので、その規模は梁間二間桁行二間の母屋に西一間の庇をつけ加えたものと考えられる。寸法は柱穴列（P61-P62-P63）の各ビットを基準として求めると設計上それは、梁間一・九二m（六尺三寸）桁行一・九二m（六尺三寸）に西側庇〇・九六m（三戸一寸+2mm）となる。しかし実際の遺構の柱穴分布にあってはP69-P52の柱穴を見るにその間隔は北側より桁間方向において一・四五m、二・二五m、一・七五m中央部P65-P62一・四五m、P62-P59一・四〇mで南側は一・一五m、一・七五m、一・六〇mとなり、梁間方行はP67-P65一・一五m、P65-P66一・九五m、P61-P62一・八〇m、P62-P63一・一〇m、P38-P59においては一・五五m、P59-P52一・一五mとなっている。

棟木は柱穴列P65-P62があり、方向は東南東を向いている。この建物において注目したいのは、側柱の柱穴がP67-P61にかけてのP64とP70-P66にかけてのP68にうかがえることである。更にP62-P59にかけて間切りの柱穴とも思えるものをもとめている点である。これらのことからこの建物においては立壁が有り、内部においては間切り、ピット、柱列により意識的に区切られた空間の存在したことが察せられる。立面的には梁間二間桁行三間の母屋に西側一間の庇が付いた形となり、今仮りに西端の柱高を一・八mとする母屋と庇の境では柱高は二・四九mさらに棟木は床面から四・四五m（一四尺六寸）の高さになる。

註 ①近世の溝を境にして便宜上、上をI区、下をII区とした。

〔『鏡山墓「庄園村落の遺構—筑後瀬高下庄の場合—』』『史源81号』

（宮原種生）

四、地形と地質

一、流通センター敷地周辺の地形と地質

福岡流通センター敷地は多々良川と須恵川とに挟まれた沖積地であつて、その第四系中における位置を明らかにするためには、敷地の東方、粕屋町内に分布する第四系について、その地形的、地質的状況を知る必要がある。粕屋町の地形、地質については、かつて筆者らが同町上水道水源調査を依頼され提出した報告書^①があるので、一部修正の上ここに再録する。報告書の一部引用再録を快く許可された粕屋町当局に深謝する。

(A) 糜屋郡西部の地形

当地区は丘陵・段丘・冲積新デルタに三大別することができる。

(1) 丘陵＝最高七〇米を超えない低平な丘陵が鷹子丁池周辺に分布する。地質的には古第三紀層からなる。次に述べる段丘を伴つており、一部では高位段丘との区別が困難である。

〔段丘〕四段の段丘が広く分布する。

(a) 高位段丘

高度三〇m内外に抜がるもので、深く開析をうけていて、分布は極めて断片的になつてゐる。本段丘は堆積物からなる場合（鷹子丁池附近その他）と侵蝕面のように観察される場合とがあるが、後者は、侵蝕作用のために段丘層が消失したものと思われる。

(b) 中位段丘

高度一五～二〇mにみられる平夷面で、かなり断片化している。粕屋町中心街はこの上に発達する。本段丘は堆積物からなる堆積面である。

(c) 低位段丘

高度はかなり変化し、西方で低く、東方で高くなる。すなわち、袖須附近で五～六m、東福岡変電所～九大附属農場で九m内外、伊賀駅附近で一二～一二m、長者原で一五～一六mである。同段丘面の西方延長は

冲積面に埋没しているものと思われる。またこの段丘面は四段の面の中でも最も分布が広く、堆積物からなる堆積面である。

(d) 低位段丘 II 高度六〇—三m、丘陵に直接附属する場合は稀れで、分布も低位段丘 I より狭い。江辻—伊賀—庄田—内橋—下長者原—原町—袖須その他でみられる。この面は古いデルタファンデルタあるいはファンデルタであるが、田畠、集落として利用され、冲積面との比高も小さく、時に区別困難である。

〔冲積新デルタ〕そのほとんどを田面が占めている。久原川・金出川・多々良川・須磨川などの堆積作用によつて形成されたものである。新デルタ面には河川の旧流路が残されているところがあり、また主要河川に沿つて二段の河岸段丘が形成されているところがある。なお、ここでは新デルタとして一括したが、内陸の方ではファン・デルタファンにつづくと考えられる。しかしこれを区別するのは困難である。また、後述のように、新デルタの上部と海岸沿いの縁辺部とは、高度の急変は認められないが面の性質上区別できる。

(1) 粕屋町西部の地質

第四紀層についてのみ略述する。

〔I〕高位段丘層 中疊々層（碧緑色片岩、脈石英、石英質岩などからなる）を主体とするが、含礫砂層が発達することがあり、この場合は粘土質のレンズを含むこともある。上部は粘土質細礫々層や同質砂層が発達する。

〔II〕中位段丘層 褐・淡褐色粘土質角砾層を土体とし、粘土・シルト層、粗・中粒砂層を挟む。礫は結晶片岩、石英質岩からなる。最上部にはスコリア質ロームがみられる。また、八女粘土相当層と思われる火山灰源白色粘土におわることがある。層厚は詳細不明だが、七一八m以上に達するものと思われる。

〔III〕低位段丘層 I 分布は広いが、この上に田畠、集落が発達し、露出が貧弱で段丘層の詳細は不明である。観察した限りでは極粗粒が挟まれ、褐色ロームをのせることがある。

〔IV〕低位段丘層 II これも露出が貧弱で、岩質・岩厚とも明らかでない。しかしほりーリング調査によると、砂質粘土層（厚さ四m）が分布するところや砂層・礫層（厚さ二m）からなるところがある。

〔国〕冲積新デルタ層 低位段丘層 II と同様、岩質・岩厚とも明らかでない。ボーリング資料によれば、粘土・砂

層（九四）や粘土、砂礫層（三・六四）などが分布するが、低位段丘層と区別することは困難である。

二、福岡流通センター敷地の地形と地質

福岡流通センター敷地は、既述のように、多々良川と須恵川とに挟まれ、前項で述べた冲積新デルタの一部を占めている地下水位が高く、降雨時には冠水し、水田として利用されていた。

(A) 地形について

水田面の高度は、地域西端附近で三・〇m前後、東端附近で二・九m前後、西から東へ、すなわち上流へ向かって僅かに高度を増すが、その間は必ずしも一様な傾斜を示すわけではない。

また、上浜田橋東方二〇〇mに標高二・五mの微高地がある。これは今回の調査で同跡であることが判明した。(二)には大砾が集積しているが、これは耕作時に出た砾をここに捨てたということである。

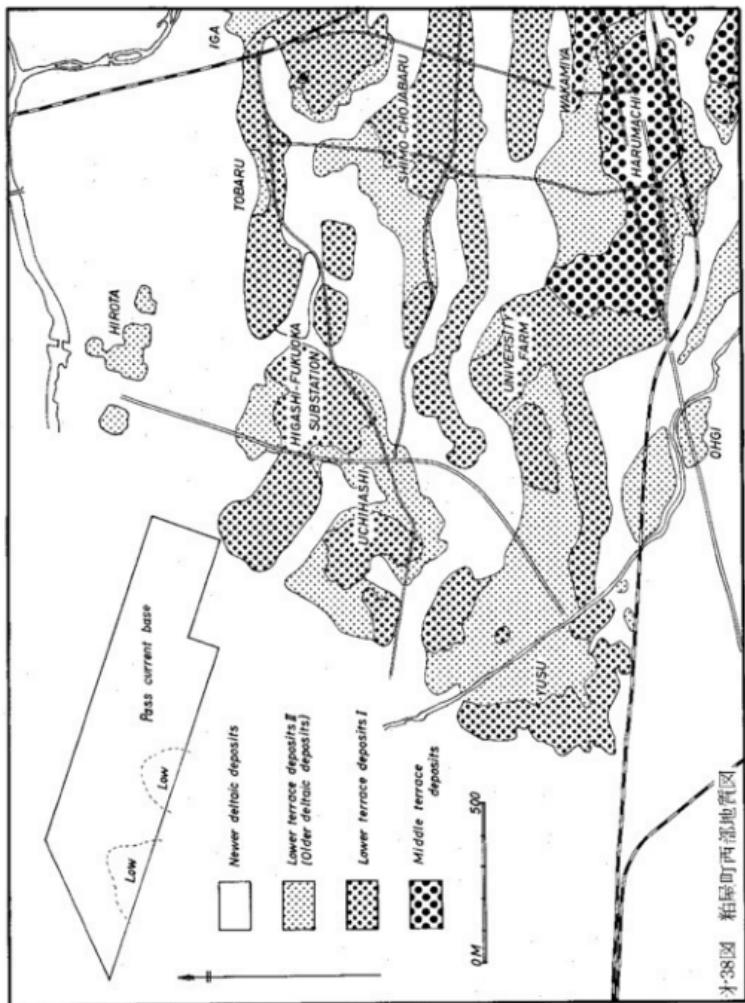
つぎに空中写真観察結果によると、上浜田橋東南東四〇〇m附近および六〇〇m附近に中心をもつ微低地が認められた。福岡市役所発行五〇〇〇分の一地形図をみても、実測標高点から、この附近が僅かながら低いことが判る。

流通センター敷地以外であるが、冲積新デルタ内にみられる著しい地形として、河岸段丘がある。現河川（多々良川、金出川・須恵川など）に沿って、断続しながら一段ないし二段の段丘が分布している。これは、言うまでもなく、冲積新デルタ形成後、ある時期に河川の下刻・側刻が繰り返しあつたことを物語るものである。

(B) 地質について

資料が乏しいので詳細が判らないが、トレンチから知り得た層序は次のようである。上から順に記載する。

注 ① 九大教授理博 松下久道・同蒲田英夫・同小原淨之介「船屋町上水道水源調査報告書」昭和四二年一〇月三一日



第38図 粕屋町西部地質図

一、水田土壤 下半は褐鉄鉱の沈澱が著しい。また地表下五—六 cm ないし一〇 cm に植物質薄層がみとめられることがあるが、これは昔の水田面を示すものであろう。

厚さ二〇—四〇 cm。

二、中疊角礫をふくむ暗灰色シルト質細砂 造構の溝を充填する。この場合は下底にとくに礫が密集し、また溝の中では炭質物に富む。厚さ二〇—八〇 cm。

三、細—中粒砂層 粘土質パチをふくみ、褐鉄鉱の沈澱が著しい。厚さ一五—二〇 cm。

四、亜円礫の細—中疊をふくむ極粗粒砂層ないし、粘土質中—細砂のマトリックスをもつ中疊々層。疊は結晶片岩、酸性火成岩、石英質岩などからなる。厚さ一〇—二〇 cm。

五、淡褐色中粒砂層 厚さ、不明、二〇 cm 以上。

以上のうち、造構の溝は三の砂層から切れ込まれており、五の砂層まで達する。また二の角礫質細砂は洪水時堆積物と思われる。

(C)冲積世における気候変動について

段丘形成の原因是、地盤上昇と気候変化とが考えられている。気候変化の著しい場合は海面変化が伴われる。冲積世に入つてからの著しい地盤運動は、少なくとも多々良一帯では明らかでないので、この附近に分布する段丘(河岸段丘もふくめて)を、気候変化によるものとして考察する。

冲積世における著しい気候変動は、まず、約九〇〇〇年前にはじまるボレアル期の温暖乾燥気候で、この時に海面上

昇がおこり、繩文時代を通して海面が現在より高かった。海進の最盛期は繩文中期から後期にかけての頃で、その最高海水準は四mであったといわれる。つぎに、約三〇〇〇年前をピークとする気候悪化の時代があり、冷湿の気候で海面は下降し、いわゆる弥生小海退の時代である。その後は、約一六〇〇年前の乾燥期、約一〇〇年前の湿润期（防府市附近で認められた古代小海進の時代に当る）、約八〇〇年前の乾燥期を経て、いわゆるヨーロッパの小氷期に入る。これは約四〇〇〇年前（防府市附近ではこの頃の小海退が認められている）にはじまり、一二〇年前まで間歇的に訪れたアルプス氷河の前進期で、この時代は、少なくとも北半球では冷温気候が支配的であったようである。

(D) 海水準および気候の変動と地形との関係

以上略述した海水準および気候の変動を段丘地形に関連させながら、その時代を考察すると次のようになるであろう。まず、中位段丘は八女粘土相当層を上にのせていることから、筑紫・筑後平野の中位段丘に対比できる。八女粘土はC₄による年代測定から約三〇〇〇〇年前のものとされている。低位段丘Iは、褐色ロームをのせていていること、地形的特徴から、やはり近接平野の低位段丘に対比することができ、洪積世末の形成とみてよい。

流通センター敷地をふくむ周辺一帯の平野面で、条理倒跡がみられる部分は、地形的にみてデルタファンあるいはデルタの一部であることは確かである。この面は広く極めて平坦で、深く谷を堆積しており、ほとんど開析をうけていないこと、現海水準との高度差が小さいことなどから、最近の著しい海進期の形成に係るものと考えられる。この著しい海進期とは繩文海進の最盛期にほかならないのであり、その時代は繩文中期から後期にかけての頃ということができる。このようにみてみると、低位段丘IIの形成もおのずから限定されるものであって、それは同海進初期、つまり繩文早期から前期にかけて形成されたものとすることができよう。この段丘もまた、地形上ファンあるいはデルタの一部と考えられる。

最後に、河川沿いに分布する河岸段丘については、その時代を知る直接的証拠はないが、これを濁潤期の所産と考え

ると、約一二〇〇年前を中心とする時代の形成とすることができよう。この時代のカスピ海の水位変化をみると、西暦八五〇年、一〇五〇年、一二〇〇～一三〇〇年に高まっており、アジア一帯が同様に多雨であったとすれば、これらのピークと河岸段丘形成期とを結び付けることができるかも知れないが、不明の点が多い。

以上述べた地形とその成立時代とを次に簡単にまとめておく。

中位段丘

主ウルムⅠ

低位段丘Ⅰ

洪積世末

低位段丘Ⅱ（沖積旧デルタ）

繩文早～前期

沖積新デルタ主部

繩文中～後期

沖積新デルタ縁辺部

弥生～古代（～中世？）

河岸段丘

古代～中世？

三、遺跡と地形との関係

〔一〕条里遺跡の方向について

条里遺跡の分布上日につくのは、須恵川をはさんでその北と南とで条里の方向が異なることがある。これはおそらく排水を能率よく行なうために、条里の一辺を地表の一般傾斜の方向に沿わせたのであろう。このことは、当時はすでに須恵川・多々良川その他主要河川系が現在とほぼ同じ位置を占めていたことを示している。

〔二〕条里遺跡の分布限界について

すでに述べたことであるが、地方道福岡一直方線をはば境にして、その西側には条里遺跡が分布しない。この地帶は

当時おそらく瀉性の水域であつて、田面との境界が福岡—直方線附近にあり、原田辺りではその東方へ水域が入り込んでいたのであろう。

(二) 条里遺跡と河岸段丘との関係

条里遺跡が乱れるところを探つてみると、そこに河岸段丘が分布する場合が多い。写真観察からは、条里制施行と段丘形成といずれが先か判断がつかないが、前項で述べたところから、両者が時期をほぼ同じくしたと考えることはできないだろうか。あるいは条里制施行後、河川の侵蝕によつて破壊された疑いもある。

(三) 流通センター敷地内の二つの微低地と遺跡との関係

写真判読と地形図語図から、二つの微低地が識別されたことはすでに述べた。しかるに、発掘調査の結果、この微低地内から住居跡、とくに鍛冶場跡と思われるものが発見された。現在ここは地下水面が高く、冠水しやすい田面であり、その中でもとくに低い部分に当る。このような所に人が住み、製鉄の場を設けたとはとても考えられないのであるが、それらの遺構が作られた當時も、そこが現在と同様の環境であつたわけではない。既述のように、弥生時代には海退がおこつており、その期間は海面が低く、地下水面も低く、土地は乾燥していただろう。また、日本のデルタ堆積物は、一年に平均五〇mだけ自然の圧密作用のために堆積面が沈下するといわれている。すなわち、一〇〇年前には五〇〇m耗、一〇〇〇年前には五〇〇〇m耗だけ、現在より地面が高かつたということになる。平均値をそのままここにあてはめるわけにはいかないであろうが、昔は現在より地面が幾分なりと、高かつたことには間違いないまい。これらのこととが互いに影響し合つて、当時は現在と異り、乾燥した土地であつたのであろう。なお、これらの土地はは、当時もその周囲に対して現在同様の微低地であつたのだろうか。これは全く不明だが、不均質な堆積物（地層群）の圧密による地形の逆転（かっての高所が時代を経て周辺よりも低くなること）が起りうることだけ附言するに止どめておく。（浦田英夫）

参考文献

有明海研究グループ（一九六五）有明・不知火海域の第四系 地学团体研究会専報二号

渡正輝・井尻正二（一九六五）地球の歴史（改訂版）岩波書店

（一九六六）日本列島（第一版）岩波書店

小野忠義（一九六九）考古地理学からみた海岸平野の形成—本州西端地方— 日本地質学会シンポジウム「海岸平野」

土屋 勝（一九六一）気候の変動 恒星社厚生閣

和島誠一・麻生優・田中義昭（一九八四）北九州における後水期の海進海退について 資源研究報六二号六四一七二頁

山崎光夫（一九五五）北九州の先史時代以降の海岸線の移動 九大教養部地学研究報告一號 一一一七頁

一五九一、六五頁

五、花粉分析

多々良遺跡の自然環境の推定、条里製造構の存在の可否について検討する目的で、花粉分析をおこなつた。

一、試料と方法

分析試料は村落遺構の灌漑、排水溝と推定される溝田の西側壁の土層断面から五寸の間隔で採取した。とくに、この部分を調査の対象としてえらんだのは、現水田耕土下に存在する土器包含層が灰黒色を呈し、多量の有機物や化石花粉を包埋していると考えられたからである。

土層のprofileは次の通りである。

○—二〇四	灰褐色ローム（現水田耕土下層部は青灰色を帯びて固結し、酸化鉄の斑点が認められる。
二〇—五〇四	青灰色 mud
五〇—六五四	灰黒色 mud
六五—七五—四	淡黄灰色含礫粘土（圓錐）
	土器（土師・須恵）包含層

試料は、すべてKOH-acetolysis法によつて処理をおこない、常法の」とく、グリセリン・ゼリーに封じてブレバラートを製作した。

花粉頻度はAP（木本類）を基準として百分率を算出した。ただし、局地的に多産する *Salix*（ヤナギ属）はAPから除外した。なお、草本類(MAP)のうちGramineae(イネ科)については、花粉粒径を測定し、四五μ以上のものを栽培型、四五μ以下の小粒径のものを野生型として区別した。

二、結果と考察

一四点の試料について花粉分析を試みたが、花粉が検出されたのは現水田耕土と推定される表層部（○—二〇四）四点

の試料のみで、上器包含層からは殆んど化石花粉を検出することはできなかつた。

表層部の花粉構成は、第五表に示すことく、各層準を通じて *Pinus* が圧倒的に多く、常緑広葉樹は極めて劣勢である。人間干渉により徹底的に破壊された林相を忠実に反映しているとみなされる。高率に出現する *Salix* (ヤナギ属) は、水田の畦畔や水路の近傍に生育していたものであろう。*Gramineae* (イネ科) のうち、栽培型は一〇~二〇 cm の現耕土の下層

Pollen type	Depth (cm)				
	0 5 10 15 20	5 10 15 20	5 10 15 20	5 10 15 20	5 10 15 20
<i>Pinus</i> (マツ属)	96.0	95.3	88.5	87.3	
<i>Abies</i> (モミ属)	—	—	0.8	0.8	
<i>Cryptomeria</i> (スギ属)	2.4	1.9	4.6	4.2	
<i>Podocarpus</i> (マキ属)	0.8	0.9	0.8	0.8	
<i>Cyclobalanopsis</i> (アカガシ属)	—	1.9	3.8	5.1	
<i>Myrica</i> (ヤマモモ属)	—	—	—	0.8	
<i>Callicarpa</i> (ムラサキキブ属)	—	—	1.5	—	
<i>Mallotus</i> (アカメガシワ属)	0.8	—	—	—	
<i>Ericaceae</i> (ツツジ科)	—	—	—	0.8	
<i>Salix</i> (ヤナギ属)	75.8	80.2	126.7	66.9	
<i>Gramineae</i> (イネ科)	106.5	56.6	86.3	56.8	
A. Wild type	(94.1)	(41.3)	(40.0)	(14.9)	
B. Cultivated type	(12.4)	(15.3)	(46.3)	(41.9)	
<i>Typha</i> (カバ科)	—	—	0.8	—	
<i>Cyperaceae</i> (カヤツリグサ科)	—	1.9	—	—	
<i>Compositae</i> (キク科)	0.8	0.9	0.8	3.4	
<i>Caryophyllaceae</i> (ナデシコ科)	2.4	1.9	2.3	2.5	
<i>Chenopodium</i> (アガサ属)	—	0.9	—	—	
Spore (シダ類孢子)	16.9	23.6	11.5	22.0	
Z : AP / Z : NAP	0.78	1.16	0.98	1.18	

第5表 Pollen frequency (%)

Depth (cm)	0 ~ 5	5 ~ 10	10 ~ 15	15 ~ 20	20 ~ 25	25 ~ 30	30 ~ 35	35 ~ 40	40 ~ 45	45 ~ 50	50 ~ 55	55 ~ 60	60 ~ 65	65 ~ 70
loss on ignition (%)	5.71	5.25	4.77	4.53	3.81	4.42	4.38	4.54	4.99	5.21	5.85	6.81	6.32	5.76

第6表 loss on ignition of the samples for pollen analysis

部に多く、一方表層部では野生型が急激に増加している。これは、水稲耕作の中止とともに、ヒエ・アンカキ・スズメノヒエなど水湿地を好むイネ科雜草が急速に繁茂したことを暗示する。ところで、二〇cm以下の帶黒色の土器包含層に化石花粉がみとめられない事実はどのように解釈すべきであろうか。このトレンチが条里制の、地割に沿って掘られた水田の灌漑・排水用の溝であれば、当然、土砂が沈積する過程で、植物の遺体や当時栽培されたイネの花粉を包埋しているはずである。一般に、土壤は、有機物（腐植）の含量の増加に比例して黒味を増すと考えてよからう。南九州に発達する火山灰土壤「黒ボク」が多量の腐植を蓄積していることは周知の通りである。

したがつて、多々良の土器包含層も、その色調から推定して、かなりの量の腐植を蓄積していると考えられた。しかし、花粉は堆積環境によって分解することも考えられるので、有機物（腐植）包含層が常に花粉包含層であると断定することはできない。そこで、有機物の量を知るために全層の試料について灼熱損失量（loss on ignition）を測定した。結果は第6表に示す」とく、現水田耕土（〇一～〇三）の平均値は五・〇五%、土器包含層（二〇～六五）のそれは、五一・五%で、両者間に有意差はみとめられない。すなわち、土器包含層の黒色化は有機物の混入に由来するという推論は、花粉分析結果からも、灼熱減量の測定結果からも否定される。土器包含層のブレーラートからは、検鏡の際、多数の鉱物質の結晶？とおぼしきものが観察されたが、その実体については明らかでない。

筆者は、土器包含層には多量の草木灰？が混入しているのではないかと考えている。しかし、これは筆者の単なる推定にすぎない。黒色土壤の実体の解明には、土壤学的、鉱物学的検討が

必要と思われる。

三、まとめ

多々良遺跡の村落遺跡・溝田部分から得られた現水田耕土と、この下部に存在する平安～鎌倉時代と推定される土器包含層の一四点について花粉分析を行なつた。

現水田耕土の花粉構成は *Pinus* が圧倒的に優勢で、人为的に破壊された現在の植生を忠実に反映している。また、明らかにイネと推定される栽培型の *Gramineae* も多数検出された。しかしながら条里制遺構を推定される土器包含層からは、化石花粉は殆んど検出されず、土壤灼熱減量も現水田耕土と大差はない。これらの事実は、土器包含層を条里制地割にそつて設けられた水田の灌漑・排水溝であるとする考え方を否定するものである。

少なくとも、筆者の分担した調査内容からは、土器包含層を条里制遺構とみなす確証は得られなかつた。しかし、この結論は、村落遺構・溝田の試料の分析結果から導き出されたものであり、これを多々良遺跡全域に通用するには、更に多くの試料について検討する必要があろう。また、土器を包埋する帶黒色マトリックスの実体の検討は、多々良遺跡の性格を知る上に大きな意義をもつことを指摘しておきたい。

(畠中健一)

六、中世馬——多々良遺跡出土の馬齒を中心

鎌倉時代のものであろうといわれる馬齒四個について述べ、この四個の馬齒から当時のこの馬の大きさを推定したいのであるが、これは極めて至難なことである。諸材料を計測、比較して所見を述べることにする。

一、多々良馬齒の観察と測定値

四個の馬齒は同一個体のものと考えられ、下顎右側の第三前臼歯（P₃）、第四前臼歯（P₄）、第一後臼歯（M₁）、第二後臼歯（M₂）であつて第二前臼歯（P₂）、第三後臼歯（M₃）を欠いている。馬の臼歯は原則として六個で第一前臼歯後臼（P₁）はない。

各歯とも歯根部端は一部欠けてはいるが、ほぼ完全に近い。歯の長さから八九十才位のものと考えられ、性別はわからぬ。

歯冠長、歯冠幅（いずれも咬面における）および現長は次のようである。（単位mm）

歯冠長　歯冠幅　現長

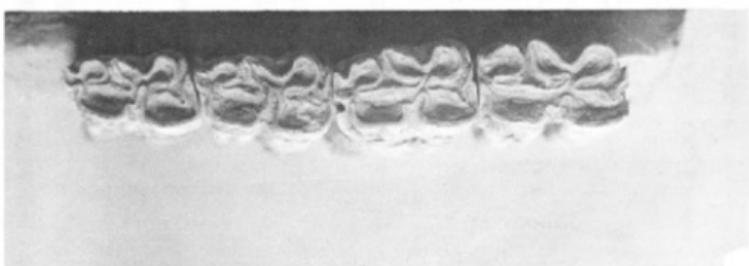
	P ₃	P ₄	M ₁	M ₂
歯冠長	一七・〇	一六・〇	五四・〇	
歯冠幅	二五・〇	一六・〇	六二・五	
現長	一一四・〇	一五・〇	四九・〇	
	一一四・〇	一四・〇	五三・〇	

また、歯冠部におけるP₃前端からM₂後端までの長さは一〇〇mmである。

各歯の内側のセメント質は腐蝕しているから幅は生体よりやや小である。



M₂ M₁ P₄ P₃



第39図 多々良遺跡出土馬の臼歯（下顎骨）咬面

二、日本在来馬および遺跡出土馬齒との比較

日本在来馬のうち、小形馬に属するトカラ馬、中形馬に属する御崎馬、諸遺跡出土の馬齒の測定値を示すと別表のよ
うである。（第7表）

これらの材料に用いられたものについて概略を書くと次のようである。

トカラ馬 体高一〇九・一二一cm、平均一一五cmの小形在来馬である。No.1は五才、メス、体高一〇九・五cmのも
のの歯であるが、No.2、No.4は体高不明ではあるがいずれもNo.1より大きく、体高一一五cmのものである。

都井御崎馬

御崎馬は宮崎県串間市都井岬に天然記念物として保存されているもので、その体高は、一二四・一
三八cm、平均一三一cmであって、日本の現存在来馬である木曾馬および北海道和種とともに中形馬に属している。明治
初期の日本馬（改良以前）は、これ程の大きさのものであった。

用いた材料は、数年前に都井で斃死したものであって、三才のオスである。若いので馬は口腔粘膜から露出していな
い状態にある。

北海道紋別コタン跡の馬

北海道山越郡長万部紋別コタン跡で、昭和二七年八月にアイヌ土俗品とともに出土し
たもの（採集者、当時八雲高校 田川賢蔵氏）であって、早大理工学部直良信夫教授が保管させていたものである。筆者が
昭和三〇年に測定した数値である。

アイヌは元来、馬を知らないから、アイヌ土俗品と併出したとはいえる、アイヌが古く飼養したものではなく、
後世の混入物と考えられるが、それでもこの歯は、北海道和種つまり中形馬の遺物であることはまちがいないも
のと考へる。

余山貝塚の馬齒

千葉県銚子市余山貝塚下層の砂層から出土したもので、殆んど一體分があつたといわれ、繩文

晩期のものである。早大直良教授が保管されていたものを昭和二〇年に測定したものである。歯は殆んど磨滅し、一二五才前後の老令馬であり、四肢骨の長さからその体高一一・cmと判定される小形馬である。

川越市土師住居跡の馬

埼玉県川越市第一中学校校庭の土師住居跡から出土したもので、直良教授の保管してお

られたものを昭和三〇年に測定した数値である。

五島宇久島馬歯 直良信大教授著「日本及び東アジア発見の馬歯」に掲載してある測定値である。

本標本は昭和二六年四月、長崎大学外山三郎氏より直良教授が調査を依頼されたものであつて、外山氏の書信によるところ、長崎県五島宇久島神ノ浦の小松林（海拔一〇〇m）を開墾中に、赤土層から出土したもので、附近に人家や墓地などはなく、馬歯には何等の伴出物もなかつたという。したがつて一つの時代に属するものか不詳であるが、馬歯そのもの、化石状態は貝塚またはそれ以前に近いから、昨今の埋蔵物ではないことは確かであろうと、直良教授は述べ、年令を八九〇才と推定している。

三、考 察

A) 多々良遺跡馬との比較(第7表)

一、トカラ馬との比較

多々良遺跡出土の歯をトカラ馬No.1・No.2と比較すると（表7） P_3 ・ P_4 ・ M_1 ・ M_2 の歯冠長はNo.1のそれらと、ほとんど等しく、 P_4 の前端から M_2 の後端に至る長さ、（冠長）もそれぞれ一〇〇・〇mmであつて等しい。No.1はメス五才でその体高は一〇九・五cmであり、トカラ馬が一〇九cm～一一cmの体高の範囲であるから、No.1はトカラ馬のうちでも最小のものである。また臼歯全長一五七mmであるから、No.1だけと比較すると多々良馬の体高は一一〇cmほどのものと考えられる。

しかし、No.1・No.4の三例は、No.1よりも大きいく体高一一五cm内外のものであるが、歯はNo.1よりも小さく、 P_3 ・ M_2 の歯冠長もそれぞれ八七・〇・mm八六・〇mm八八・五mmであつて、多々良遺跡馬、トカラ馬No.2より小で、臼歯全長についてもNo.1よ

り小である。

歯の大きさから馬の体高を推定することは前述のように極めて困難である。年令を重ねるにつれて短くなる傾向にある。

一、都井御崎馬との比較
歯の大きさ、全長からみて、多々良遺跡馬、トカラ馬四例よりもはるかに大である。

三、北海道紋別コタン跡の馬との比較

多々良遺跡馬、トカラ馬の歯より大きく、御崎馬のそれに近い、 $P_3 \sim M_2$ の歯冠長は、一〇 mm であつて、御崎馬の一三二 mm とともに多々良、トカラ馬よりもはるかに長い。白歯全長についても同様である。

紋別コタン跡の馬は御崎馬とともに日本在来馬の中形馬であると考えられるから、これらの測定値は妥当と考えられ、多々良遺跡馬は中形馬には入らないものと考えられる。

四、余山貝塚馬との比較

余山貝塚馬は四肢骨も出土し、その長さから体高一一一 cm 程のものである。多々良例より測定値はいずれも小であるが、二十五才前後の老令馬であるから、白歯全長も短くな

区分	年 令	性 別	左 右	長 P_3 幅		長 P_4 幅		長 M_1 幅		長 M_2 幅		$P_3 \sim M_2$ 歯冠長	$P_3 \sim M_2$ 白歯全長
多々良遺跡	—	—	R	—	27.0	25.0	24.0	24.0	14.0	—	100.0	—	
					16.0	16.0	15.0	14.0					
トカラ馬	No.1	5	♀	L	31.0	27.0	25.0	24.0	25.0	26.0	100.0	157.0	
					16.0	18.5	17.5	17.0	14.5	13.5			
タ	No.2	8	♀	L	26.5	24.0	23.2	20.5	21.4	26.0	87.0	138.0	
					15.0	16.0	15.0	14.0	13.0	13.0			
タ	No.3	15	♀	L	26.0	22.0	21.5	20.5	22.0	27.0	86.0	139.0	
					14.0	14.0	15.0	15.0	14.0	12.0			
タ	No.4	15	♂	L	27.5	23.5	23.0	20.0	22.0	27.0	88.5	143.0	
					15.0	16.0	16.5	16.0	14.0	13.0			
都井御崎馬	3	♂	L	—	33.0	32.0	31.0	26.0	31.0	(23.0)	113.0	166.0	
					15.0	18.0	17.0	16.5	15.5	(12.0)			
北海道紋別コタン跡	—	—	—	—	32.0	29.0	28.0	26.0	27.0	30.0	110.0	165.0	
					15.0	18.0	17.0	16.0	15.5	14.5			
余山貝塚(難文晚) 前後	25才	—	L	—	27.0	23.0	21.0	18.0	22.0	30.0	84.0	137.0	
					15.0	16.0	16.0	16.0	16.0	12.0			
タ	タ	—	R	—	27.0	22.0	21.0	18.0	21.0	31.0	82.0	—	
					14.5	15.5	16.0	16.0	16.0	14.0			
川越市土師作居跡 (十輪期)	—	—	—	—	28.0	26.0	25.0	23.0	24.0	29.0	98.0	152.0	
					17.5	18.0	19.0	18.0	17.0	15.0			
五島宇久島	—	—	L	—	31.5	25.5	25.7	22.7	22.5	29.0	96.0	156.9	
					13.4	17.0	17.2	16.7	15.5	13.6			
タ	—	—	R	—	31.3	25.1	24.6	22.8	23.1	28.9	95.6	155.8	
					16.4	17.2	17.5	16.0	15.3	14.2			

第7表 白歯(下顎)測定値

東トカラ馬 No.1 体高 109.5cm * () 未完成

つてゐる。

五、川越市上師住居跡の馬との比較 トカラ
No2 → No4 よりも大きいが、多々良例、トカラ1に近い
数値である。

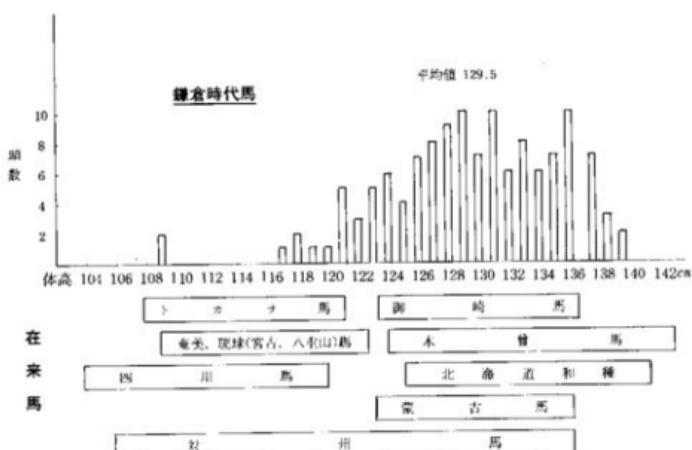
六、五島宇久島馬との比較 多々良遺跡馬の
歯冠長は宇久島例と大差なく、 P_4 、 M_2 の歯冠長は多々
良例がやや大である。

五島列島には明治の中葉まで小形馬が生在してい
たことは、『日本馬種略』(中央獸医学雑誌、二卷一、明治
二二年五月)に日本馬のうち小形馬として沖繩・隱岐
・土佐・五島・対馬が掲げられ、この地域にトカラ
馬程の小形馬が飼養されていたことでもわかる。

宇久島の馬齒は伴出物がなく時代不詳とされるが
直良博士がいわれるよう、たとえ貝塚時代のもの
でなく、後世のものとしても小形馬の存在は不思議
でない。

B) 中世鎌倉の馬

多々良遺跡の馬齒が中世鎌倉時代のものと推定さ
れるので、中世鎌倉時代馬の様相を述べてみること



第40図 中世鎌倉時代馬の推定体高と在来馬の体高の範囲

	下顎骨の高さ* 2	下顎骨の長さ単位mm* 1
鎌倉馬	215	390
トカラ馬No.1	191	340
No.2	197	340
No.3	197	358
No.4	198	333
御崎馬	207	396

* 1 関節突起における高さ

* 2 切歯外側歯槽線から下顎板後縁までの水平距離

オ8表 多々良馬下顎骨比較長

とする。

昭和二八年、東京大学理学部人類学教室鈴木教授らにより鎌倉市材木座から、鎌倉時代末期に属していると考えられる多数の馬骨が五五六体の人骨と全く無差別に、遊離した骨として、また一部骨格として混在した。

人骨については、一三三三年（元弘二年）五月新田義貞の鎌倉攻めの際のものを主体として、その後前の鎌倉・室町時代の戦闘の死者を若干含むものであろうと推断し、その人々の大半は幕府勢であれ、新田勢であれ、関東の住人であつたろうといわれる。したがつて伴出した馬の遺骨は当時の軍馬のものであつたと考えられる。筆者はこの馬骨を観察と測定の機会に恵まれた。

出土した四肢骨一二八本をもとにして当時の馬の体高を推定したところ、一〇九—一四〇cm、平均一二九・四七七±一・〇二〇cmとなつた。諸骨の推定体高を一括図示すると第40図のようになる。

比較のために、東南アジアにおける小形在来馬に属するトカラ馬、奄美琉球馬、四川馬（中國四川省）、中形馬に属する御崎馬、木曾馬、北海道和種、小形・中形の混然状態にある対馬の在来馬対州馬の体高の範囲を示してお

く。

鎌倉材木座の馬は主体は中形馬であるが、なかには小形馬も存在している。また両者の交雜による馬も含まれている。これらの馬は軍馬が主体であるから、当時において比較的大きなものが選ばれ使用されたものであり、一般馬としては小形馬もより多く存在していたと思われる。出土したものは四肢骨が多く、臼歯が附着している下顎骨は一例であった。

その P_2 ～ M_3 の歯冠長は一六二.一mmであり、都井御崎馬および紋別コタン跡馬に近い数値である。

下顎骨の大きさを知るために測定値を掲げると第7表ようになる。この測定値から見て鎌倉馬はトカラ馬より大きく、中形馬に入る。多々良馬は歯の大きさからトカラ No.1 と等しいから、この鎌倉馬より小さい。

またこの表によつてトカラ No.1 の歯が 2 ～ No.4 より臼歯全長が長いのにかかわらず、No.3 ～ No.4 より小さい馬であることが下顎骨の高さからわかる。

結論

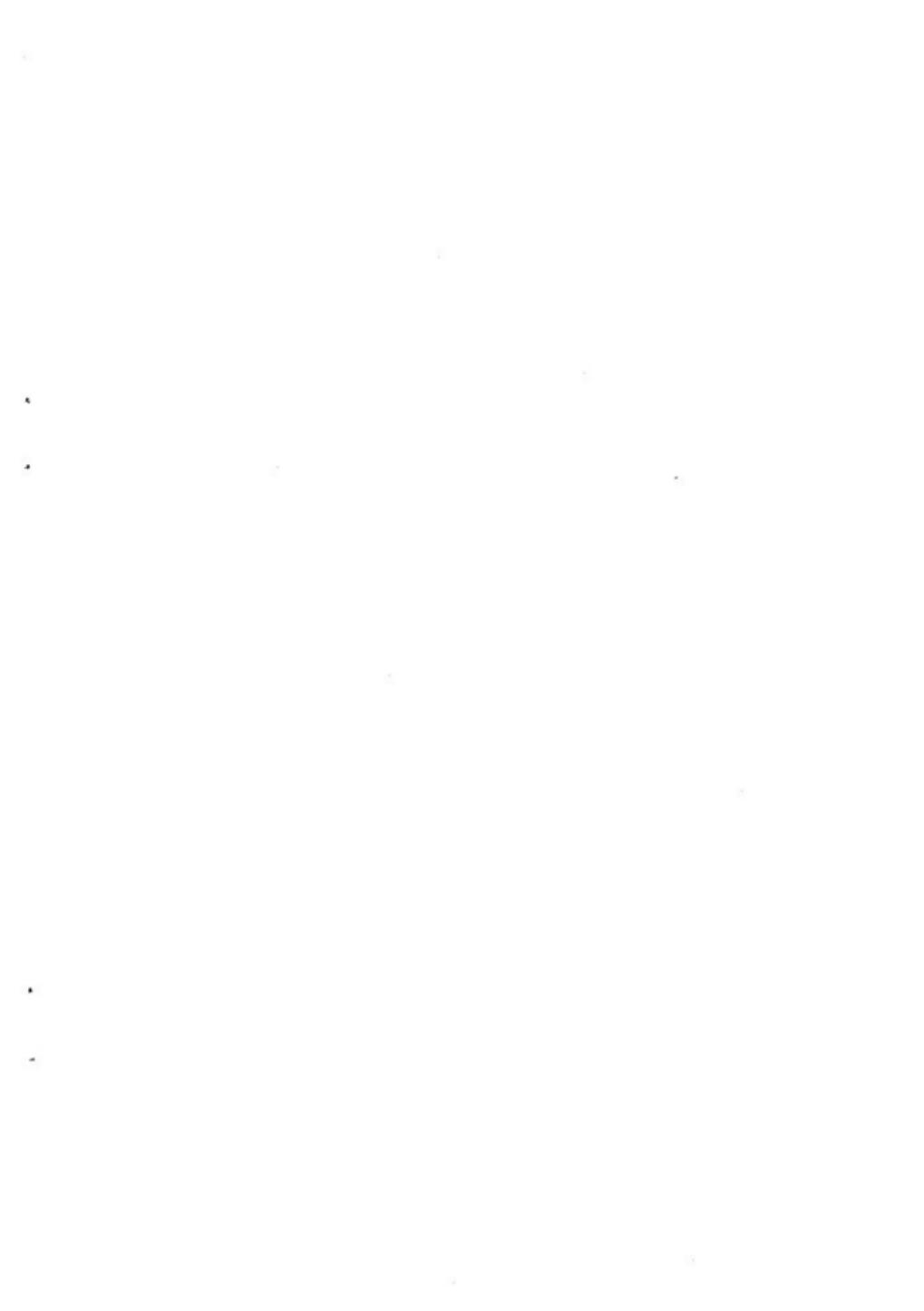
多々良遺跡の馬は馬齒の大きさの点から、小形馬の範囲に入るものと考えられる。

本邦に最初に、華南系の小形馬が縄文後晩期に現われ、次いで弥生期、古墳期に大陸系の中形馬が朝鮮半島を経由し導入されたものと考えられ、鎌倉時代には両者が混然とし、また交雜の形で存在するから、多々良遺跡の馬がたとえ小形馬であつても支障はない。小形馬、またはそれに近い馬であることは本標本が近世の馬のものではなく、鎌倉時代のものであると考えられる。

(林田重幸)

参考文献

- 今泉六郎（一八八九） 日本馬種略 中央農業学雑誌 二〇三
岡部利雄（一九五三） 日本在来馬の研究 学術振興会
直良信夫（一九七〇） 日本および東アジア発見の馬齒・馬骨 中央競馬会
林田重幸・山内忠平（一九五五） 九州在来馬の研究 I・トカラ馬について
林田重幸・山内忠平（一九五六） 九州在来馬の研究 II 対馬の在来馬について
林田重幸（一九五六） 日本古代馬の研究 人類進化雑誌 六四卷四号
林田重幸（一九五七） 中世日本の馬について 日本畜産学会報 一八卷五号
林田重幸（一九五八） 日本在来馬の系統 日本畜産学会報 二八卷六号
林田重幸（一九六六） 本邦家畜の起源と系統 金関丈夫博士古稀記念論文集「日本民族と南方文化」と南方文化」三七五頁—四〇二頁
平凡社





1) 遺跡遠景（南より）



2) 遺跡遠景（北より）





1) 竖穴 I



2) 大溝





1) 大溝(西より)

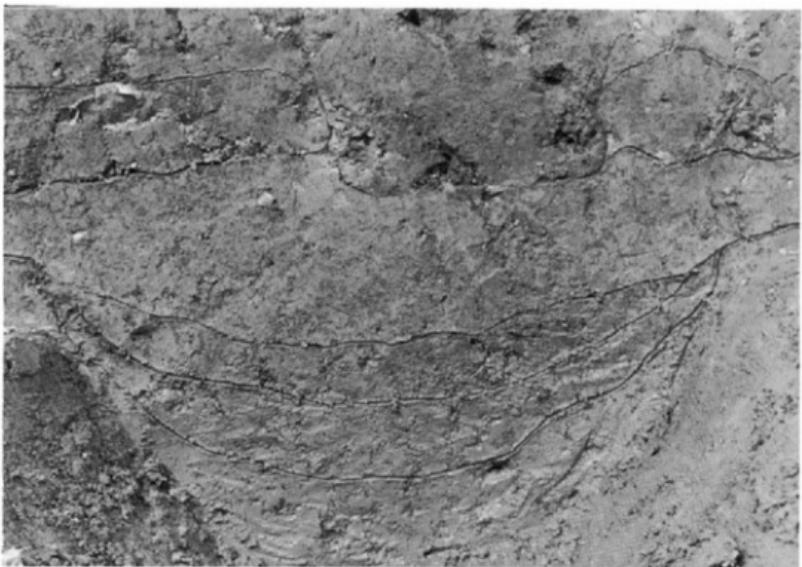


2) 大溝北側断面



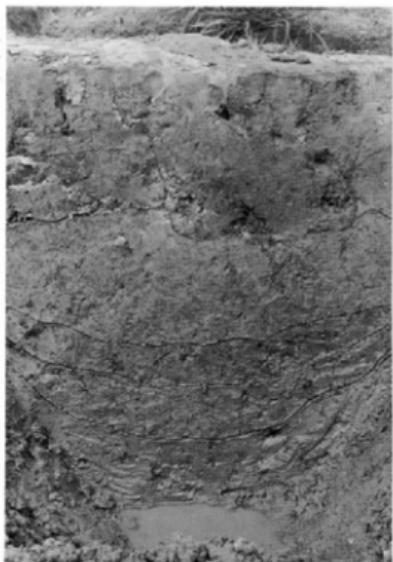


1) 小豎穴 I 断面



2) 溝 I 断面





1) 溝 I 断面



2) 溝 II 断面



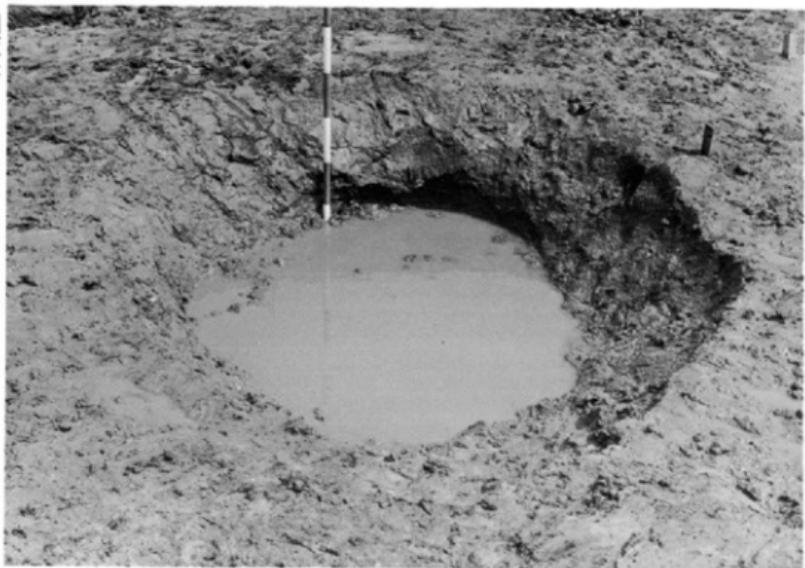


1) 村落遺構遠景



2) 溝I（南より）





1) 壓穴VI



2) 小壓穴XI

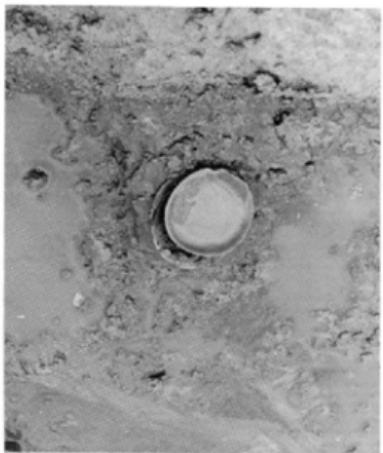




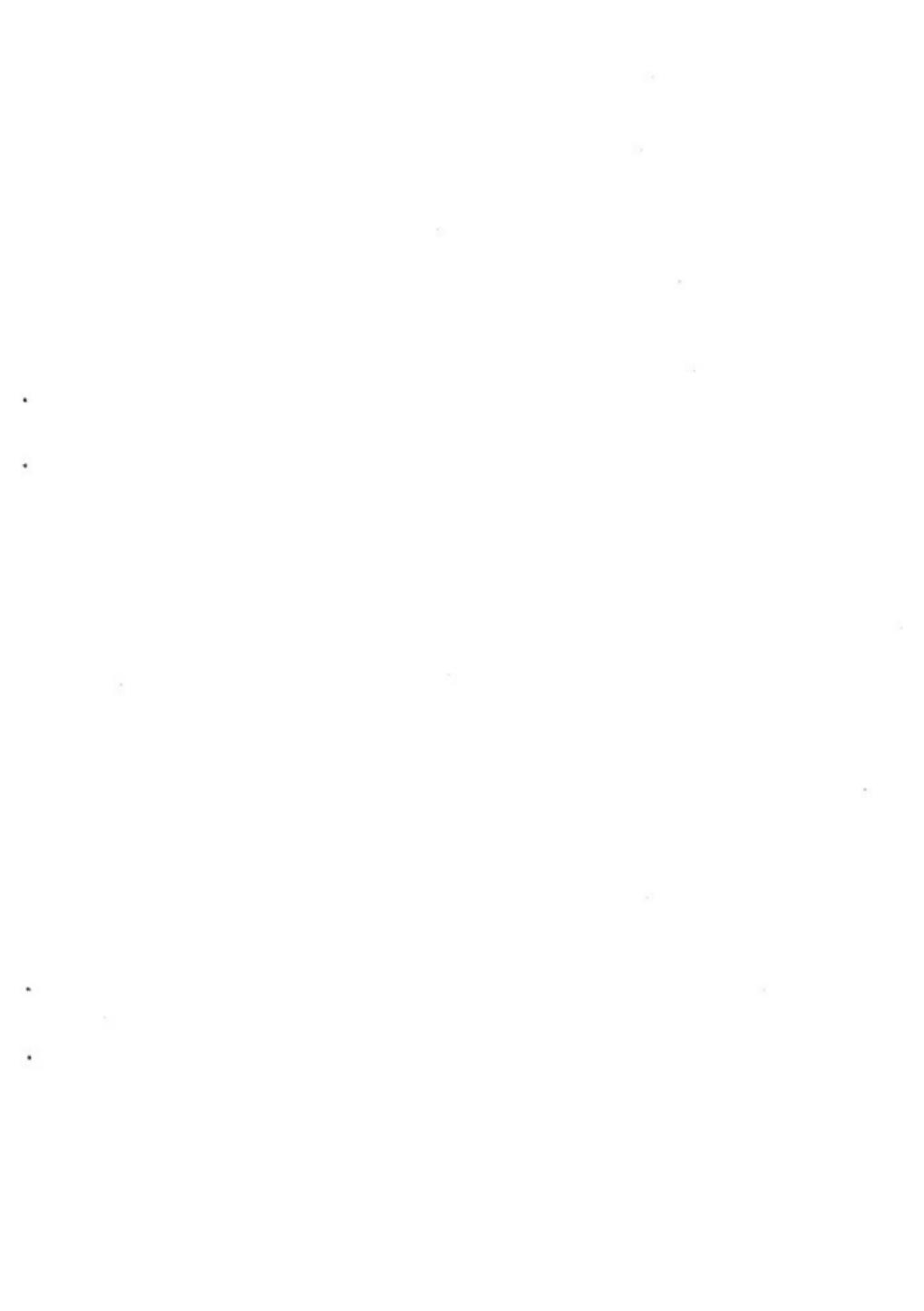
1) 土塗墓 I

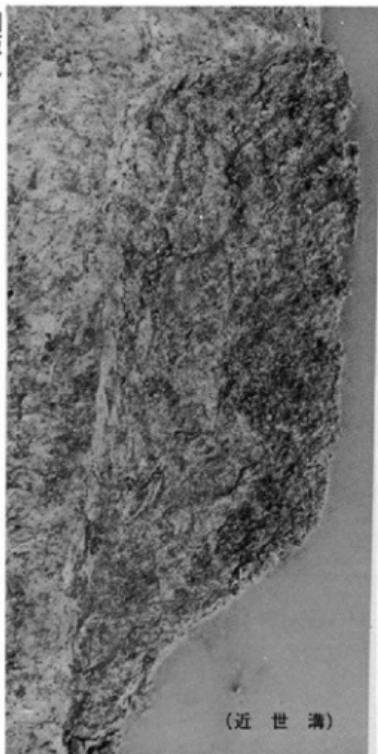


2) 壓穴VI遺物出土狀況（土堀・土飾皿）



3) 土塗墓II（副葬品）





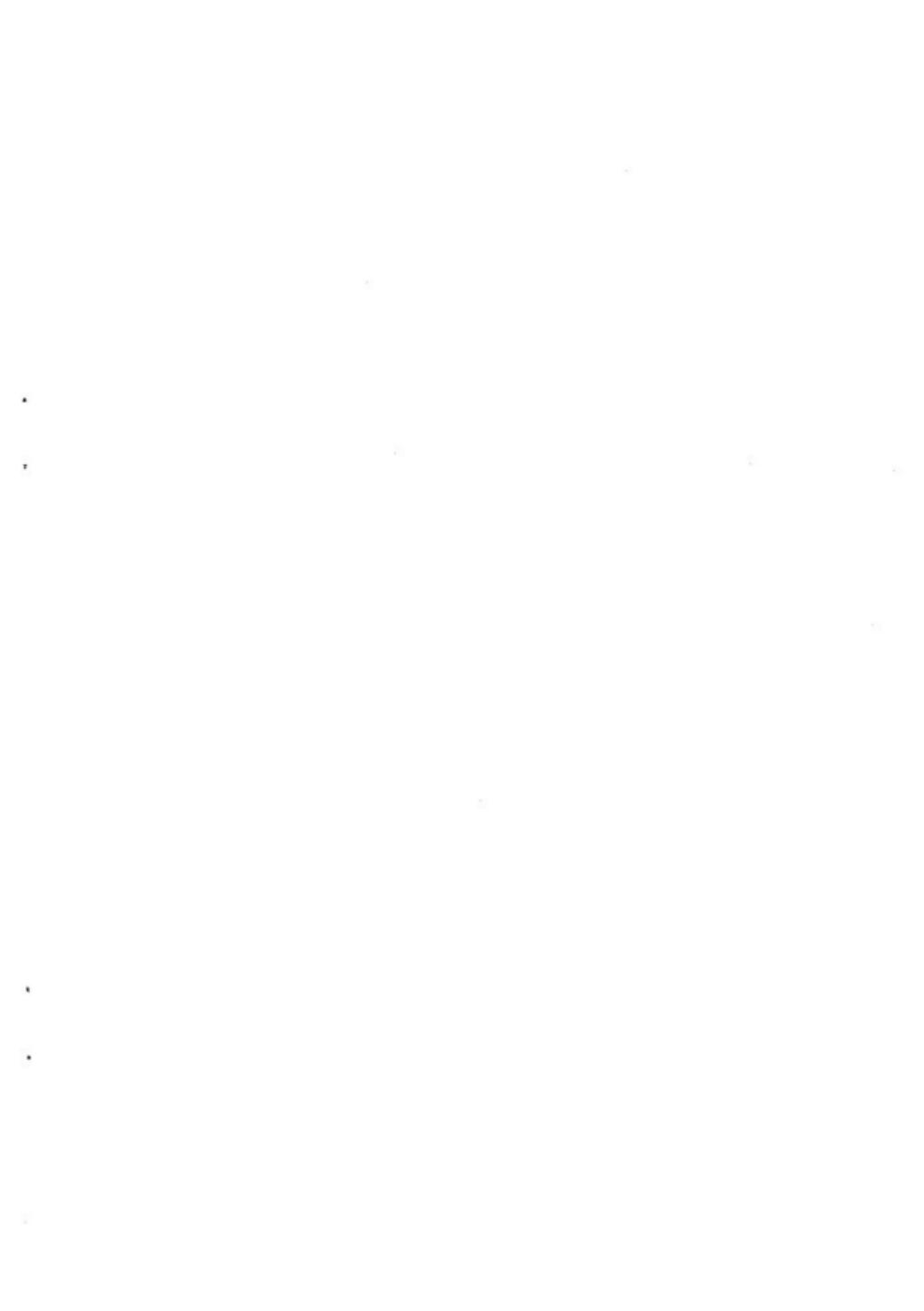
(近世溝)

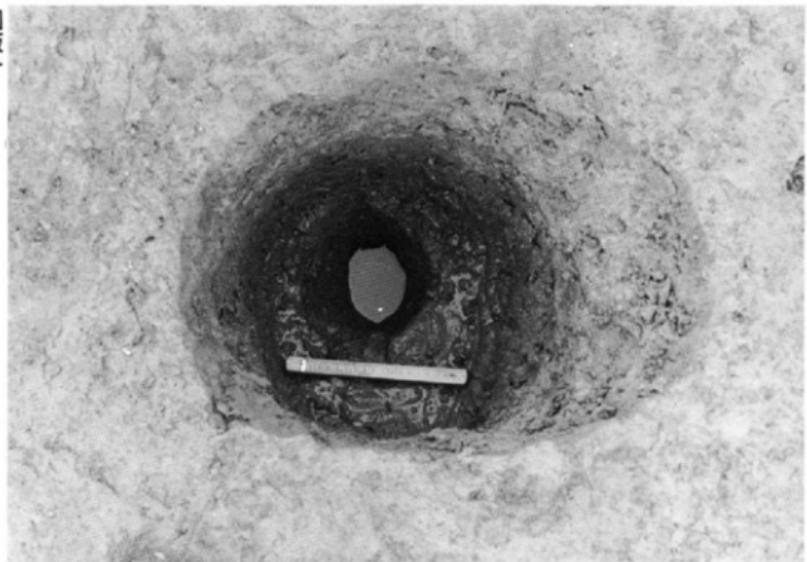
2) 製鉄遺構(発掘後)



(近世溝)

1) 製鉄遺構(発掘前)

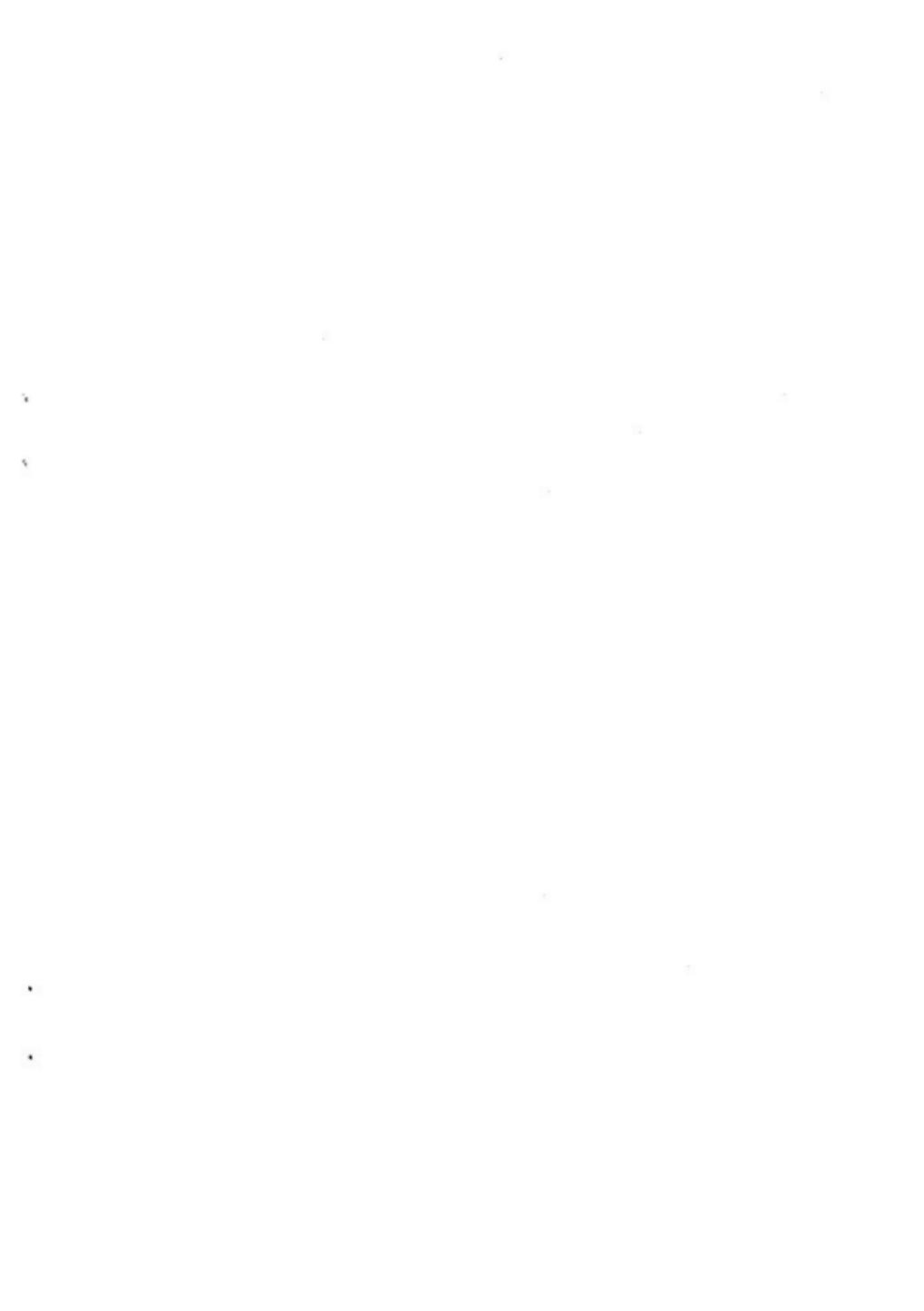


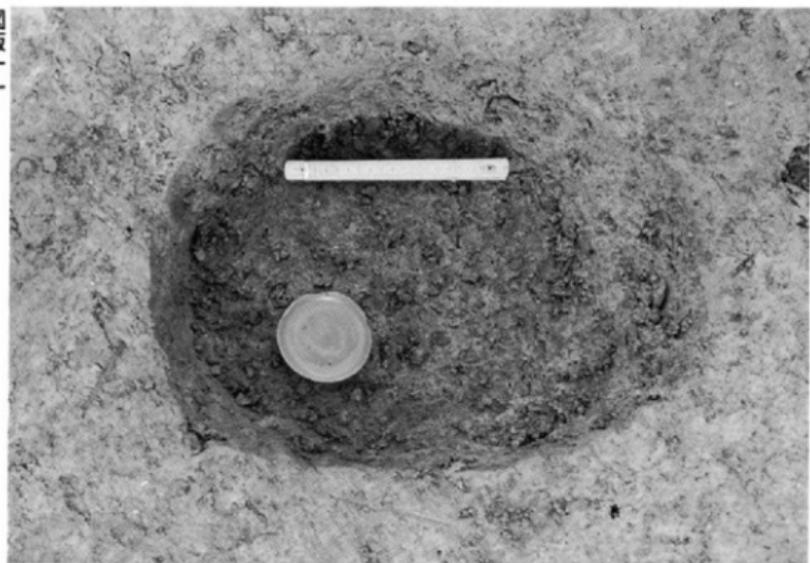


1) 柱穴 (P19)



2) 柱穴 (P15)

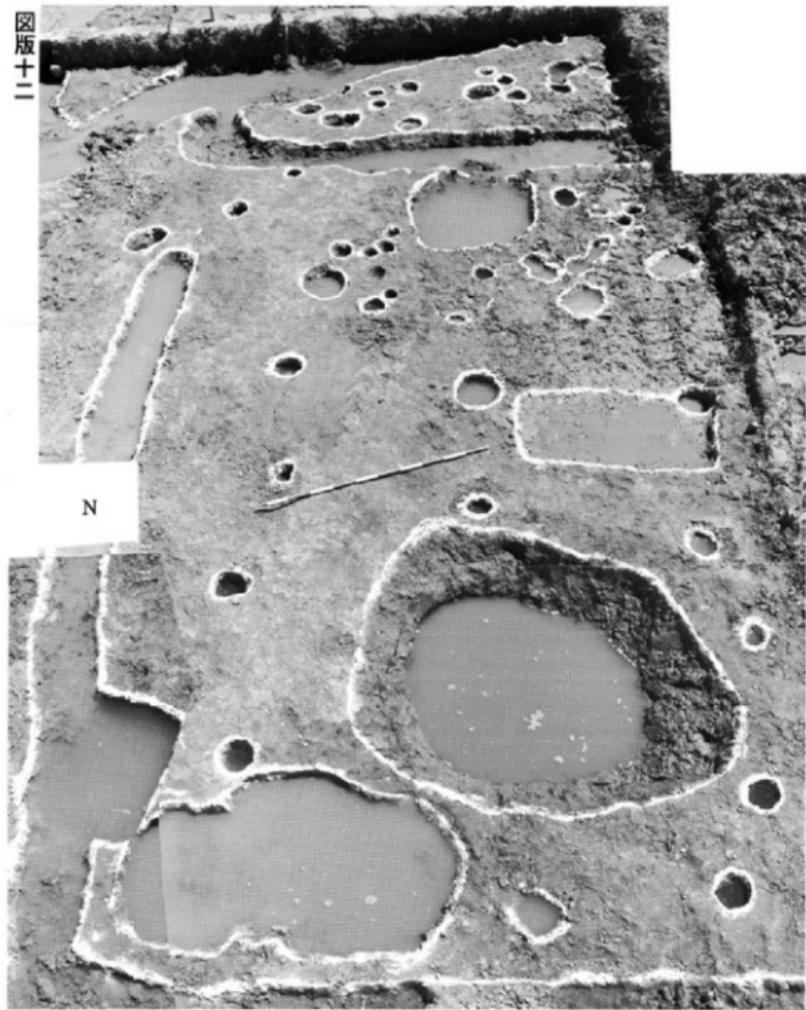




1) 柱穴内遺物出土状況



2) 溝III（石組施設）



村落遺構（発掘区東側）

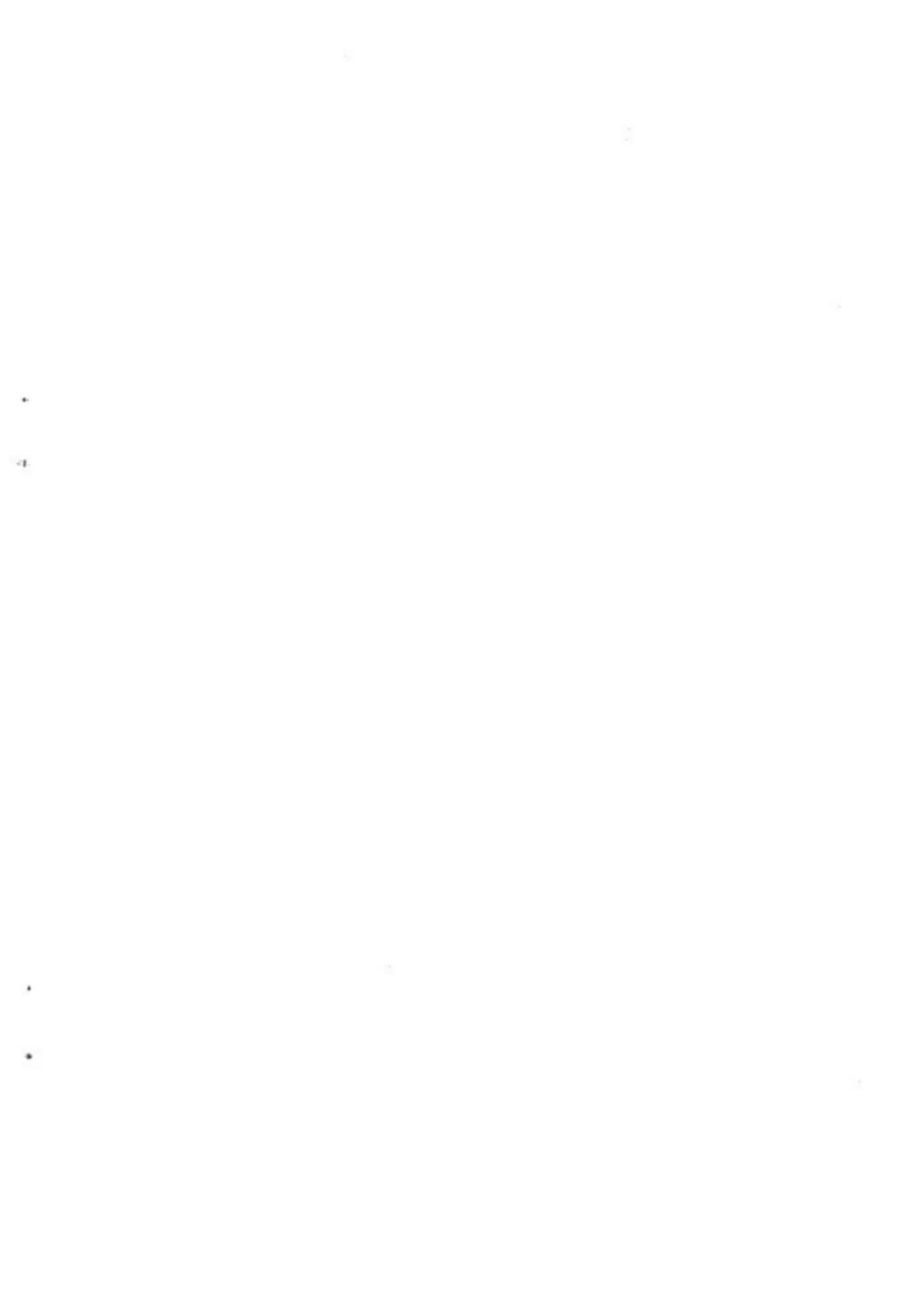




1) 小祠遠景（南より）



2) 小祠下層遺物出土状況

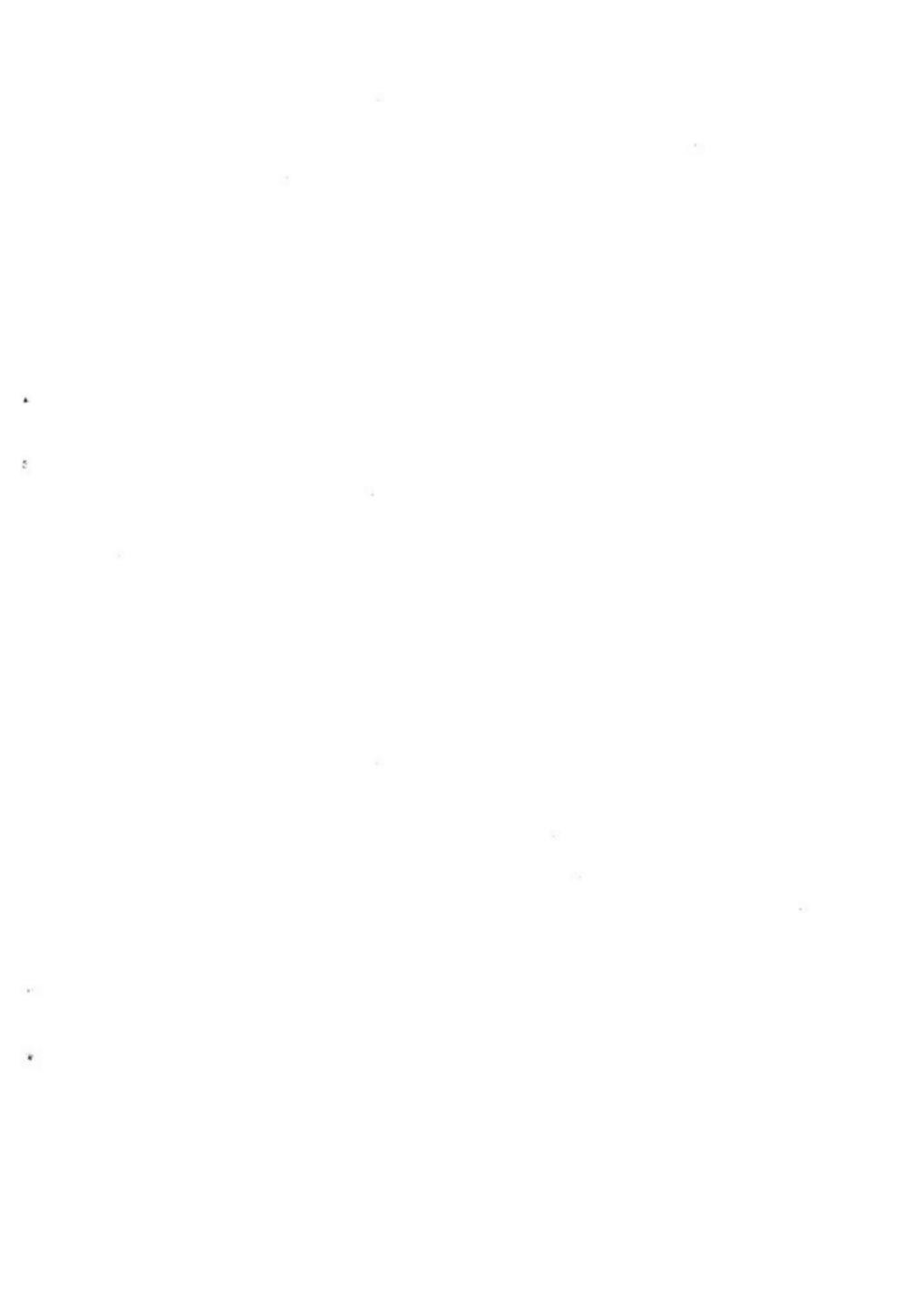




1) 小祠礎石（南より）

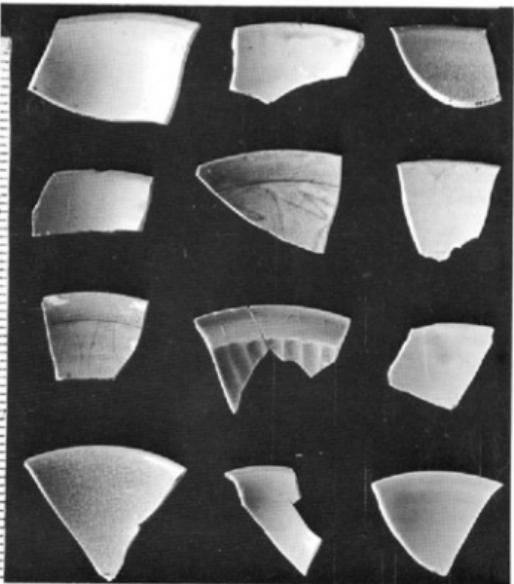


2) 础石部分

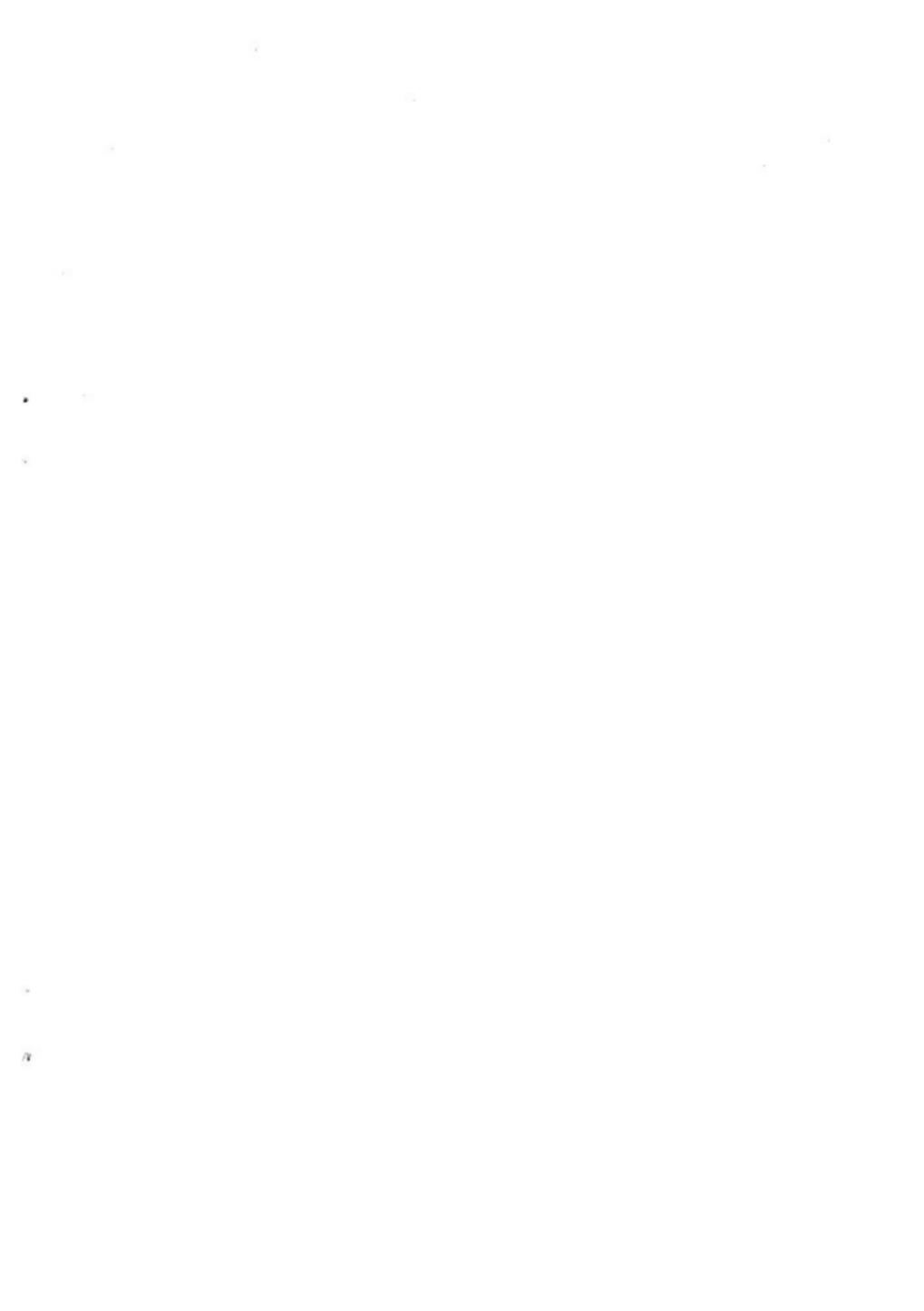


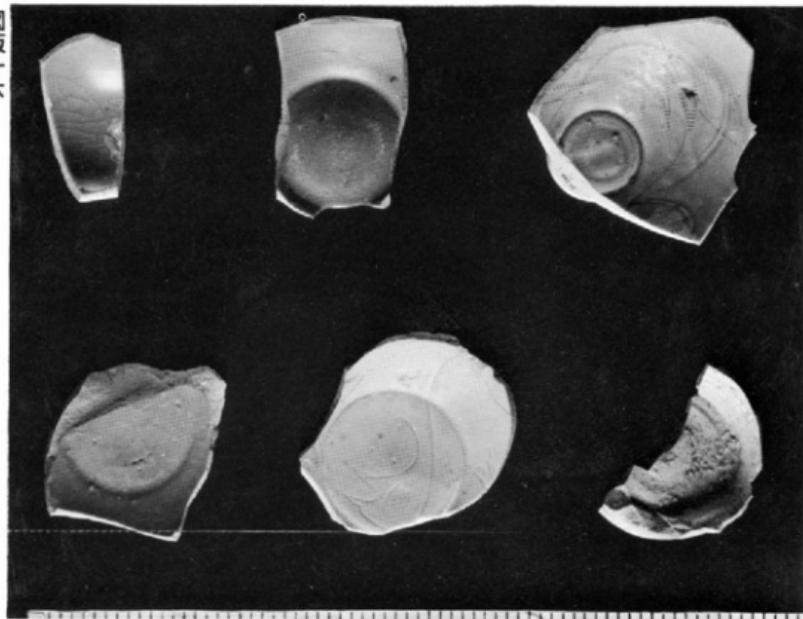


1) 磁器各種口縁部(表)



2) 磁器各種口縁部(裏)

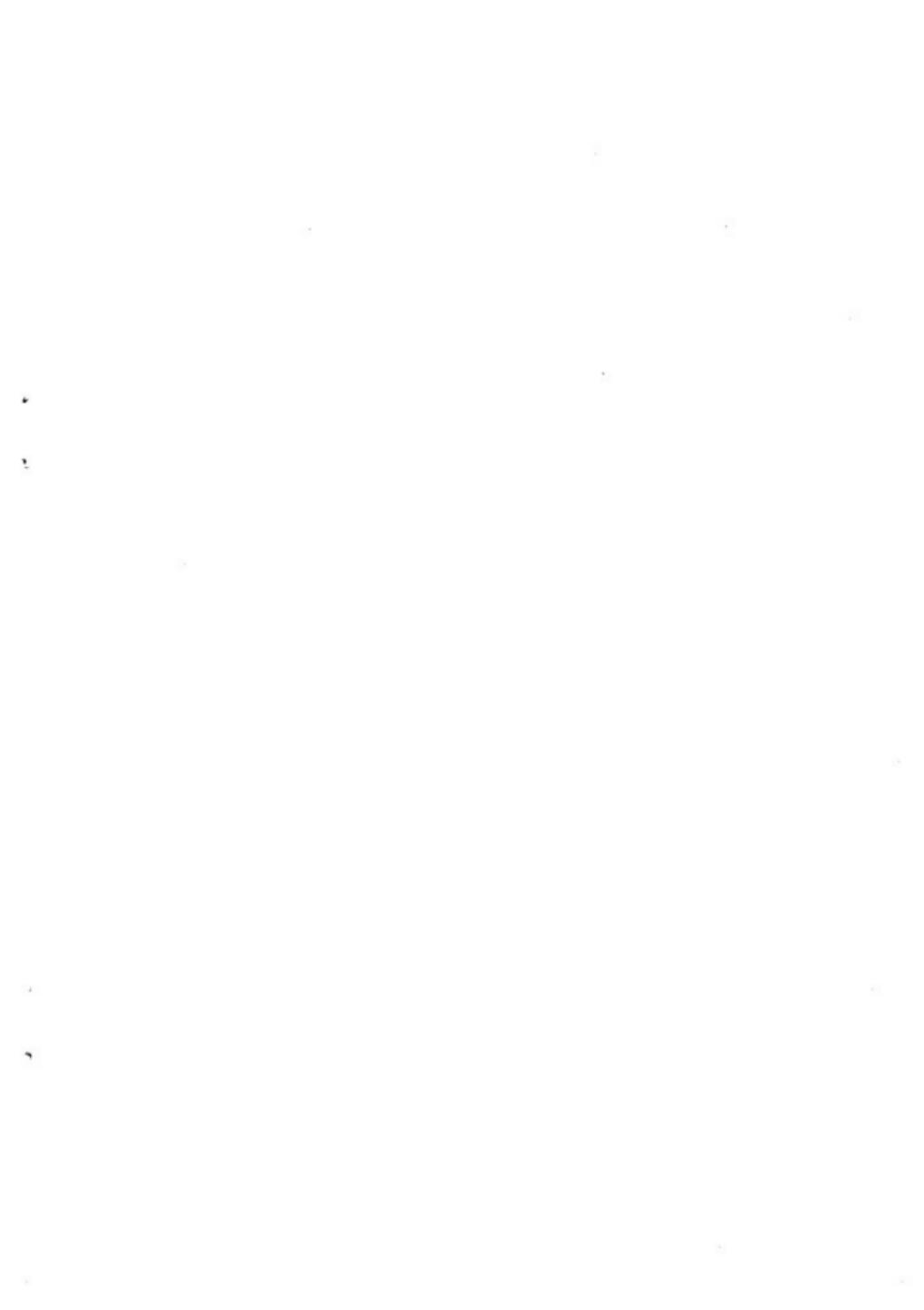


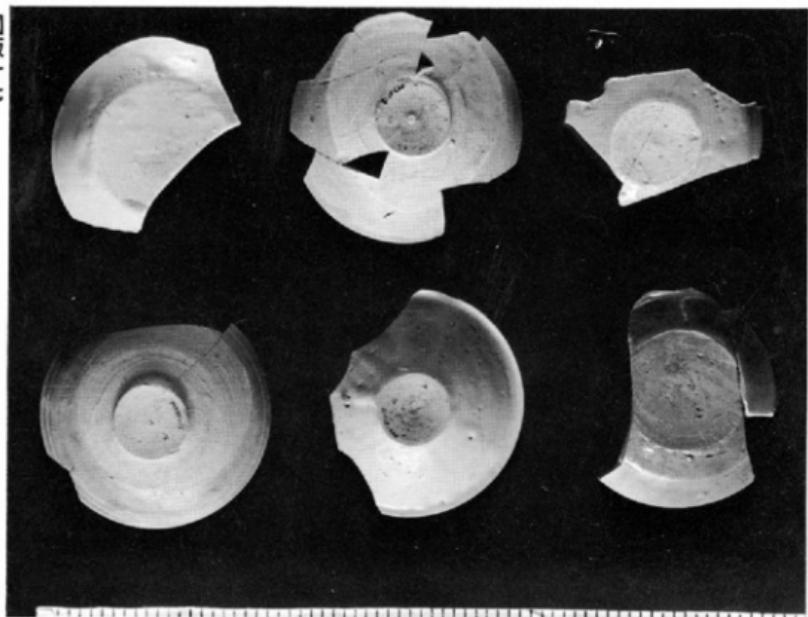


1) 磁器各種（見込み）

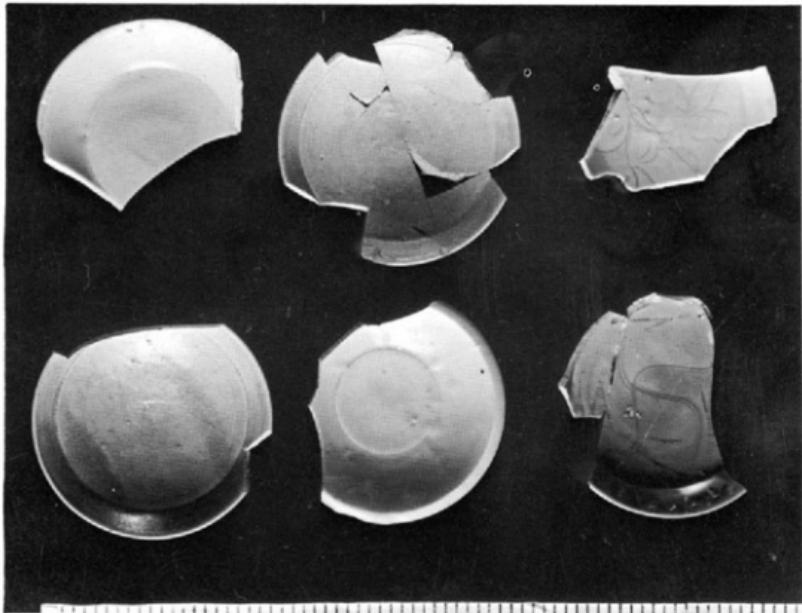


2) 磁器各種（高台）



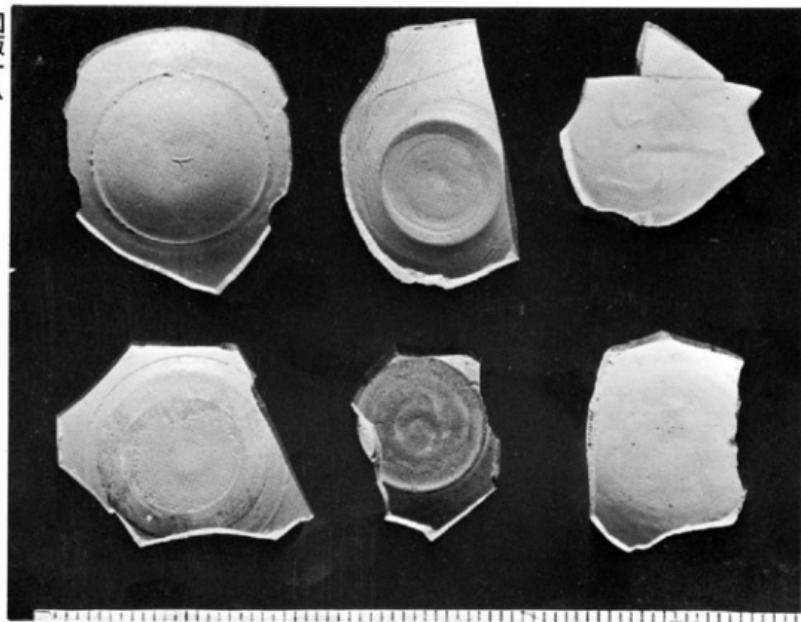


1) 磁器各種皿



2) 磁器各種皿





1) 磁器各種（塊形品）



2) 磁器各種（塊形品）

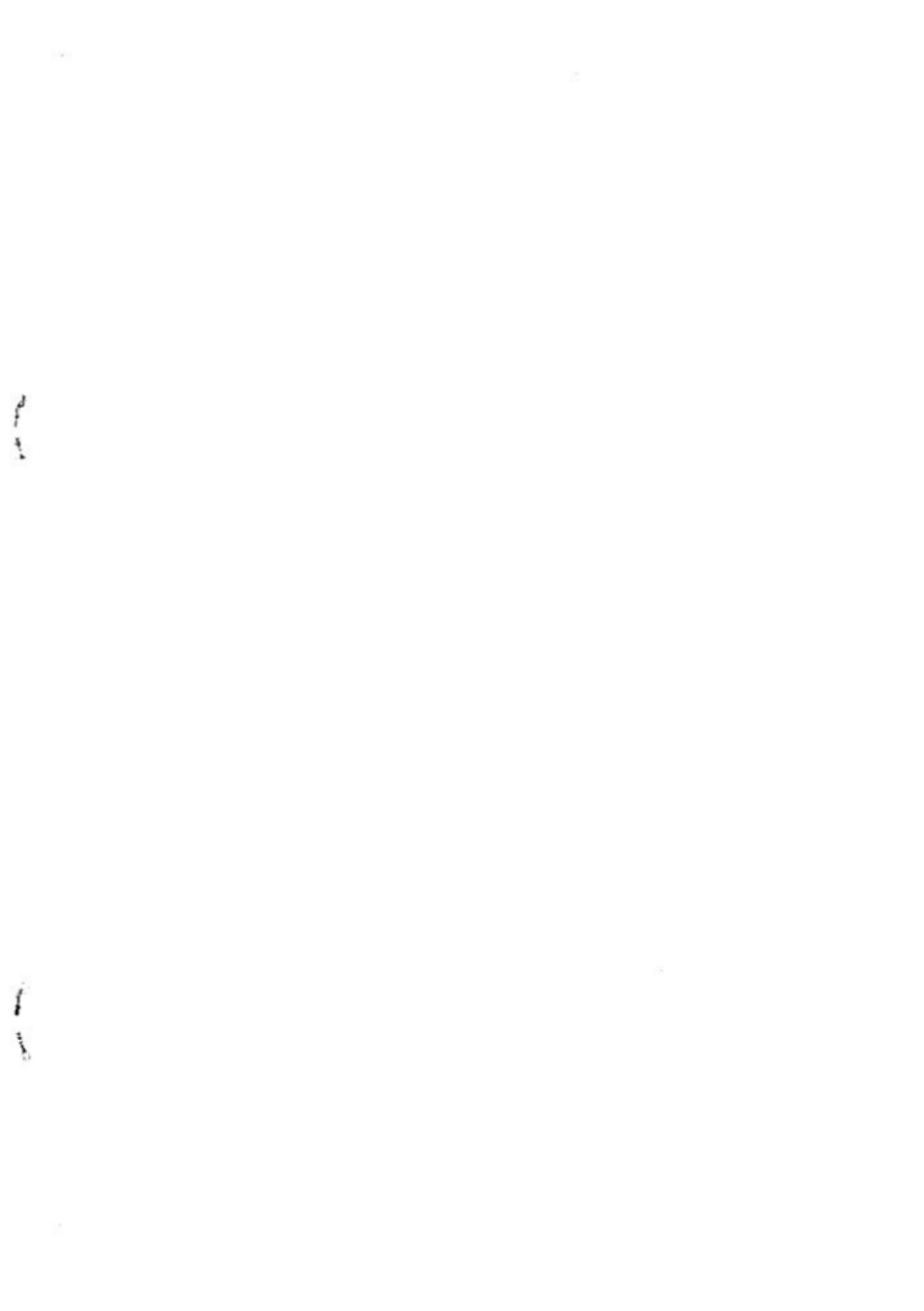


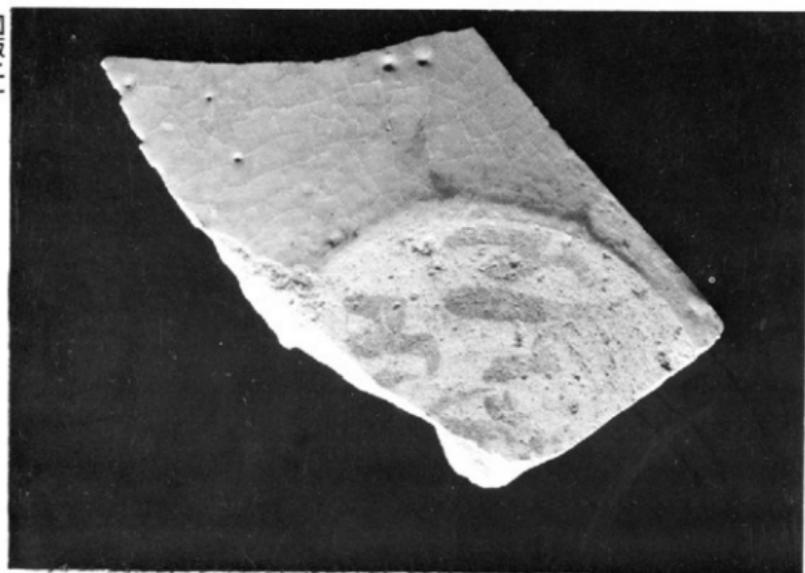


1) 耳付壺



2) 珠光青磁皿





1) 墨書青磁



2) 塚形土器附着の桺痕

調査委託者

福岡市都市開発局流通施設事務所

出口末人

辰市祐昭

渡田邦彦

味酒安信

大和孝悌

甲斐牧

渡辺広彦

安河内勝正

調査主体

福岡市 福岡市教育委員会

阿部源藏

豊島延治

結城一義

矢野正喜

青木崇

清水義彦

野上淳次

右橋博

山口俊二

林洋一

田辺郁代

大庭樹

大野弘道

古森照章

大和孝悌

甲斐牧

渡辺広彦

三宅安吉

岩下拓一

黒田安雄

下条信行

塩屋勝利

折尾学

柳田純孝

飛高憲雄

後藤直

田坂美代子

徳永照代

吉村範子

大山美智枝

島津義昭

福田征一

山崎純男

大藏富繁

多々良遺跡調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書

昭和47年3月31日 発行

編集 福岡市教育委員会
発行

印刷 株式会社 チューエツ
福岡工場